

富地原上瀬ヶ浦

—福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査—

宗像市文化財調査報告書

第 38 集

1 9 9 4

宗像市教育委員会

Fu zi wara jō se ga ura
富地原上瀬ヶ浦

—福岡県宗像市富地原所在遺跡の発掘調査—

宗像市文化財調査報告書

第 38 集

富地原上瀬ヶ浦遺跡
富地原惣原遺跡
富地原岩野B遺跡



宗像市教育委員会

序 文

宗像市は、福岡市・北九州市の中間に位置し、両大都市への通勤圏となっており、両政令都市間の中核拠点都市としての様相を濃くしています。本市はこのような状況の中で、施策の柱とも言える「学術・文化・国際交流都市」を目指して着実に歩みを続けるとともに、他方では、農用地の計画的利用を進めており、県営ほ場整備事業や農業基盤整備等の農業振興にも力をそいでいます。

平成4年度に発掘調査を実施した富地原上瀬ヶ浦遺跡、富地原惣原遺跡、富地原岩野B遺跡は、宗像市の南東部に位置し、鞍手郡宮田町に近く、広陵台団地に隣接した丘陵に分布しています。

発掘調査は、この地区のほ場整備事業に伴う緊急発掘調査として実施され、この地域の墳墓や集落跡を発見することができました。

この地域では、これまでの発掘調査で墳墓に関わる遺跡が多く発見されていますが、集落跡の発見は、今後の古代のむなかたを解明する上で貴重な調査となりました。

本書が、広く文化財の保護および学術研究の資料として貢献することを念願するとともに、発掘調査に参加された方々の労苦と、ご協力いただいた関係者一同に対し心から感謝の意を表する次第であります。

平成6年3月31日

宗像市教育委員会
教育長 森下照清

例　　言

1. 本書は、平成4年度に国・県の補助を受けて実施した宗像市内遺跡発掘調査のうち、富地原上瀬ヶ浦遺跡・富地原惣原遺跡・富地原岩野B遺跡についての報告書である。
2. 発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となった。
3. 本書使用の図の作製、製図は安部裕久、岡崇、牧野淑子、武田博子が行った。
4. 本書使用の写真撮影は安部、岡が行った。
5. 本書の執筆は、1・2・4章を安部が、3章を岡が、それぞれ担当した。
6. 図版の遺物番号は、実測図番号と一致する。(例: 11-2…第11図2)
7. 図版、挿図に使用した遺構略号はつきの通りである。
SB: 住居跡及び掘立柱建物、SD: 磁、SK: 土坑、SO: 古墳、SP: 柱穴、ST: 墓壙
8. 本書の編集は、安部・岡が行った。

本　文　目　次

第1章 序　　説	1
1 調査の経過	1
2 位置と環境	3
第2章 富地原上瀬ヶ浦遺跡	5
1 はじめに	5
2 遺構	6
3 出土遺物	12
4 まとめ	15
第3章 富地原惣原遺跡	19
1 はじめに	19
2 遺構	22
3 出土遺物	31
4 富地原地区の史料	38
5 まとめ	38
第4章 富地原岩野B遺跡	40
1 はじめに	40
2 集落跡	42
3 墳墓	56
4 まとめ	62

挿 図 目 次

第1図	富地原地区周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第2図	富地原上瀬ヶ浦遺跡事業計画図 (1/1,000)	5
第3図	富地原上瀬ヶ浦遺跡遺構配置図 (1/300)	6
第4図	富地原上瀬ヶ浦遺跡 SO 1 主体部実測図 (1/40)	7
第5図	富地原上瀬ヶ浦遺跡 SO 2 主体部実測図 (1/40)	9
第6図	富地原上瀬ヶ浦遺跡 SO 3 主体部実測図 (1/40)	10
第7図	富地原上瀬ヶ浦遺跡 SO 4 主体部実測図 (1/40)	11
第8図	富地原上瀬ヶ浦遺跡 SK 5 実測図 (1/30)	12
第9図	富地原上瀬ヶ浦遺跡出土遺物実測図 I (鉄器1/2, 装身具2/3)	13
第10図	富地原上瀬ヶ浦遺跡装身具法量図 (単位:mm)	14
第11図	富地原上瀬ヶ浦遺跡出土遺物実測図 II (1/3)	15
第12図	富地原上瀬ヶ浦遺跡石室プラン法量計測図 (1/60)	16
第13図	富地原上瀬ヶ浦遺跡石室プラン比較図 (1/80)	17
第14図	富地原惣原遺跡明治33年地形測量図 (1/25,000)	19
第15図	富地原惣原遺跡事業計画図 (1/2,000)	20
第16図	富地原惣原遺跡遺構配置図 (1/300)	21
第17図	富地原惣原遺跡 SB 1 実測図 (1/80)	22
第18図	富地原惣原遺跡 SB 2 実測図 (1/80)	22
第19図	富地原惣原遺跡 SB 3 実測図 (1/80)	23
第20図	富地原惣原遺跡 SB 4 実測図 (1/80)	23
第21図	富地原惣原遺跡 SB 5 実測図 (1/80)	24
第22図	富地原惣原遺跡 SB 6 実測図 (1/80)	24
第23図	富地原惣原遺跡 SB 7 実測図 (1/80)	25
第24図	富地原惣原遺跡 SK 1 実測図 (1/80)	26
第25図	富地原惣原遺跡 SK 2 実測図 (1/40)	26
第26図	富地原惣原遺跡 SK 3 実測図 (1/40)	27
第27図	富地原惣原遺跡 SK 4 実測図 (1/40)	27
第28図	富地原惣原遺跡 SK 5 実測図 (1/40)	28
第29図	富地原惣原遺跡 SK 6 実測図 (1/80)	28
第30図	富地原惣原遺跡 SK 7 実測図 (1/80)	28
第31図	富地原惣原遺跡 SK50実測図 (1/80)	28
第32図	富地原惣原遺跡 SK52実測図 (1/40)	29
第33図	富地原惣原遺跡 ST 8 実測図 (1/20)	29
第34図	富地原惣原遺跡 SK 9 · SD68実測図 (1/80)	30
第35図	富地原惣原遺跡 SB 7 · P 9 出土遺物実測図 (1/3)	31
第36図	富地原惣原遺跡 SK 2 · 3 · 4 出土遺物実測図 (1/3)	32
第37図	富地原惣原遺跡 SK 5 · 6 · 7 出土遺物実測図 (1/3)	33

第38図	富地原惣原遺跡 ST 8・SK50・52出土遺物実測図 (1/3)	34
第39図	富地原惣原遺跡 SK50鉄器実測図 (1/2)	34
第40図	富地原惣原遺跡 SK 9・SD68出土遺物実測図 I (1/3)	35
第41図	富地原惣原遺跡 SK 9・SD68出土遺物実測図 II (1/3)	36
第42図	富地原岩野B遺跡事業計画図 (1/2,000)	40
第43図	富地原岩野B遺跡遺構配置図 (1/500)	41
第44図	富地原岩野B遺跡 SB 1 実測図 (1/80)	42
第45図	富地原岩野B遺跡 SB 1 出土遺物実測図 (1/3)	42
第46図	富地原岩野B遺跡 SB14実測図 (1/80)	43
第47図	富地原岩野B遺跡 SB16実測図 (1/80)	44
第48図	富地原岩野B遺跡 SB18実測図 (1/80)	45
第49図	富地原岩野B遺跡 SB16出土遺物実測図 (1/3)	45
第50図	富地原岩野B遺跡 SB18出土遺物実測図 (1/3)	45
第51図	富地原岩野B遺跡 SB 2・3・11・12実測図 (1/80)	46
第52図	富地原岩野B遺跡 SB 9・10・4 (1/80) 及び SB 9 焼土坑遺物出土状況 (1/20)	48
第53図	富地原岩野B遺跡 SB 2 出土遺物実測図 (1/3)	48
第54図	富地原岩野B遺跡 SB10出土遺物実測図 (1/3)	48
第55図	富地原岩野B遺跡 SB 9 出土遺物実測図 (1/3)	49
第56図	富地原岩野B遺跡 SB 5・19実測図 (1/80)	50
第57図	富地原岩野B遺跡 SB 5 出土遺物実測図 I (2/3)	50
第58図	富地原岩野B遺跡 SB 5 出土遺物実測図 II (1/3)	51
第59図	富地原岩野B遺跡 SB 5 出土遺物実測図 III (1/3)	52
第60図	富地原岩野B遺跡 SB15実測図 (1/80)	53
第61図	富地原岩野B遺跡 SB17実測図 (1/80)	54
第62図	富地原岩野B遺跡 SB17出土遺物実測図 (1/3)	55
第63図	富地原岩野B遺跡 SO 8 主体部実測図 I (1/60)	56
第64図	富地原岩野B遺跡 SO 8 主体部実測図 II (1/60)	57
第65図	富地原岩野B遺跡 SO 8 出土遺物実測図 I (1/4)	58
第66図	富地原岩野B遺跡 SO 8 出土遺物実測図 II (1/4)	59
第67図	富地原岩野B遺跡 SO 8 出土遺物実測図 III (1/3)	60
第68図	富地原岩野B遺跡 SO 8 出土遺物実測図 IV (1/3)	61
第69図	富地原岩野B遺跡 SK20・21実測図 (1/40)	62
第70図	富地原岩野B遺跡 SK20・21出土遺物実測図 (1/3)	62

表 目 次

第1表 平成4年度県営は場整備事業にかかる発掘調査一覧表	1
第2表 富地原上瀬ヶ浦遺跡遺構計測表Ⅰ	8
第3表 富地原上瀬ヶ浦遺跡遺構計測表Ⅱ	12
第4表 富地原上瀬ヶ浦遺跡出土遺物計測表Ⅰ	14
第5表 富地原上瀬ヶ浦遺跡出土遺物計測表Ⅱ	15
第6表 富地原惣原遺跡出土遺物計測表	37
第7表 富地原岩野B遺跡遺構対数表	41
第8表 富地原岩野B遺跡遺構計測表	42

図 版 目 次

図版1 富地原地区周辺遺跡航空写真（昭和53年6月撮影 縮尺1:12,500）	
図版2 上 富地原上瀬ヶ浦遺跡遠景（北から）	
下 富地原上瀬ヶ浦遺跡全景	
図版3 左上 富地原上瀬ヶ浦遺跡SO 1 主体部	
右上 富地原上瀬ヶ浦遺跡SO 2 主体部	
左下 富地原上瀬ヶ浦遺跡SO 3 主体部	
右下 富地原上瀬ヶ浦遺跡SO 4 主体部	
図版4 富地原上瀬ヶ浦遺跡出土遺物	
図版5 1 富地原惣原遺跡全景（東から）	
2 富地原惣原遺跡南側掘立柱建物群	
3 富地原惣原遺跡SB 1	
4 富地原惣原遺跡SB 2	
5 富地原惣原遺跡全景（南から）	
6 富地原惣原遺跡SB 3	
7 富地原惣原遺跡SB 4・SB 5	
8 富地原惣原遺跡SB 6	

- 図版 6 1 富地原惣原遺跡SK 2
2 富地原惣原遺跡SK 4
3 富地原惣原遺跡SK 7
4 富地原惣原遺跡SK50
5 富地原惣原遺跡SK52
6 富地原惣原遺跡ST 8
7 富地原惣原遺跡SK 9・SD68
- 図版 7 富地原惣原遺跡出土遺物 I
- 図版 8 富地原惣原遺跡出土遺物 II
- 図版 9 富地原惣原遺跡出土遺物 III
- 図版10 上 富地原岩野B遺跡遠景（東から）
下 富地原岩野B遺跡全景
- 図版11 左上 富地原岩野B遺跡SB18円形住居跡
右上 富地原岩野B遺跡SB16円形住居跡
左中 富地原岩野B遺跡SB 6 方形住居跡
右中 富地原岩野B遺跡SB 9 捨立柱建物跡
左下 富地原岩野B遺跡SB17方形住居跡
右下 富地原岩野B遺跡SB 9 付設焼土坑
- 図版12 富地原岩野B遺跡出土遺物 I
- 図版13 富地原岩野B遺跡出土遺物 II

第1章 序 説

1. 調査の経過

宗像市は、福岡市・北九州市の中間に位置しており、両大都市の通勤圏内にあって急速なベッドタウン化が進み、宅地造成や道路整備など開発の波が押し寄せている。かつて純農村であった本市においても農業経営などに近代化の波が押し寄せ、都市近郊型の複合経営を目指す生産基盤の整備が進められている。今回の調査は、農業基盤整備事業の一つである富地原地区県営ほ場整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。事業規模が大型であるために、確認された遺跡の現状保存は困難を極めており、盛土等による可能な限りの保存対策を講じてきたが、消滅が必至の区域については記録保存という形で対処した。本書は平成4年度に実施された富地原地区県営ほ場整備事業に伴う4件の緊急発掘調査のうち、富地原上瀬ヶ浦遺跡、富地原惣原遺跡、富地原岩野B遺跡の3件について報告するものである。

富地原上瀬ヶ浦遺跡は、福岡県宗像市大字富地原（字上瀬ヶ浦）882番地周辺に所在するもので、標高44mから49mの独立丘陵上に造営されている。調査は、ほ場整備事業で切り盛り調整がとれず、削平される当丘陵3,360m²について試掘調査を実施。遺構の確認された1,000m²について調査区域を設定し、緊急発掘調査を実施した。その結果、当遺跡内において古墳4基と土坑1基を検出した。発掘調査期間は、平成4年5月1日から着手し5月30日で終了した。

富地原惣原遺跡は、福岡県宗像市大字富地原（字惣原）1041番地周辺に所在するもので、標高296.9mを最高所とする摩山から北西に派生する舌状丘陵裾部にあたる標高34mから35mの微高地に営まれている。調査は、ほ場整備事業で切り盛り調整がとれず、削平される範囲の試掘調査を実施。遺構の確認された1,000m²について調査区域を設定し、緊急発掘調査を実施した。その結果、当遺跡内において掘立柱建物跡7棟と土坑9基、石列構造遺構などを検出した。出土遺物は、いづれも中近世のものであった。発掘調査期間は平成4年9月16日から着手し10月31日で終了した。

富地原岩野B遺跡は、福岡県宗像市大字富地原（字岩野）1476番地周辺に所在するもので、標高296.9mを最高所とする摩山から北へ派生する舌状丘陵東側緩斜面にあたる標高29.5mから32mの範囲に営まれている。調査は、ほ場整備事業で切り盛り調整がとれず、削平される当丘陵について試掘調査を実施。遺構の確認された2,000m²について調査区域を設定し、緊急発掘調査を実施した。その結果、当遺跡内において円形住居跡5棟と方形住居跡6棟及び掘立柱建物跡6棟、古墳1基と土塙墓2基、土坑1基を検出した。発掘調査期間は、平成4年4月3日から着手し6月1日で終了した。

第1表 平成4年度県営ほ場整備事業にかかる発掘調査一覧表

遺跡名	所在地（福岡県宗像市）	調査原因	調査面積	調査期間
富地原上瀬ヶ浦	大字富地原字上瀬ヶ浦 882他	ほ場整備	1,000m ²	1992年5月1日～5月30日
富地原惣原	大字富地原字惣原 1041他	ほ場整備	1,000m ²	1992年9月16日～10月31日
富地原岩野B	大字富地原字岩野 1476他	ほ場整備	2,000m ²	1992年4月3日～6月1日

発掘調査はつぎの組織でおこなった。

組 織

(1) 平成 4 年度

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	森 下 照 清
		教 育 部 長	芹 野 温 亘
		社会教育課長	吉 田 繁 利
		文化 係 長	尾 山 清 (前任)
庶務・会計			吉 田 繁 利 (兼任)
発掘調査担当		主 査 師	原 原 俊 一
		技 術 師	原 原 俊 一
		技 術 師	安 部 久
		技 術 師	白 木 敏 崇
			岡 崇

(2) 平成 5 年度

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	森 下 照 清
		教 育 部 長	芹 野 温 亘
		社会教育課長	吉 田 繁 利
		文化 係 長	原 原 俊 一
庶務・会計		主 任 技 師	原 原 俊 一
発掘調査担当		技 術 師	安 部 久
		技 術 師	白 木 敏 崇
			岡 崇

今回の発掘調査において福岡農林事務所、宗像市農業振興課、富地原土地改良区の方々にご協力いただいた。また、調査を進める上で多くの方々のご指導・助言・応援をいただいた。特に夏の炎天下の中で発掘調査に参加いただいた地元や発掘作業員の皆様には、心からお礼申し上げるとともに深く感謝したい。

2. 位置と環境

本年度報告する富地原上瀬ヶ浦遺跡、富地原惣原遺跡、富地原岩野B遺跡は、いづれも福岡県宗像市大字富地原にあって、それぞれ字上瀬ヶ浦・惣原・岩野(第1図1~3、第1表)に所在している。

これらの遺跡は、宗像市の南東部地域で鞍手郡宮田町との郡境にそびえる標高325.7mの新立山と標高296.9mの麻山から宗像市のはば中央を西流している釣川が形成する宗像平野南東部域に向かって派生する八手状に開く舌状丘陵群の丘陵上及びその裾部に分布している。

この丘陵群は、富地原・名残・吉留・武丸地区にまたがるもので、眼下には宗像平野南東部域を一望することができ、背後に新立山と麻山を仰ぎみる。各丘陵は、細長く延びており、谷間は、新立山と麻山を扇の要とする扇状地形を呈し、宗像平野に続く谷水田を形成している。弥生時代前期後半以降このような谷水田は生活基盤を支える灌漑地として開発され、かなり奥まった地域においてもその生活の痕跡をみるとができる。当丘陵群においても数多くの遺跡をみるとできる。しかし、宗像市南東部地域は、福岡・北九州市の両大都市の運動圏内にあって急速なベッドタウン化が進み、宅地造成や道路整備など開発の波が押し寄せている。また、農業経営においても都市近郊型の合理的な経営を目指す生産基盤の整備などによる開発も進んでいる。このような環境下にあって、当地域における各遺跡は、徐々にではあるが、その性格を明らかにしようとしている。

本報告遺跡は、農業基盤整備事業の一つである富地原地区県営整備事業に伴う事前の緊急発掘調査によって検出されたもので、その性格を明らかにしようとしている1例でもある。

富地原上瀬ヶ浦遺跡は、丘陵上に占地する4基の古墳から構成されており、6世紀前半から中頃を中心におよぶ造営されたもので、その造墓変遷が追えるものである。当遺跡のあり方を踏まえた上で、周辺の遺跡をみると当丘陵群に分布する富地原梅木遺跡や武丸町添遺跡、浦谷古墳群などは、遺跡の性格上関連の深いものであるといえよう。

富地原惣原遺跡は、丘陵裾部の谷奥に営まれた江戸時代後期を中心とする建物群である。江戸時代にあたる集落遺跡の調査は、この地域では初見であり、旧唐津街道の赤間宿との関係が興味深い。また、福岡県の近世資料などには、富地原地区の記述がみられ、当遺跡の営まれた歴史的背景を窺いしることができよう。当遺跡検出の各遺構は、当該時期を研究する上での基礎的資料となることを期待する。

富地原岩野B遺跡は、丘陵東緩斜面に営まれた弥生時代を中心とする集落跡で、円形住居跡5棟や方形住居跡6棟、掘立柱建物6棟などを検出している。これらの遺構は、弥生時代中期前葉から断続的に営まれたもので弥生時代後期後半まで続き、その変遷を追えるものである。当遺跡のあり方を踏まえた上で、周辺の遺跡をみると当丘陵群に分布する富地原梅木遺跡や富地原川原田遺跡、富地原森遺跡や富地原深田遺跡などは、遺跡の性格上関連の深いものであるといえよう。特に富地原川原田遺跡は、当遺跡の営まれた時期と重複する時期であり、何らかの関係をもっていたことは疑う余地のないものであろう。また、富地原森遺跡では、弥生時代前期後半頃の遺構が検出されており、集落跡の立地による変遷を考える上で重要なものとなろう。

このように宗像平野南東部域においては、宅地造成や道路整備などの開発の波が押し寄せている反面、地域的な遺跡の性格などを踏まえた繋がりを推測できるようになろうとしている。今回調査報告される3遺跡の成果が、この地域における今後の調査及び遺跡の性格をおさえる上で、重要な位置を占めるものとなることを期待したい。



第1図 豊地原地区周辺遺跡分布地図 (1/25,000)

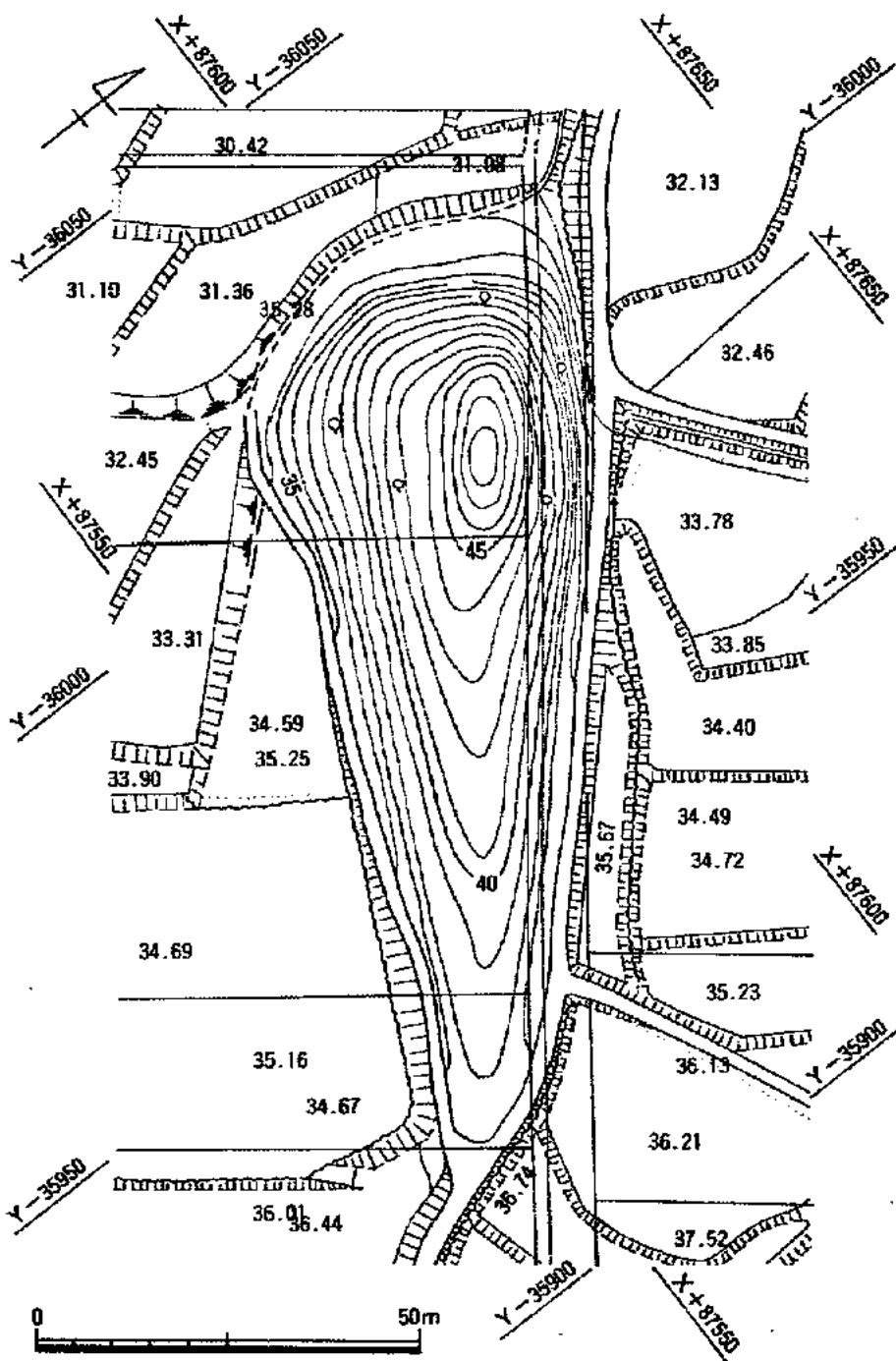
- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 豊地原上瀬ヶ浦遺跡 | 2. 豊地原惣原遺跡 | 3. 豊地原岩野B遺跡 | 4. 豊地原川原田遺跡 |
| 5. 豊地原森遺跡 | 6. 吉留京田遺跡 | 7. 武丸町添遺跡 | 8. 武丸大上洋遺跡 |
| 9. 豊地原神屋崎遺跡 | 10. 豊地原森崎遺跡 | 11. 名残遺跡群 | 12. 朝町百田遺跡 |
| 13. 浦谷古墳群 | 14. 武丸高田遺跡 | 15. 武丸小伏遺跡 | |

第2章 富地原上瀬ヶ浦遺跡

1.はじめに

富地原上瀬ヶ浦遺跡（第1図1）は、福岡県宗像市大字富地原（字上瀬ヶ浦）882番地周辺に所在しており、宗像市と鞍手郡宮田町との郡境にそびえる標高325.7mの新立山から北西へと派生する数条の八手状丘陵のうち、大きく宗像平野に張り出した丘陵の西側枝丘陵から涙滴形に飛び出した独立丘陵尾根上にあたる標高44mから49mの地点に分布している。

当遺跡の現状は、丘陵全体が大規模な開墾によって畑地として利用されており、段々畑状を呈している。畑地廃絶後は原野と化した。この段階での踏査では、遺構確認はできなかったが、当丘陵の根幹部をなす丘陵には、富地原神屋崎遺跡や富地原古賀遺跡などの集落遺跡（第1図）が丘陵裾部を巡り、富地原明天寺遺跡や『福岡県遺跡等分布地図』（宗像郡編）1977年掲載の330227～330237番などの古墳が丘陵頂部や先端部に認められている。このような当丘陵周辺の遺跡分布状況を考慮に入れると当丘陵における遺構の存在は、充分に考えることができるので、富地原地区県営は場整備事業に伴い、切り盛り調整がつづく前に削平されることとなつた当丘陵3,360mについて試掘調査を行つた。



第2図 富地原上瀬ヶ浦遺跡事業計画図 (1/1,000)

構の確認された1,000㎡について調査区域を設定。緊急発掘調査を実施し古墳4基と土坑1基を検出した。

この結果、当遺跡が墳墓群であることが判明したのであるが、富地原・名残・吉留・武丸地区では、当遺跡のほかに名残遺跡群の各遺跡や武丸町赤遺跡（第1図）などが分布しており、釣川の形成する宗像平野南東部域における資料が1つ増えたこととなる。

発掘調査期間は、平成4年5月1日に開始し5月30日の気球による全景写真撮影を行った後、古墳石材サンプル採集を終了。外での発掘調査日程を終了した。

2. 遺構

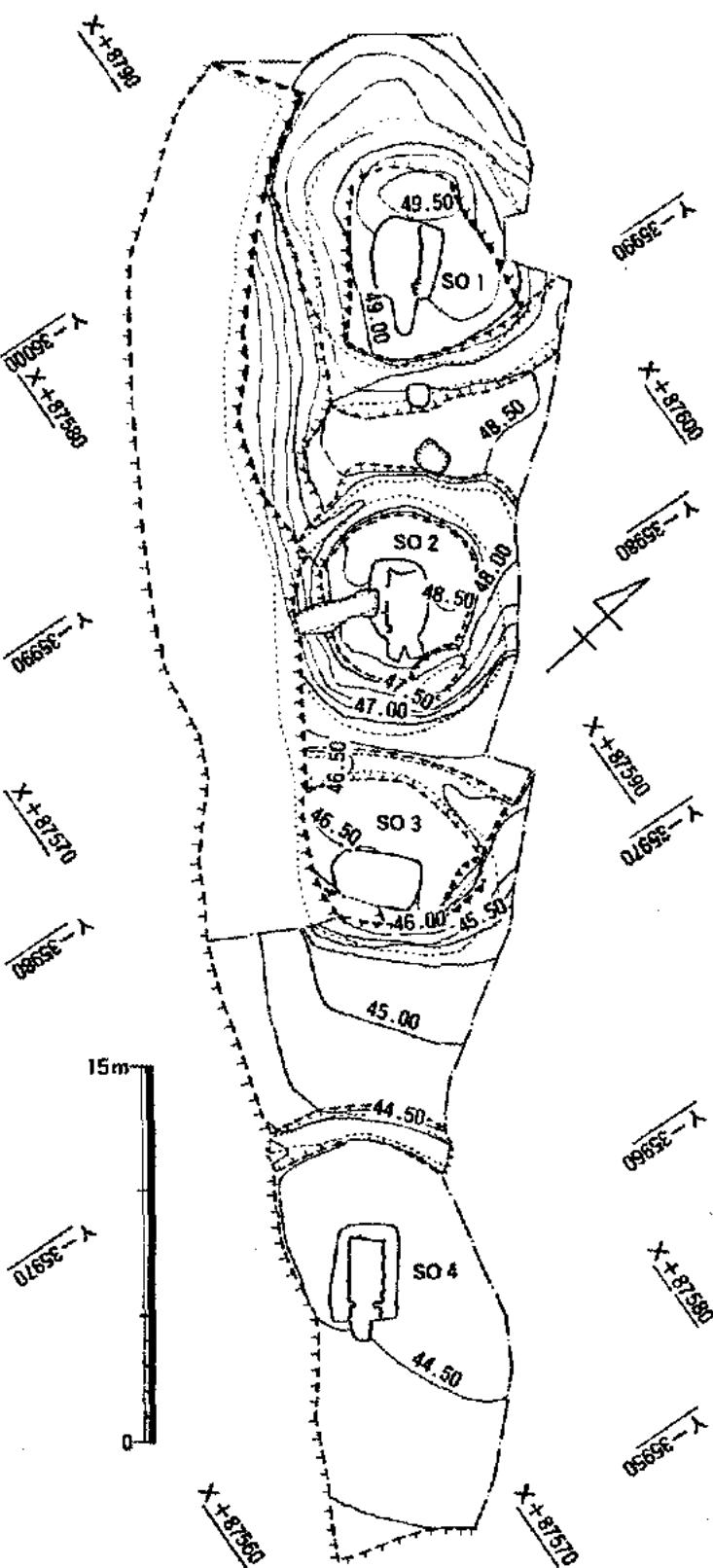
1) SO 1

(1) 墳丘

当遺構は、調査区域北西隅（第3図）に位置している。丘陵の頂部に占地する古墳で、かなり激しい削平をうけており、墳丘盛土のすべてを失っている。幸い、当遺構南東部において丘陵を切断するように巡る断面「U字」形を呈する幅2m程の馬蹄形溝状遺構が遺存しており、当古墳が標高48.5mを基底面とする径10m程の円墳であったことを確認することができた。

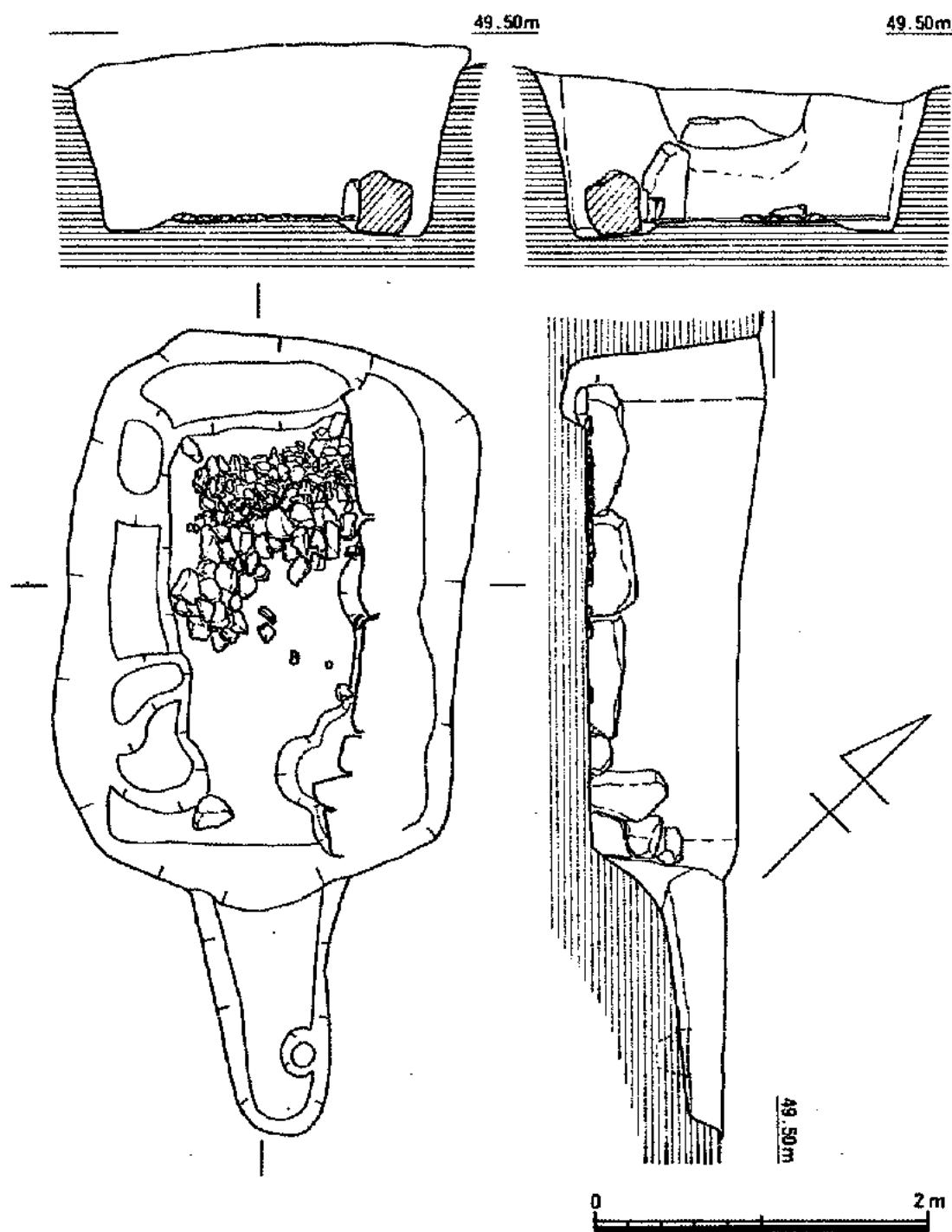
(2) 主体部

墳丘のはば中央に墓壙が掘り込まれ、この中に南東方向へ開口する横穴式石室（第4図）が築かれている。墓壙は、長辺3.3m×短辺2.4mの長方形を呈するもので、南東短辺壁には、石室から斜上方に上る長さ1.5mの墓道が取り付く。この墓壙の正確な平面規格や深さなどについては削平によってその上面を失っており不明である。



第3図 當地原上瀬ヶ浦遺跡遺構配置図 (1/300)

石室は、主軸をN-46°-Wにとる両袖を備えた単室の横穴式石室で、堆積岩の変成岩からなる塊石を主要元材としている。石材の遺存状況は、盜掘などによる搅乱が著しく右袖石及び右側壁の腰石を残すのみである。石材の構築に際しては、袖石は石材を樹立させて両袖部を形成しており、側壁は石材を寝せて石材長辺を4石連ねる形で壁面腰石を形成している。左側壁及び奥壁はすでに破壊されているが、石材抜き跡などからみて側壁に関しては右側壁と同様の4石構成、奥壁は1石構成であり、奥壁を両側壁で挟み込むように形成されている。袖石前面に付設される前庭側壁は1石を基底に



第4図 富地原上塚ヶ浦遺跡 SO 1 主体部実測図 (1/40)

据えてこの上段に1石ずつ石材を積み重ねて墓壙壁と石室前面との隙間を埋めている。石室プランはやや中膨らみの長方形を呈している。当古墳の法量（第2表）は、玄室長2.18m、玄室幅0.90mを測る。これに1マス30cmの方眼をあてると全長は9コマとなりこのうち前庭側壁長が1コマを占める。玄室幅は3コマで玄室最大幅までを測ると4コマになる。つまり、玄門部を含んだ玄室長と玄室最大幅の比率が2:1の割合になる石室であることが理解できる。

第2表 蒲地原上塚ヶ浦遺跡 遺構計測表

単位:m

遺構名	全長	玄室長	玄室幅	最大幅	玄門長	玄門幅	前庭長	前庭幅
	墓壙長	墓壙幅	最大幅	墓壙深	底長	底幅	墓道長	墓道幅
SO1	(2.70)	(2.18)	0.90	1.20	0.22	(0.60)	0.30	(0.78)
	3.30	2.40	2.40	1.20	3.00	1.95	1.50	0.9
SO2	2.40	2.10	(1.05)	(1.05)	0.30	(0.75)	—	—
	3.30	1.95	2.10	0.90	2.85	1.95	0.80	0.60
SO3	(2.70)	(2.40)	(1.05)	(1.20)	(0.30)	(0.60)	—	—
	3.60	2.10	2.10	0.45	3.30	1.65	—	—
SO4	3.10	2.40	1.20	1.36	0.30	0.72	0.40	1.02
	3.60	2.40	2.70	0.50	3.30	2.40	1.50	0.60

() は推定復元

2) SO2

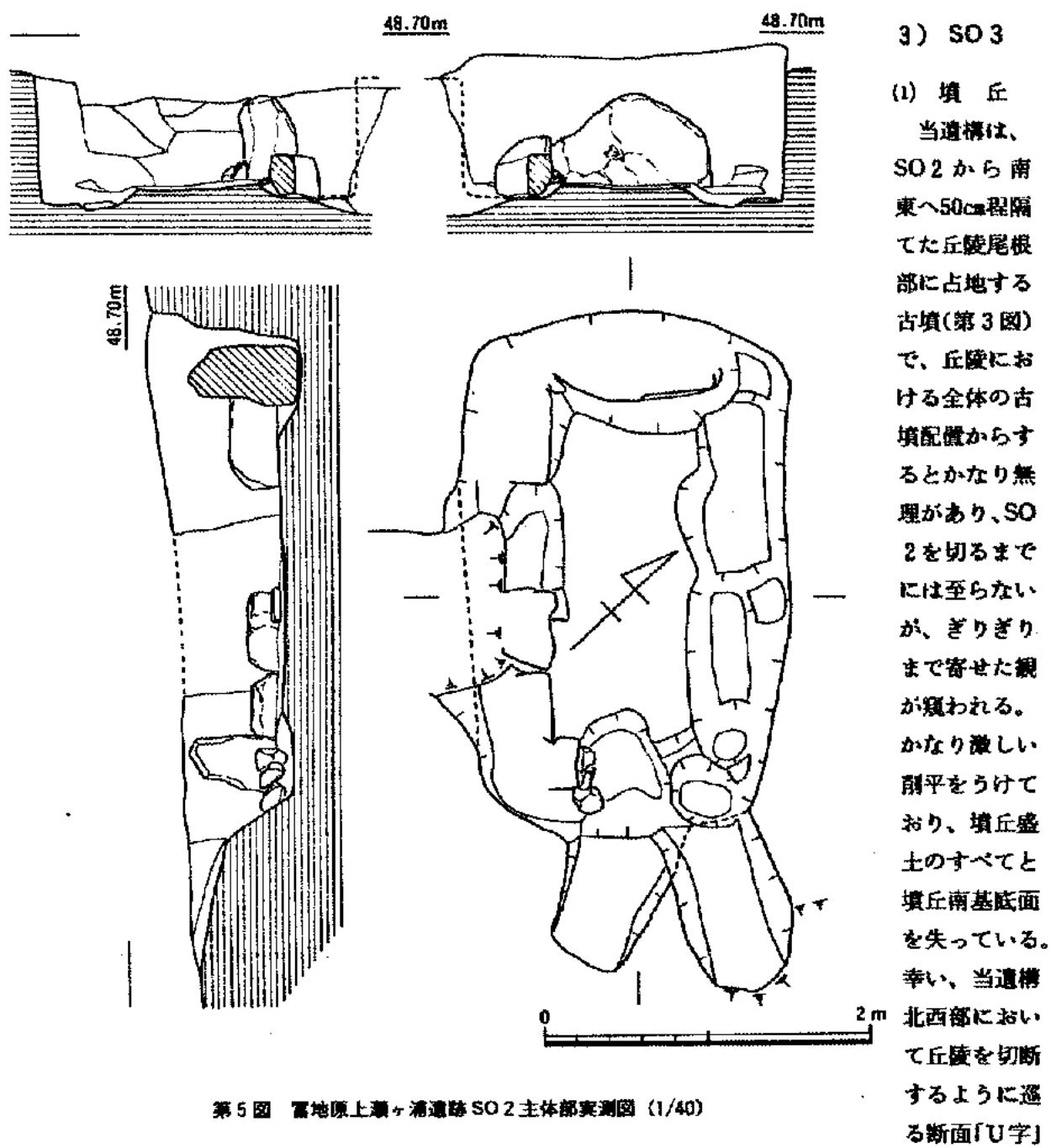
(1) 墳丘

当遺構は、SO1から南東へ2.5m程隔てた丘陵尾根部に占地する古墳（第3図）で、かなり激しい削平と擾乱をうけており、墳丘盛土のすべてと墓壙右側壁の一部を失っている。幸い、当遺構北西部において丘陵を切断するように巡る断面「U字」形を呈する幅3m程の馬蹄形溝状遺構が遺存しており、当古墳が標高47mを基底面とする径10m程の円墳であったことを確認することができた。

(2) 主体部

墳丘のほぼ中央に墓壙が掘り込まれ、この中に南東方向へ開口する横穴式石室（第5図）が築かれている。墓壙は、長辺3.3m×短辺2.1mの長方形を呈するもので、南東短辺壁には、石室から斜上方に上る長さ0.8mの墓道が取り付く。この墓壙の正確な平面規格や深さなどについては削平によってその上面を失っており不明である。

石室は、主軸をN-48°-Wにとる両袖を備えた单室の横穴式石室で、堆積岩の変成岩からなる塊石を主要元材としている。石材の遺存状況は、左袖石及び左側壁の腰石と奥壁の腰石を残すのみである。石材の構築に際しては、袖石は石材を樹立させて両袖部を形成しており、側壁は左側壁で3石を確認しているが石材の抜き跡などから石材を寝せて石材長辺を4石連ねる形で壁面腰石を形成したものと考えられる。右側壁はすでに破壊されているが、石材抜き跡などからみて左側壁と同様の4石構成、奥壁は1石構成であり、奥壁を両側壁で挟み込むように形成されている。袖石前面の前庭側壁については遺存しておらずその存在の有無等については不明である。石室プランは箱型の長方形を呈している。当古墳の法量（第2表）は、玄室長2.10m、玄室幅1.05mを測る。これに1マス30cmの方眼をあてると全長は8コマとなりこのうち玄門部が1コマを占める。玄室幅は4コマとなる。つまり玄門部を含んだ玄室長と玄室最大幅の比率が2:1の割合になる石室であることが理解できる。



第5図 富地原上巣ヶ浦遺跡 SO 2 主体部実測図 (1/40)

形を呈する幅1.5m程の馬蹄形薄状遺構が遺存しており、当古墳が標高45.5mを基底面とする径8m程の円墳であったことを確認することができた。

(2) 主体部

墳丘のほぼ中央に墓壙が掘り込まれ、この中に南西方向へ開口する横穴式石室(第6図)が築かれている。墓壙は、長辺3.6m×短辺2.1mの長方形を呈するもので、南西短辺壁には、石室から斜上方に上る墓道が取り付くものと考えられる。この墓壙の正確な平面規格や深さなどについては削平によつてその上面を失つており不明である。

石室は、主軸をN-52°-Wにとる両袖を備えた单室の横穴式石室と考えられる。盜掘などによる搅乱が著しく、石室すべての石材を失っている。幸い、石材の抜き跡が検出されており、石材の構築が

想定される。袖石は石材を樹立させて両袖部を形成する。側壁は石材を寝せて石材長辺を4石連ねる形で壁面腰石を形成する。奥壁は1石構成であり、奥壁を両側壁で挟み込むよう形成するものである。石室プランは玄室前面より奥壁側の法量が長くなる幅広の羽子板型の長方形を想定する。当古墳の法量(第2表)は、玄室長2.40m、玄室幅1.05mを測る。これに1マス30cmの方眼をあてると全長は9コマとなりこのうち玄門部が1コマを占める。玄室幅は玄門部前面で3コマ、玄室最大幅である奥壁長は4コマになる。つまり玄門部を含まない玄室内法の玄室長と玄室最大幅の比率が2:1の割合になる石室であることが理解できる。

4) SO4

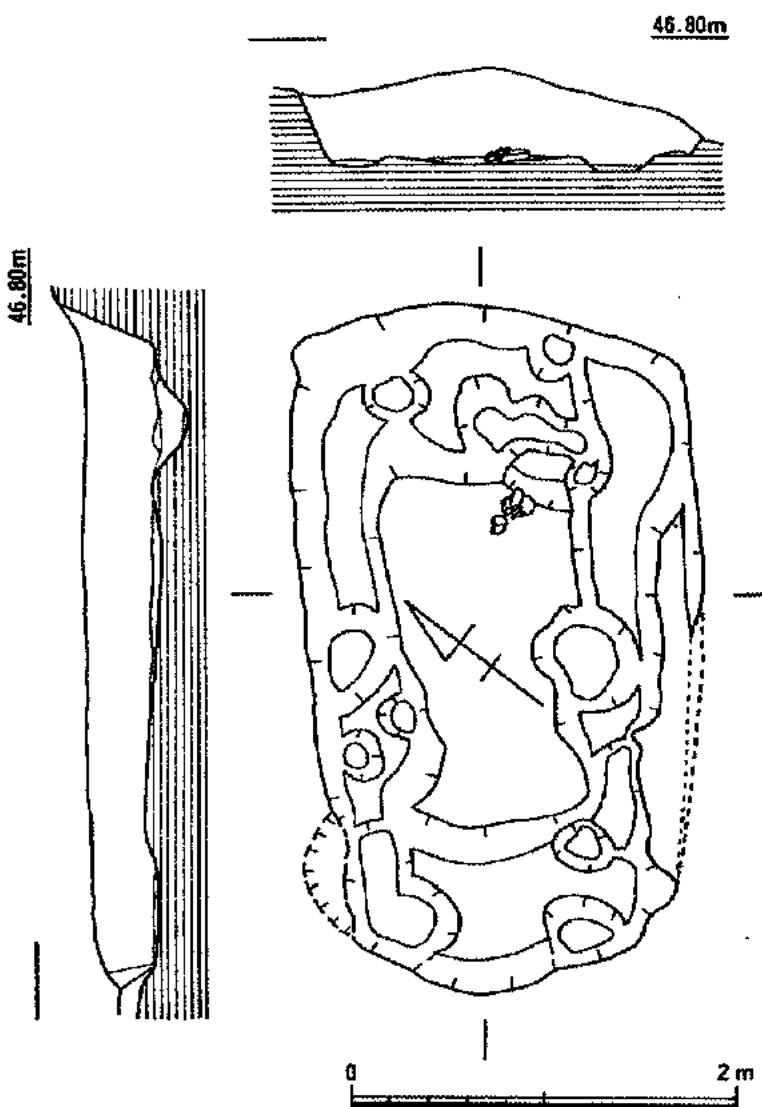
(1) 墳丘

当遺構は、SO3から南東へ6m程隔てた丘陵尾根部に占地する古墳(第3図)で、かなり激しい削平をうけており、墳丘盛土のすべてと南墳丘基底面を失っている。幸い、当遺構北西部において丘陵を切断するよう巡る断面「U字」形を呈する幅1.5m程の馬蹄形溝状遺構が遺存しており、当古墳が標高45.5mを基底面とする径10m程の円墳であったことを確認することができた。

(2) 主体部

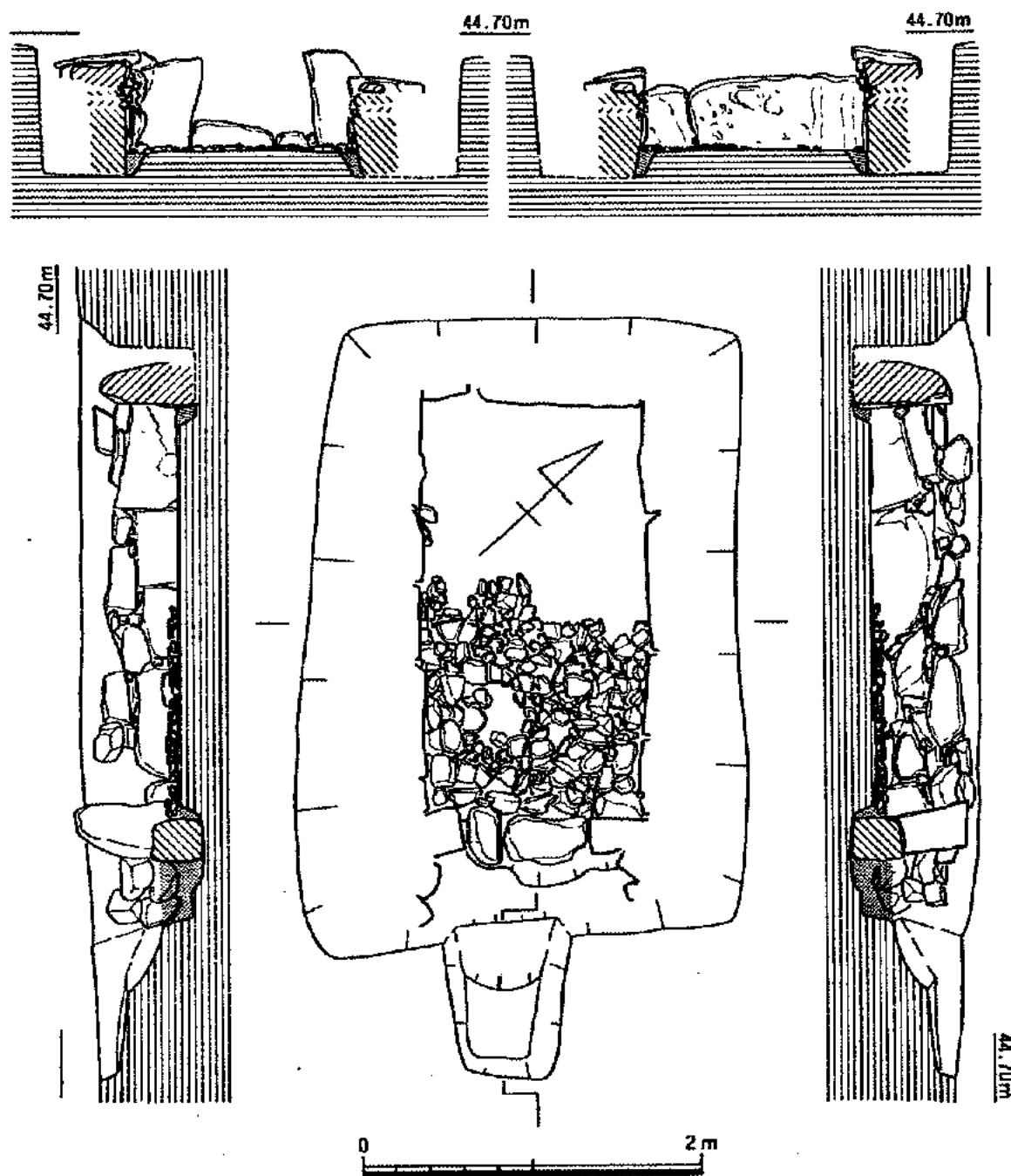
墳丘のほぼ中央に墓壙が掘り込まれ、この中に南東方向へ開口する横穴式石室(第7図)が築かれている。墓壙は、長辺3.6m×短辺2.7mの長方形を呈するもので、南東短辺壁には、石室から斜上方に上る長さ1.5mの墓道が取り付く。この墓壙の正確な平面規格や深さなどについては削平によってその上面を失っており不明である。

石室は、主軸をN-48°-Wによる両袖を備えた单室の横穴式石室で、花崗岩質の塊石を主要元材としている。石材の遺存状況は、盗掘などによる攪乱が著しく奥壁腰石上面から上の石材を失っている。石材の構築に際しいは、袖石は石材を樹立させて両袖部を形成しており、側壁は石材を寝せて石材長辺を右4石・左5石連ねる形で壁面腰石を形成している。奥壁は1石構成であり、奥壁を両側



第6図 富地原上瀬ヶ浦遺跡 SO3 主体部実測図 (1/40)

壁で挟み込むように形成されている。壁体は袖石と奥壁の高さを同じに揃え、この中に石材を組み込み両袖石と奥壁上面を基線とした長方体を形成している。このとき、側壁は腰石上面を粗石上面から奥壁上面に向かってほぼ直線に整え、この上面に腰石と直交する塊石積みを施す。本来ならばこのように整えられた長方体の上面に塊石を徐々に持ち送りながら積上げ天井に至るのであるが当遺構では削平されており、現状ではみられない。袖石前面に付設される前庭側壁は2石を基底に据えてこの上段に石材を積み重ねて墓壇壁と石室前面との隙間を埋め、玄門部から前方向にかかる上部圧を2点支持から4点支持へと強化して石室の倒壊を防いだものといえよう。石室プランは箱型の長方形を呈し



第7図 富地原上塚ヶ浦遺跡 SO 4 主体部実測図 (1/40)

ている。当古墳の法量（第2表）は、玄室長2.40m、玄室幅1.20mを測る。これに1マス30cmの方眼をあてると全長は10コマとなりこのうち前庭側壁長が1コマと玄門部が1コマを占める。玄室幅は4コマになる。つまり玄門部を含まない玄室内法の玄室長と玄室最大幅の比率が2:1の割合になる石室であることが理解できる。

5) SK 5

当遺構（第8図）は、SO1南東部に巡る馬蹄形溝状遺構の埋土を切って掘られた土坑で、ちょうどSO1の墓道が延びる延長線上の溝外壁と接する位置に検出された。遺構内の埋土は、暗黄灰色の荒粒子土で、炭状の木片を多く含むものであった。遺構の形態は、遺跡全体がかなり激しい削平をうけており、遺構上面の保存状況は、極めてよい状況とはいえない。検出平面形が隅丸方形を呈してはいるが、明確にその形態を把握することはできない。現存長0.97m×現存幅0.88m、現存深10cmを測る。

3. 出 土 遺 物

1) 出 土 状 況

SO1では、馬蹄形溝状遺構から土師器の壺及び須恵器の壺蓋（第11図-1・2）が出土しており、石室内からは刀子片（第9図-1）が出土している。馬蹄形溝状遺構出土遺物は、遺構内埋土を3層に分層した中層にあたる暗黄褐色粘質土層から出土している。溝完掘後数年を経て堆積した暗黄灰色粘質土層の上に、墳丘盛土が流出して堆積した暗黄褐色粘質土層から出土した遺物は、墳丘からの流れ込みと考えられる。石室内出土遺物は、玄室内の奥壁寄りの暗黄褐色の荒粒子土中から検出されている。石室内は著しい搅乱をうけており、出土地点は埋葬時の位置ではない。

SO2では、石室内から鉄刀片（第9図-2）が出土している。この遺物は、墓壙左側壁を破壊して掘り込まれた盗掘坑内にあたり出土地点が埋葬時の位置でないことが観察されている。

SO3では、馬蹄形溝状遺構から須恵器の短頸壺（第11図-3）が出土している。この遺物は、遺構内埋土を3層に分層した最下層の暗黄灰色粘質土層中から検出されている。

SO4では、石室内からは鉄鎌片と硝子製丸玉（第9図-3、4~39）が出土している。これらの遺物は、玄室内の全面域に散らばっている状態で、暗黄褐色の荒粒子土中から検出されている。石室内は著しい搅乱をうけており、出土地点は埋葬時の位置ではない。

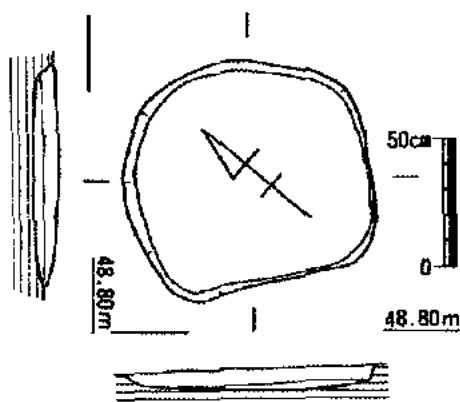
2) 鉄器・装身具（第9図）

1は、SO1石室内出土の刀子片で、刀身切先から半分程を失っている。現存長10.8cmを測り、このうち4.3cmが茎である。茎には、茎長にはほぼ平行する木質纖維が付着しており、木柄が装着されていたことが観察される。身幅は、関部で2.1cm、現存身部端で、1.5cmを測る。身部断面は、背幅4mmの厚さを持ちこれが身幅の2/3程まで続き刃部に向かって徐々に狭まりやや丸みを帯びた長二等辺三角形を呈している。

第3表 富地原上塚ヶ浦遺跡 遺構計測表Ⅱ

単位：m

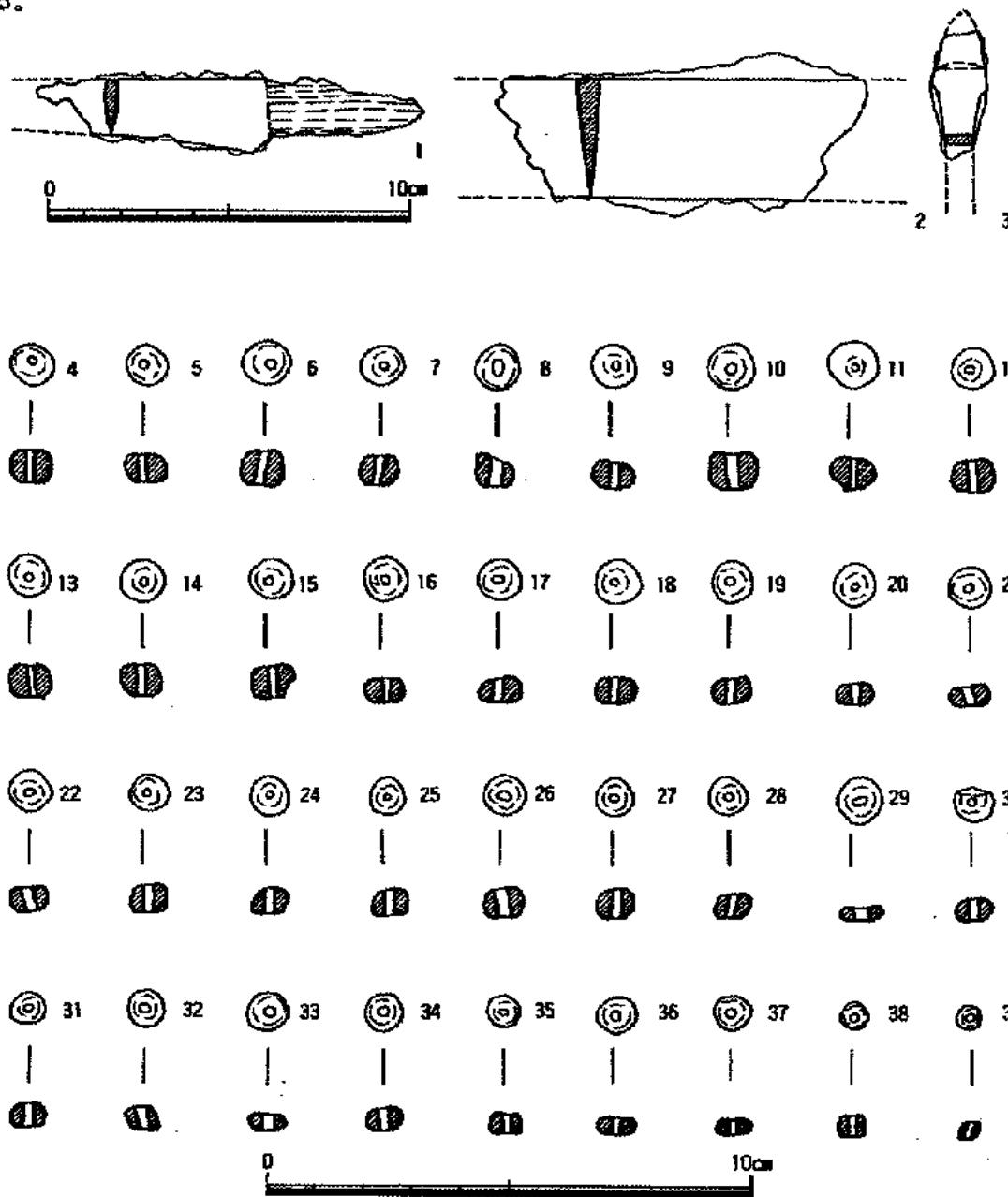
遺構名	全長	最大幅	深さ
SK 5	0.97	0.88	0.10



第8図 富地原上塚ヶ浦遺跡SK 5実測図
(1/30)

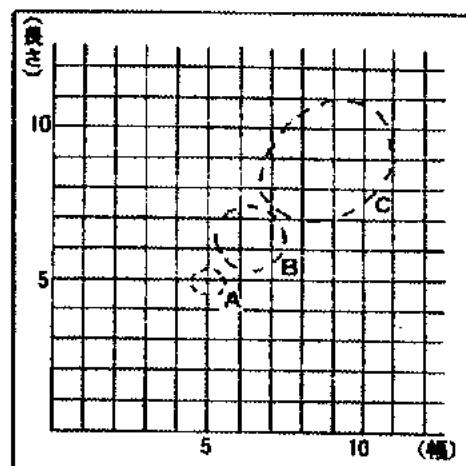
2は、SO 2石室内出土の刀片で、刀身部にあたる部位である。現存長は10.3cm、身幅は3.4cmを測る。身部断面は、背幅6mmの厚さを持ち、これが身幅の1/4程まで続き刃部に向かって徐々に狭まる長二等辺三角形を呈している。刀身の幅・断面形からみて当遺物は、刀身長80cmを超える刀で刀全長は1m近くになるものと考えられる。

3は、SO 4石室内出土の鐵身片である。鋒先と鐵身のはほとんどを失っているが、尖根式に属するものと考えられる。現存長3.6cm、身幅1.4cmを測る。身部断面は、腐食が著しいために膨らんでおり、明確ではないが片丸造りで、刃部との境に小さな凹部のあることが観察できる。笠被に統く身の断面形は扁平な長方形を呈している。鐵身の形状や幅などからみて当遺物は、片丸造長三角形広鋒式の尖根鐵と考えられる。古野徳久氏の分類(註1)によれば、E₂類の系列に属し、Ⅳ期にあたるものと思われる。



第9図 畠地原上灘ヶ浦遺跡出土遺物実測図 I (鉄器1/2、鐵身具2/3)

4から39は、硝子製丸玉である。その色で分類するならば青色・紺色・濃紺色・緑色の4種類に識別される。これら玉類の法量をみると、第10図のようにA・B・Cと3区分できる。また、孔径をみると1.5mm・2mm・3mmの3種類があるが、このうち3mm径を測るものは、本来2mm径のものが変形したものとみられ、実際には2類に分けられる。硝子丸玉は、その製作工程において、芯棒に溶解硝子を付着させ、これを回転。円柱状硝子管が芯棒に取り付いたところで適当な長さに切って芯棒から抜く作業が行われる。当遺跡出土の丸玉の場合、孔径が1.5mmと2mmの2種類あり、溶解硝子を付着させる芯棒が2種類あったことを想定させる。また、丸玉の色調をみると4種類の発色を示している。青色・紺色・濃紺色の3色は、硝子玉の厚さなどによって、その発色が微妙に変色することが観察されており、青系統と緑系統の2色の溶解硝子があったことを想定させる。丸玉の大きさについては、溶解硝子が芯棒に付着した厚さによって異なることから第4表A・Bのような小差の違いは、その製作工程には影響がないものと思われる。以上のことから当遺跡出土の硝子丸玉は、芯棒の違いと硝子の色調差などから3回に分けて製作されたものと想定される。



第10図 富地原上瀬ヶ浦遺跡出土品法量図
(単位:mm)

第4表 富地原上瀬ヶ浦遺跡 出土遺物計測表1

単位:mm

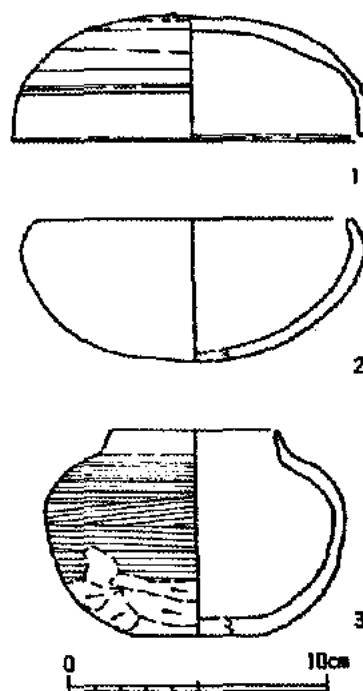
番号	器種	現存長	最大幅	厚さ	孔径	材質	色調
1	刀子	108	21	4	—	鉄製	—
2	刀	103	34	6	—	鉄製	—
3	鎌	36	14	(2)	—	鉄製	濃紺色
4	丸玉	9	9	7	2	硝子製	濃紺色
5	丸玉	9	9	6	2	硝子製	青色
6	丸玉	10	9	7	2	硝子製	濃紺色
7	丸玉	9	8	6	2	硝子製	紺色
8	丸玉	9	10	7	3	硝子製	濃紺色
9	丸玉	9	9	6	1.5	硝子製	青色
10	丸玉	10	10	7	2	硝子製	紺色
11	丸玉	10	10	7	1	硝子製	紺色
12	丸玉	9	9	7	2	硝子製	紺色
13	丸玉	8	9	7	1.5	硝子製	濃紺色
14	丸玉	9	9	7	1.5	硝子製	紺色
15	丸玉	9	9	7	1.5	硝子製	濃紺色
16	丸玉	9	9	5	1.5	硝子製	青色
17	丸玉	9	9	.5	2	硝子製	濃紺色
18	丸玉	9	9	5	2	硝子製	紺色
19	丸玉	8	9	5	2	硝子製	濃紺色
20	丸玉	9	9	5	1.5	硝子製	濃紺色

番号	器種	現存長	最大幅	厚さ	孔径	材質	色調
21	丸玉	9	9	7	2	硝子製	濃紺色
22	丸玉	9	8	5	2	硝子製	青色
23	丸玉	8	9	5	2	硝子製	紺色
24	丸玉	8	8	6	2	硝子製	濃紺色
25	丸玉	7	8	6	1.5	硝子製	紺色
26	丸玉	8	9	6	2	硝子製	紺色
27	丸玉	8	8	6	2	硝子製	紺色
28	丸玉	7	8	5	2	硝子製	濃紺色
29	丸玉	9	10	3	3	硝子製	青色
30	丸玉	8	(8)	5	2	硝子製	濃紺色
31	丸玉	7	6	6	2	硝子製	紺色
32	丸玉	7	8	5	2	硝子製	紺色
33	丸玉	9	8	4	2	硝子製	青色
34	丸玉	8	8	5	2	硝子製	紺色
35	丸玉	6	7	5	2	硝子製	濃紺色
36	丸玉	8	8	4	2	硝子製	紺色
37	丸玉	8	7	3	1.5	硝子製	青色
38	丸玉	6	6	5	2	硝子製	青色
39	丸玉	5	5	4	1.5	硝子製	緑色

() は推定復元

3) 土 器 (第38図)

1は、SO 1馬蹄形溝状遺構出土の須恵器坏蓋で、完形品の1/2程の個体である。全体的に丸味をもった器形を呈しており、口縁部と体部の境には1条のあまい沈線を巡らせている。口縁端部は、斜めに仕上げられており、凹線状の段を有する。器形の調整には、器高の1/2程に左回転輪轍による幅広の範削り調整が施されている。胎土は2mm程の長石砂を含む。色調は黄灰色を呈する部分が多く、やや焼成のあまさを感じる。2は、SO 1馬蹄形溝状遺構出土の土師器碗で、ほぼ完形品であるが底部を失っている。全体的に丸味をもった器形を呈しており、口縁部は内弯しつつそのまま丸味を帯びた端部となって終る。器形の調整には、外面に丁寧な範磨き調整を施し、内面は丁寧なナデ調整をしている。胎土は木目細かな緻密なものである。底部の欠損に関しては、発掘調査において検出することはできず、後世の破損か当時の破損かをおさえるには至らなかったが、古墳供給時に打ち欠いた可能性を残している。3は、SO 3馬蹄形溝状遺構出土の須恵器短頸壺で、完形品の1/2程の個体である。全体的に扁平球を呈しており、胸部最大径を中心よりやや上方にとる。底部は平坦で、器形の調整にはカキ目調整を施し、底部から体部1/3程までを持ち範削り調整している。



第38図 富地原上瀬ヶ浦遺跡
出土遺物実測図 II (1/3)

第5表 富地原上瀬ヶ浦遺跡 出土遺物計測表 II

単位: cm

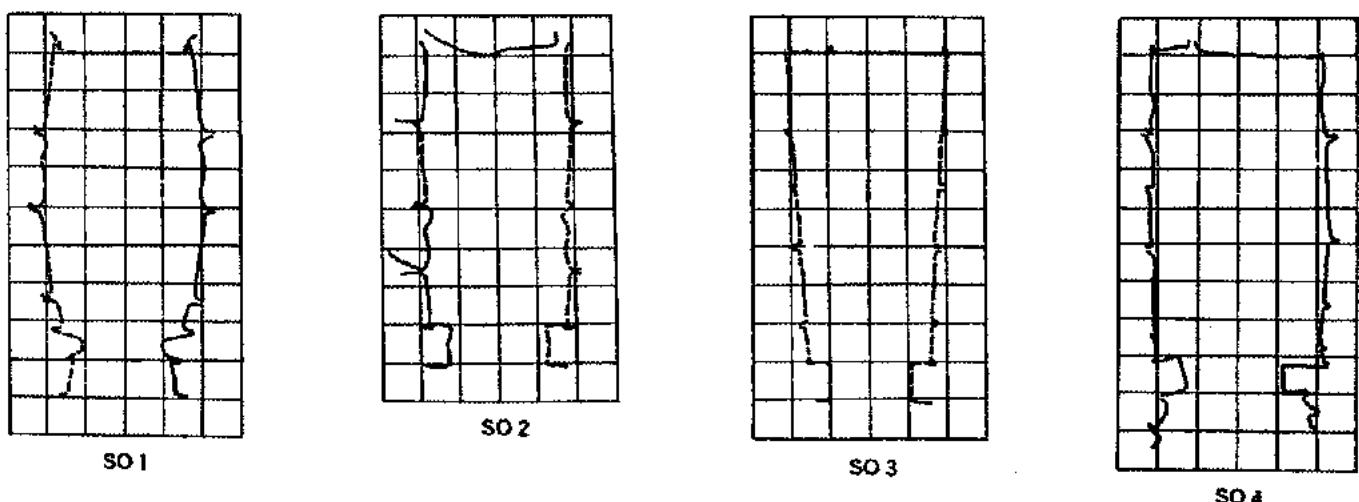
番号	出土遺物	口径	底径	壁高	測定	色調	その他の特徴
1	須恵器坏蓋	14.0	-	4.9	外面: 左回転輪轍幅広範削は器高1/2を占める。	外面: 黄灰色	口縁部と体部の境に1条沈線。
					内面: 天井部不定方向ナデ。ほか回転ナデ。	内面: 淡灰色	口縁端部は斜め仕上げ凹線状段有。
2	土師器碗	12.0	-	5.6	外面: 丁寧な範磨き。	外面: 黄褐色	口縁部は内弯しつつ丸味もて継。
					内面: 丁寧なナデ調整を施している。	内面: 黄褐色	底部の欠損。古墳供給時打ち欠く?
3	須恵器短頸壺	6.4	5.0	8.0	外面: カキ目調整、底部から体部1/3程手持範削。	外面: 青灰色	全体的扁平球。底部平坦。
					内面: 底部から体部1/3程縦範ナデ。ほか回転ナデ	内面: 青灰色	胸部最大径は中央よりや上方。

4. まとめ

今回の調査において、当遺跡が、標高325.7mの新立山を扇の要として釣川の形成する宗像平野南東部域に張り出す八手状丘陵上に分布する古墳群の1つで、4基の古墳から構成されていることが明らかとなった。このことは、同じ新立山を扇の要とする富地原・名残・吉武地区に所在する各遺跡を理解する上で大きな手がかりとなろう。以下、これらの検出遺構や出土遺物についてまとめる。

1) 古墳の占地について

今回検出の古墳はすべて丘陵尾根上に占地している。SO 1が丘陵頂部にあり、SO 2、SO 3と順次

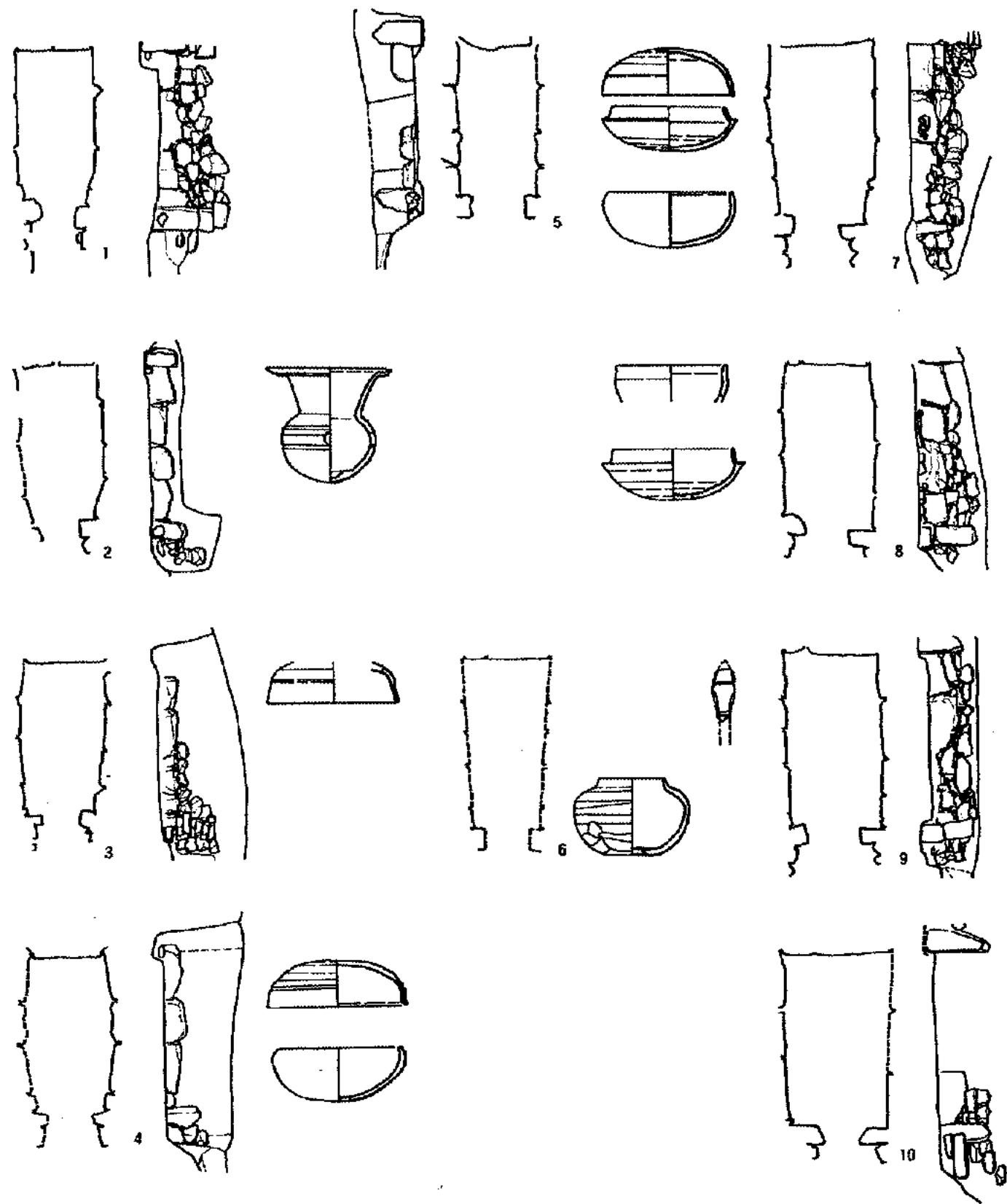


第12図 菅原上瀬ヶ浦遺跡石室プラン法量計測図 (1/60)

丘陵を下る。主体部開口方向は、SO3が南西にとるほかは、すべて南東にとっている。各古墳間の距離は、SO1、SO2間を基にするとSO3は、SO4を避けて窮屈にSO2方向へよっているようにみえ、SO4は、他の古墳より、やや離れている。このような占地状況からみると、一見、同一グループにみえるこの古墳群が、数グループに分けられる要素を隠しだしている観がある。また、その占地のあり方で、地理的に優位な丘陵頂部にあるSO1が最初に築造され、続いてSO2・SO4、そしてSO2に寄り添うように窮屈な馬蹄形構造を巡らすSO3が最後に築造されたように見える。

2) 各古墳の石室について

当遺跡検出の各古墳石室プランについてみるとこととする。各古墳の石室プランに1マス30cmの方眼をあてると第12図のようになる。この図によると各石室とも側壁間に4マスの方眼が填まっている。このとき、石室主軸方向の方眼は、SO1・SO2では玄門部を含むところで8マスの方眼が填まっているのに対して、SO3・SO4では玄室前面で玄門部を含まないところで8マスの方眼が填まっている。前者をⅠ類、後者をⅡ類としたとき、玄門部の長さ分Ⅰ類からⅡ類の玄室床面積が広がったこととなる。また、玄室前面幅をとれば、SO1とSO3は3マスの方眼が填まり、SO2とSO4は4マスの方眼が填まる。前者をa類、後者をb類としたとき、玄室前面幅分a類からb類の玄室床面積が広がったこととなる。つぎに、壁体構造についてみるとこととする。当遺跡検出の各石室では、その遺存状況が悪いため、石室プランを構成している腰石から袖石上面の線を上限とする壁体構造について比較することとする。このとき壁体構造をすべて失うSO3は除外するものとする。各古墳の壁体に1マス30cmの方眼をかけると、いずれの古墳においても石室床面から側壁腰石上面の高さが1マスの方眼に填まっている。このときの各古墳における袖石は、SO1・SO2で1.5マスとなり、SO4で2マスとなる。このことは、側壁腰石の構築方法に変化はみられないが、石室の基底部となる袖石上面までの空間の広がりを比較すると、SO1・SO2からSO4が若干広がったことを示す。ここで、宗像市域における横穴式石室の変遷について、蒲谷古墳群の調査報告(註2)を参考にすると石室は概ねその体積を小なるものから大なるものへと変化させる傾向が受け止められるものとしてよいものと思われる。当遺跡での石室の変遷を考えるとその石室プラン及び壁体構造の拡大状況などからみて、SO1→SO2→SO3→SO4の流れを考えることができる。



第13図 富地原上瀬ヶ浦遺跡石室プラン比較図 (1/80)

- | | | |
|------------------|-----------------|-----------------|
| 1. 浦谷古墳群C-6号墳 | 2. 浦谷古墳群C-3号墳 | 3. 武丸町添遺跡1区1号墳 |
| 4. 富地原上瀬ヶ浦遺跡SO1 | 5. 富地原上瀬ヶ浦遺跡SO2 | 6. 富地原上瀬ヶ浦遺跡SO3 |
| 7. 富地原梅木遺跡7号墳 | 8. 富地原梅木遺跡5号墳 | 9. 富地原上瀬ヶ浦遺跡SO4 |
| 10. 平等寺向原遺跡V-1号墳 | | |

3) 周辺遺跡との比較について

当遺跡の報告をまとめるにあたって各古墳の占地や変遷などについてみてきたが、周辺遺跡との関連について検討することとする。今回、当遺跡検出の各古墳を石室プランや石室構築材の組み方、法量などから便宜上Ⅰ・Ⅱ類に分類し、これを更にa・b類に細分しⅠa類(SO1)・Ⅰb類(SO2)・Ⅱa類(SO3)・Ⅱb類(SO4)としてみた。これらは、その出土遺物などからⅠ類を6世紀第1四半期、Ⅱ類を6世紀第2四半期に築造されていたものと考える。ここで、当遺跡の西に大きな谷を挟んで対峙している名残遺跡群やそのまた西にある浦谷古墳群、東に大きな谷を挟んで対峙している武丸町添遺跡の資料を参考にすると当遺跡検出の古墳は、浦谷古墳群のⅠ期N類の範疇に入るものと思われる。しかし、浦谷古墳群Ⅰ期N類のa・b類では、石室の主軸長が伸びる第1段階、奥壁幅が広がる第2段階、玄門幅が広がり基となる石室の相似形になる第3段階の変遷をたどる法量変化において急激な法量変化をみせる。そこで、当遺跡検出の各古墳石室の石室プランと合致する石室プランを抽出し、その石室プラン法量の変化を比較検討したところ第12図のようになつた。これでみると当遺跡のⅠa類と同じ法量をもつ左列の石室からⅡb類と同じ法量をもつ右列の石室へと変化することが窺える。今回、当遺跡では検出することができなかつたが、このⅡb類から石室幅を広げた法量をもつものが浦谷古墳群Ⅰ期N b類と同じものになることであろう。

4) 富地原上瀬ヶ浦遺跡と歴史的背景

これまで、当遺跡について多方面から比較検討してきた。その結果、当遺跡では、丘陵頂部にⅠ類にあたるSO1が造営され、これに続いてSO2が造営される。この両者については、その築造にあたっては、石室の形態変化などからあまり開きのないことが想定される。その時期は、出土遺物などから6世紀第1四半期と考えられる。この後、Ⅱ類にあたるSO3・SO4が造営される。この両者については、石室の形態変化でSO3が先行するようであるが、その占地において、SO4を避けて築造された観があり、SO4が先行してこの後にSO3が築造されたことも充分考えられる。いずれにしても両者の築造時期は非常に近いものと想定される。その時期は、出土遺物などから6世紀第2四半期と考えられる。これらの現象は、Ⅰ類とⅡ類の時間的流れから世代交代時期での造墓が考えられ、SO1・SO2間とSO3・SO4間の関係から台頭する2つのグループが存在したことを思わせるが、これが兄弟などの血縁的関係か地縁的関係かについては、現段階では、如何ともし難いもので、今後の課題となろう。また、当遺跡の立地からみて、前方に広がる平野は、名残丘陵と当丘陵に挟まれた谷水田のみであり、この水田に生計をたてる集落は、名残丘陵にみる富地原岩野B遺跡、当丘陵基部から派生する枝丘陵裾部に所在する富地原川原田遺跡などがある。当丘陵の造営時期を6世紀初頭から6世紀中頃とすると、周辺集落では、富地原川原田遺跡の終焉期にあたる。この住居跡群は、低丘陵部から丘陵緩斜面に居住空間が広がった時期で、生産力も増大したことであろう。古墳築造も可能となつたのではなかろうか。また、富地原川原田遺跡が廃絶した6世紀中頃に当丘陵における古墳造営が終焉を向かえたことは、まったくの偶然であろうか。現段階では、当丘陵の被葬者が富地原川原田遺跡において生計をたてていたかは想像の域を脱しないが、今後における周辺遺跡の調査を進めるうえでの課題としてまとめとしたい。

注

1. 古野徳久「古墳時代鉄器の編年—北九州を中心として—」『九州考古学』第64号 1989
2. 宗像市教育委員会「浦谷古墳群Ⅰ」『宗像市文化財報告書』第5集 1982

第3章 富地原惣原遺跡

1. はじめに

富地原惣原遺跡（第1図2）は、標高296.9mを最高所とする靡山から北西に派生する丘陵端部に位置し、行政区画では、宗像市大字富地原（字惣原）1041周辺に所在する。調査対象地は、赤木峠から北へ下る県道芹田・石丸線の西側で、南北へ緩やかに下る田園にあたる。

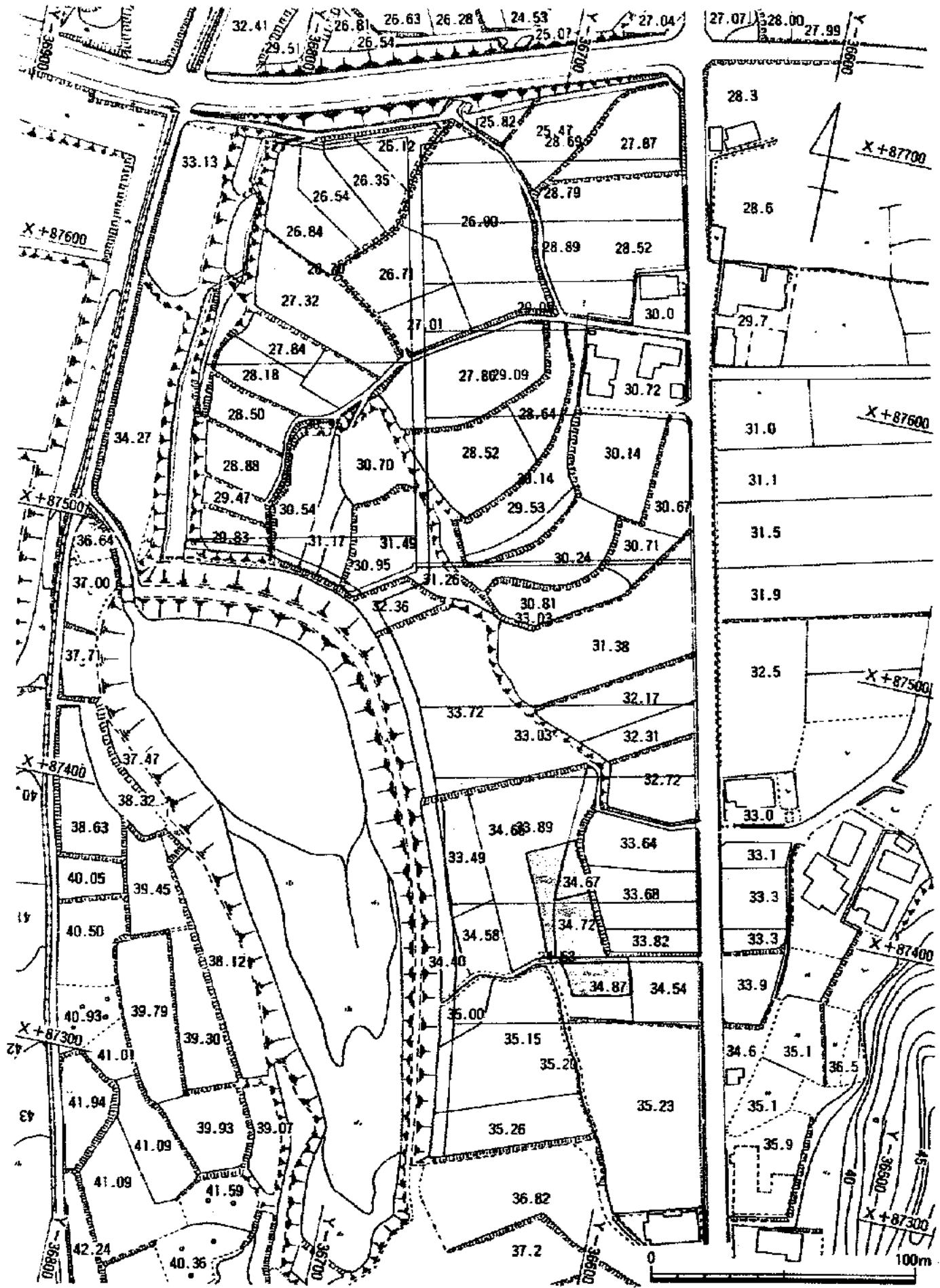
本遺跡からの景観は、背後に靡山と新立山（325.7m）などの山々がつらなり、宗像市と鞍手郡宮田町の境となる。眼前には、宗像市の中央を西流する釣川によって形成された沃野が開け、その奥に宗像氏の居城がそびえたであろう城山が仰ぎみえる。この麓には、江戸時代に旧唐津街道（第14図3）の宿場街として栄えた赤間宿（第14図4）がある。

今回の調査は、平成4年度は場整備事業に伴う事前緊急発掘調査で、平成4年6月19日から同7月7日にかけて試掘調査を行い、東端は、字「森」の集落と西端は、惣原池に挟まれた面積1,000m²に遺跡の広がることを確認した。面的調査は、同9月16日から着手し同10月31日に終了した。

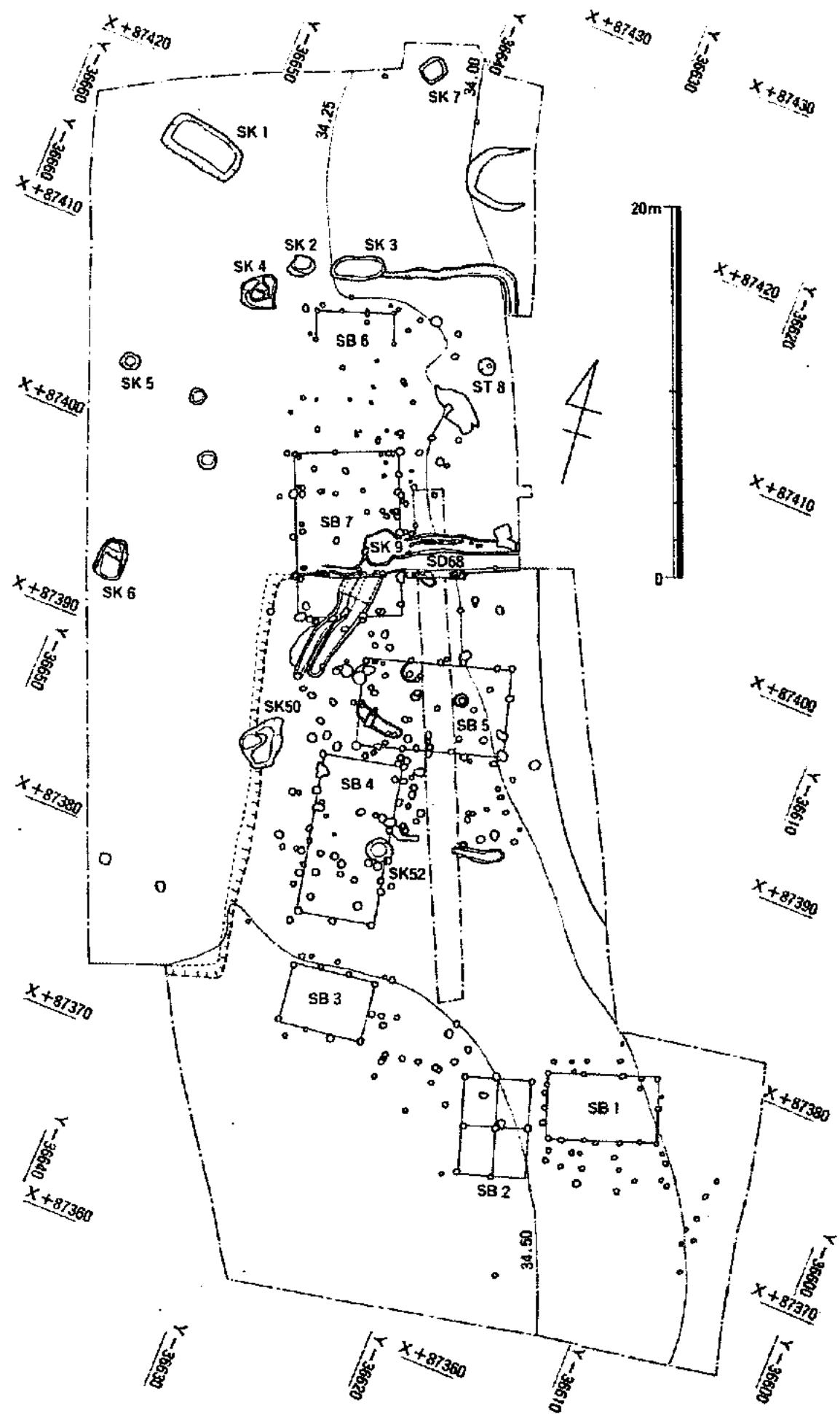
本遺跡は、靡山から流失した土砂によってできた扇状地上に営まれ、地山は黄褐色の風化礫層からなる。本遺跡での遺構は、標高34.7mを最高所として、標高33.7mの間に比較的緩やかな丘陵北斜面で丘陵に沿って延びている。これらは掘立柱建物などの柱穴群と土坑群に分けることができる。いずれも近世に比定できるものであるが、若干中世の遺物も含まれる。以上調査の概要について述べたが、報告書の記載については、各遺構・遺物について、表の掲載を多用し、その事実報告に勤めるとした。最後に近世資料の若干の補足と私見を述べてまとめとする。



第14図 富地原惣原遺跡明治33年地形測量図 (1/25,000)



第15圖 富地原惣原遺跡事業計畫圖 (1/2,000)



第15图 地质原生带分布配置图 (1/300)

2. 遺構

1) 据立柱建物跡

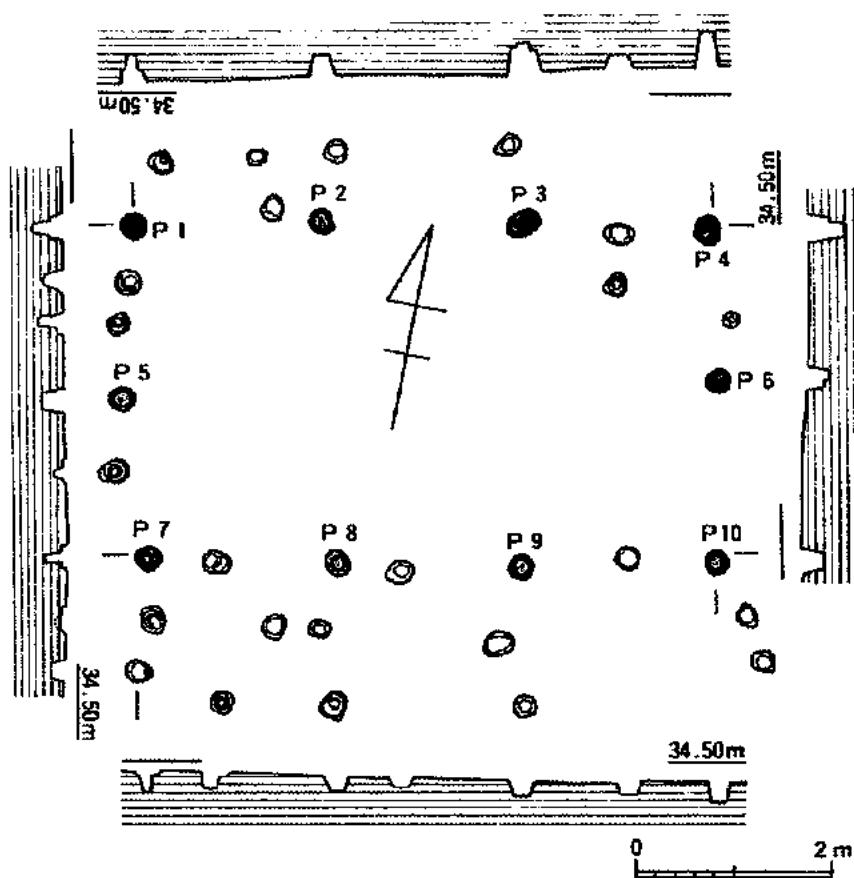
(1) SB1

SB1(第17図)は調査区の南東側に位置し、SB2の東側で検出した。3間×2間の据立柱建物で南側に庇が付くものと思われる。主軸の方向はN-78°-Eを示している。

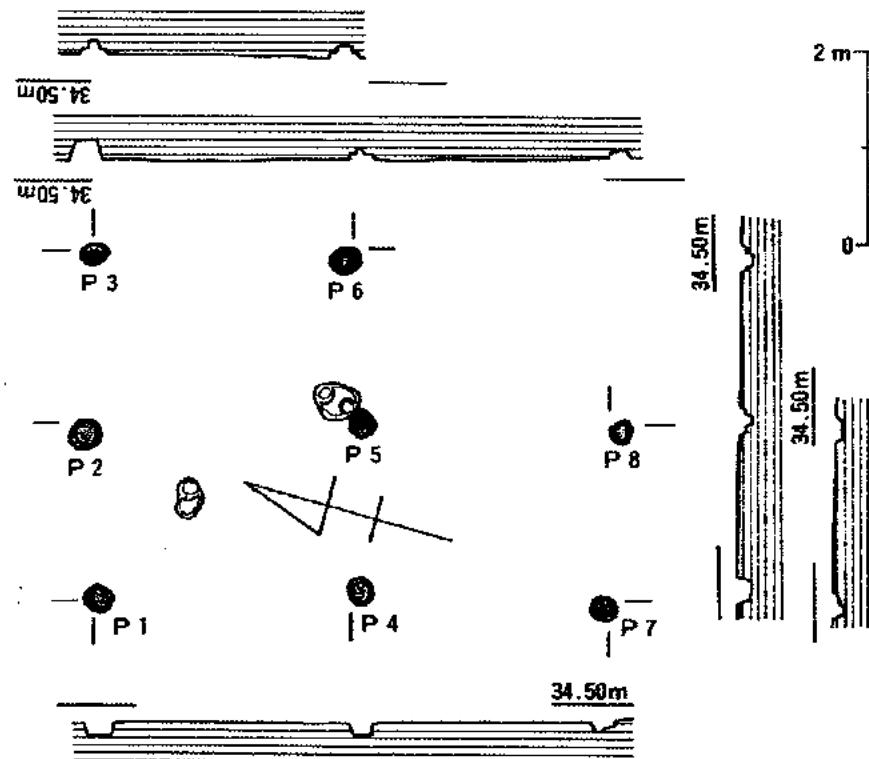
桁行は5.91mで、その柱間は1.90~2.08mを測り、平均1.97mである。梁間は3.45mで、その柱間は1.60~1.85mを測り平均1.73mである。柱穴の直径は、P3の68cmを除いていずれも22~26cmの間に収まる。深さは、15~36cmを測る。P1・P3・P6・P7は柱痕が残っているものである。

(2) SB2

SB2(第18図)は調査区南側に位置し、SB1の西側で検出した。2間×2間の中柱を持つ据立柱建物で南東端の柱穴を失う。主軸の方向はN-15°-Wを示している。桁行は



第17図 富地原遺跡SB1実測図(1/80)



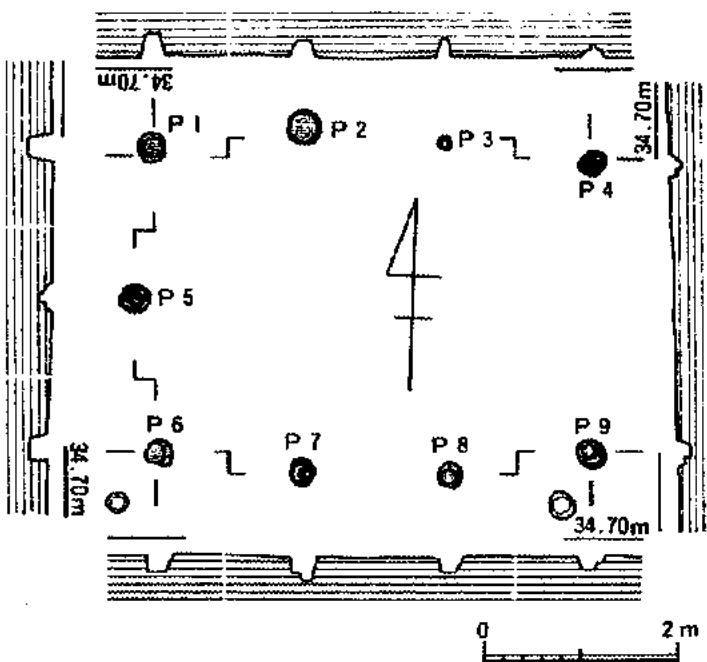
第18図 富地原遺跡SB2実測図(1/80)

5.11mで柱間は、2.42~2.78mを測り平均2.62mである。梁間は、3.54mで柱間は1.67~1.88mを測り平均1.77mである。柱穴の直径は、22~30cmの間で収まる。深さは6~20cmである。P3・P5・P6・P7は柱痕が残っていたものである。

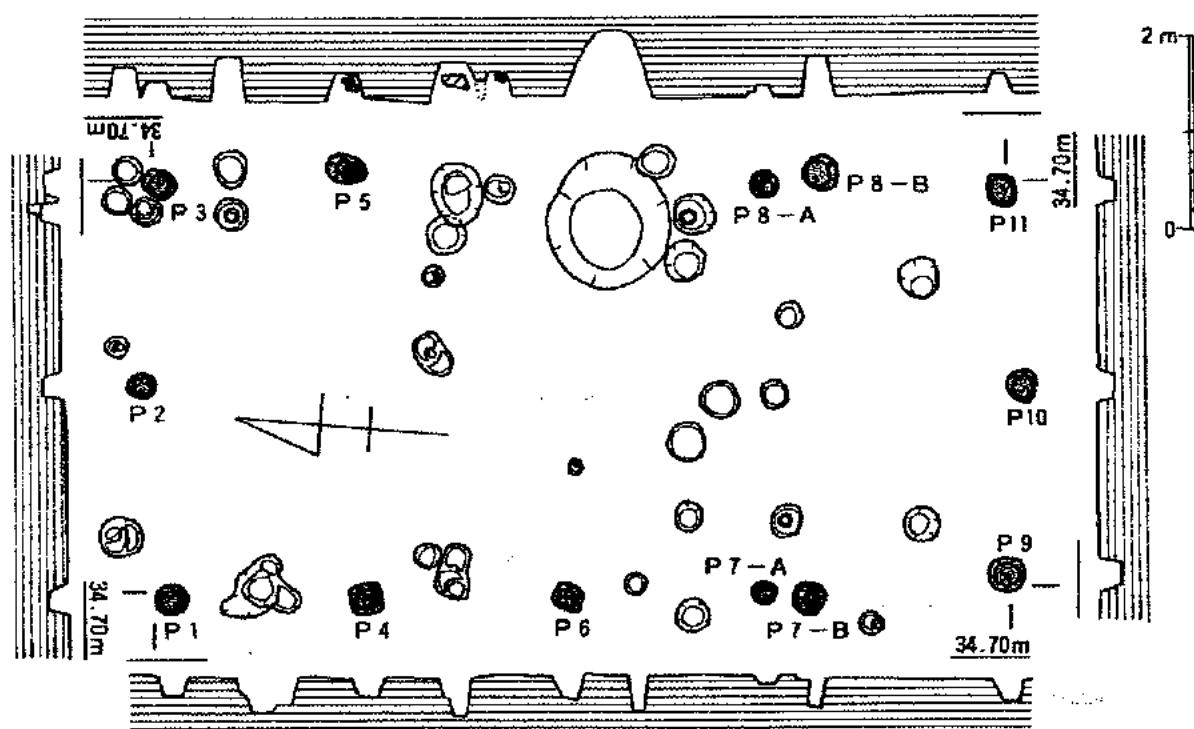
(3) SB 3

SB 3(第19図)は、調査区の南側に位置し、SB 2の北西側とSB 4の南側の間に検出した。3間×2間の掘立柱建物である。桁行中ほどの柱穴は左右に張出し胴張りである。また、梁間は東側の中柱穴が欠損している。主軸の方向はN-87°-Eを示している。

桁行は5.45mで、柱間は1.45~1.57mを測り、平均1.51mである。梁間は3.18mで、柱間の平均は1.59mである。柱穴の直径は、P3の12cmを除いて24~30cmの間で収まる。深さは13~26cmである。P4・P5・P7・P9は柱痕が残っていたものである。



第19図 富地原惣原遺跡 SB 3 実測図 (1/80)



第20図 富地原惣原遺跡 SB 4 実測図 (1/80)

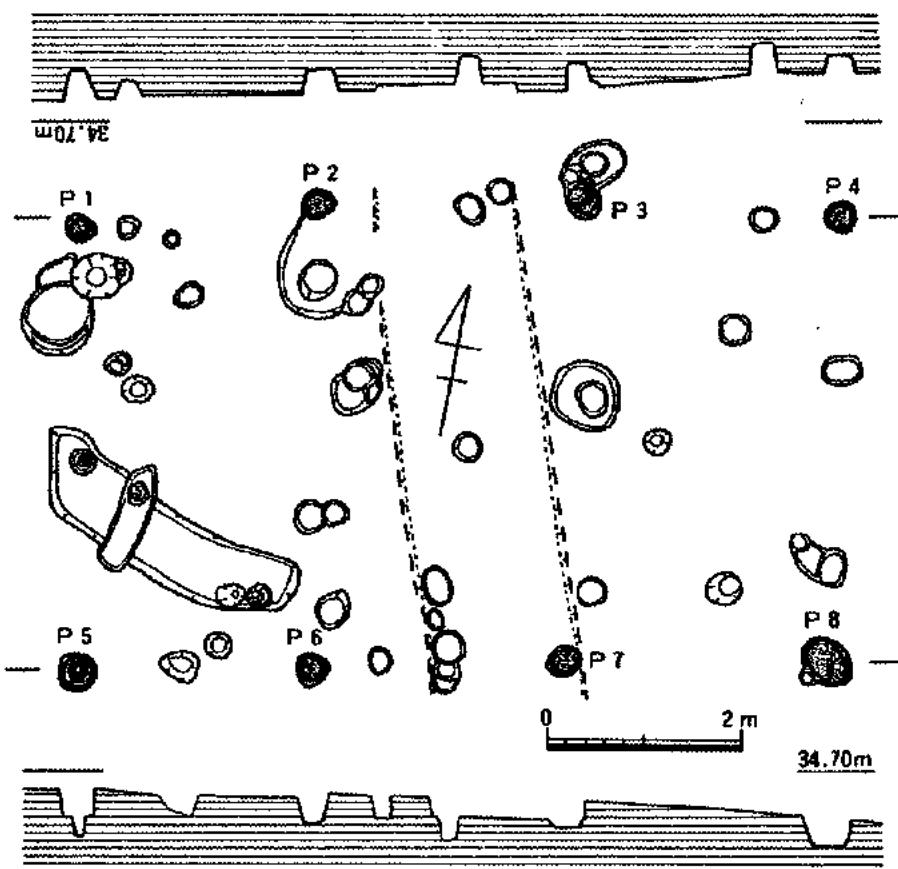
(4) SB 4

SB 4 (第20図) は、調査区の中央よりやや南側に位置し、SB 3 の北、SB 5 の南側に挟まれて検出した。4間×2間の掘立柱建物である。桁行のP 7とP 8は共に補助柱を穿ちそれぞれ便宜的にA・Bに分けた。また、P 6に対応する柱穴は認められなかった。主軸の方向はN-4°-Wを示している。

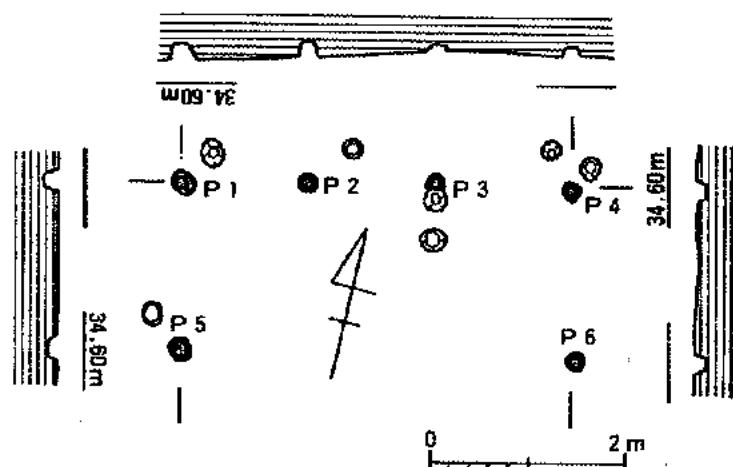
桁行は8.65mで西側の柱間はP 7 AとP 9、P 7 BとP 6の2.50m以外は2.05mである。東側の柱間はP 3とP 5間が2.03m、P 8 AとP 11間が2.43m、P 8 BとP 11間は1.93mで、平均2.18mである。梁間は4.25mで、柱間の平均は2.13mである。柱穴の直径は、26~40cmの間で取まる。深さは8~42cmである。P 7 BとP 8 Aは柱痕が残っていた。

(5) SB 5

SB 5 (第21図) は調査区のほぼ中央に位置し、SB 4 の北、SB 7 の南に検出した。3間×1間の掘立柱建物である。主軸の方向はN-78°-Eを示している。桁行は7.87mで、柱間は2.39~2.83mを測り、平均2.62mである。梁間は4.73mを測る。柱穴の直径は、P 8 の58cmを除いていずれも31~36cmの間で取まる。深さは18~48cmで東へ行く程浅くなる傾向がある。P 7 はレンチによる削平で現状は浅いが復元すると28cmである。



第21図 富地原遺跡 SB 5 実測図 (1/80)



第22図 富地原遺跡 SB 6 実測図 (1/80)

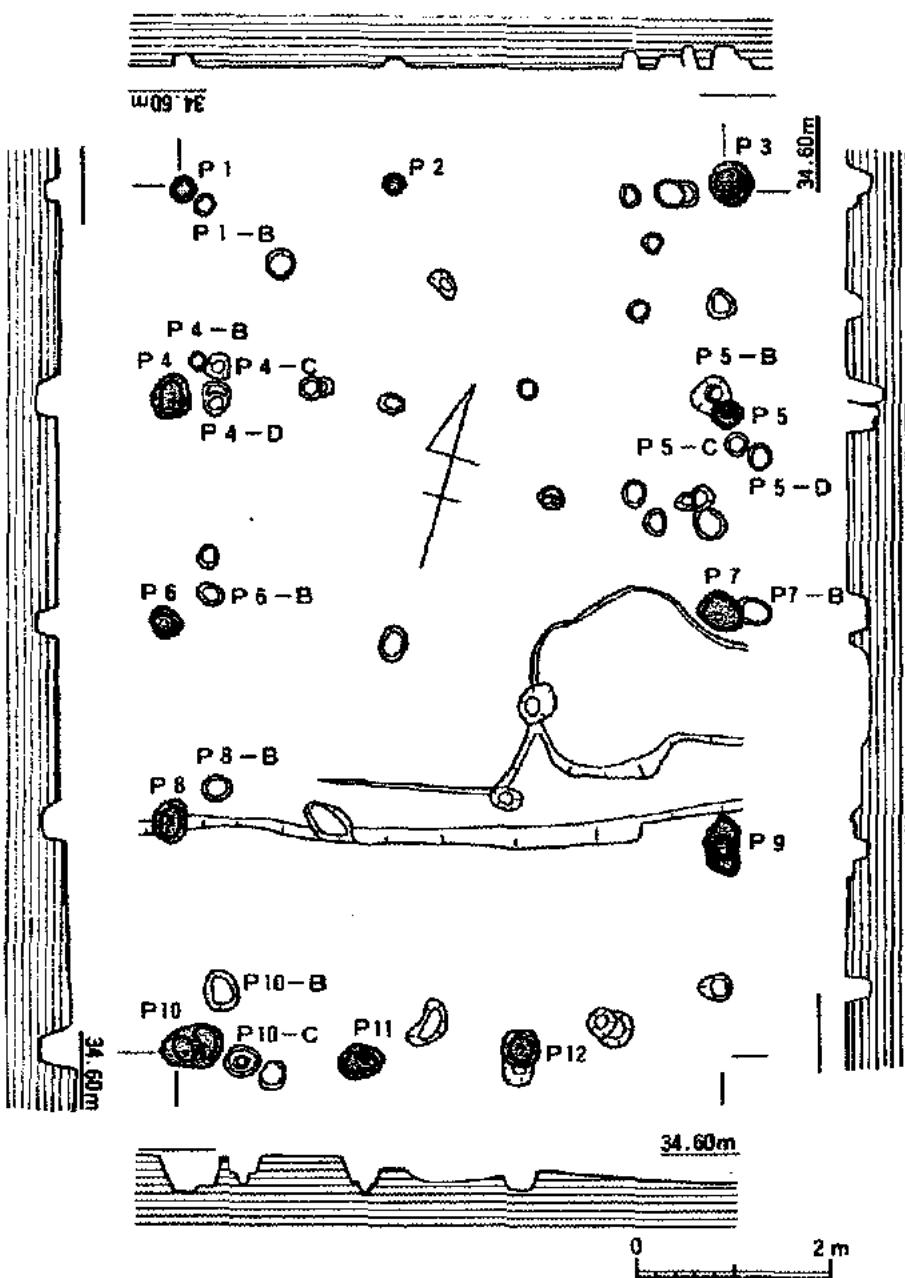
(6) SB 6

SB 6 (第22図)は、柱穴群の北端に位置し、SB 7 の北側、SK 2・3・4の南側で検出した。削平のため3間×1間の掘立柱建物であるが、桁行南側に柱穴がさらに延びる可能性がある。主軸の方向はN-76°-Wを示している。桁行は4.00mで、柱間は1.30~1.38mを測り、平均1.33mである。梁間P 1~P 5は1.76m、P 4~P 6は1.82mを測る。柱穴の直径は17~26cm、深さは6~17cmと小さく浅い。

(7) SB 7

SB 7 (第23図)は、調査区の中央よりやや北側に位置し、SB 5 の北、SB 6 の南に検出した。SK 9 および SD68 の西半分の上に掛かる4間×3間の掘立柱建物である。桁行西側の柱穴すべてと東側P 5 とP 7 は1~3本の補助柱穴を持つ。主軸の方向はN-16°-Eを示している。桁行は9.00mで、柱間は2.06~2.44mを測り、平均2.25mである。梁間は5.66mで、柱間は1.65~2.20mを測り平均1.89mである。柱穴の直径は22~65cmとやや太めである。深さは10~38cmと地形の削平によってばらつきがある。P 10・P 12は柱痕が残っていた。

遺物(第35図第6表)はP 9より肥前系の磁器および瓦の破片等が出土した。1・2・5は、染付の碗、4・6・7は、染付の皿、3は、龍泉窯系蓮弁文青磁碗、8は、丸瓦である。



第23図 富地原跡遺跡SB 7 実測図 (1/80)

2) 土 坑

(1) SK 1

SK 1 (第24図) は、調査区の北西隅に位置する大型の土坑である。検出面の平面形は長方形で、断面は逆台形を呈し床はほぼ平である。主軸の方向はN-69°-Wを示している。上端長軸4.36m、短軸2.24m、下端長軸3.48m、短軸1.40m、深さ60cmを測る。埋土は4層に分かれ、1層はやや締まりのある茶褐色土層、2層は黒褐色土層、3層は茶褐色土層で3-a及びb層はいずれも礫が入る。4層は黄褐色土層で地山の壁の土が剝がれ落ちたものである。遺物は土師器片だけである。

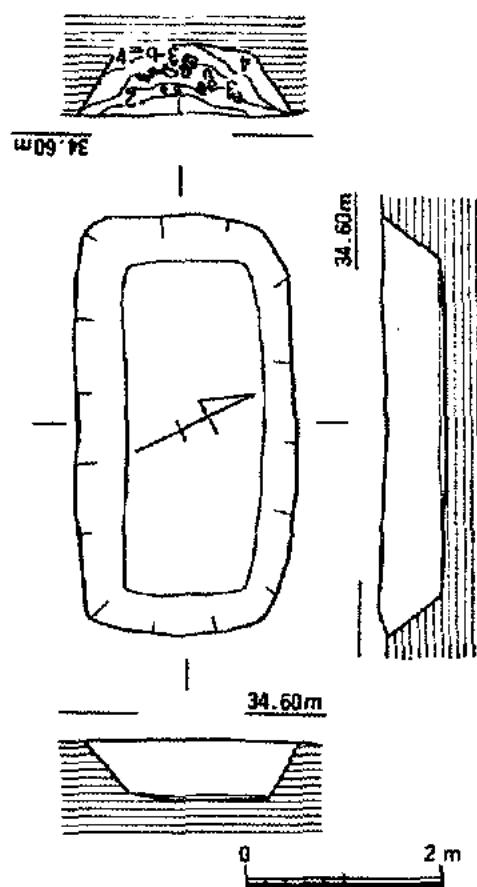
(2) SK 2

SK 2 (第25図) は、調査区の北側に位置し、SK 3, SK 4から東西に挟まれたところで検出された。遺構内は、5~40cm程の礫を多量に埋め、北側壁がややオーバーハングする。主軸の方向はN-88°-Eを示している。検出面の平面形は不定方形で、長軸1.30m、短軸1.16mを測る。10cm下部より長方形を呈する平面形を新たに検出した。上端長軸1.17m、短軸0.94m、下端長軸0.87m、短軸0.80mで中央の最も深い部分で55cmを測る。埋土は1層で黒褐色のかなり湿り気の強いシルト層である。

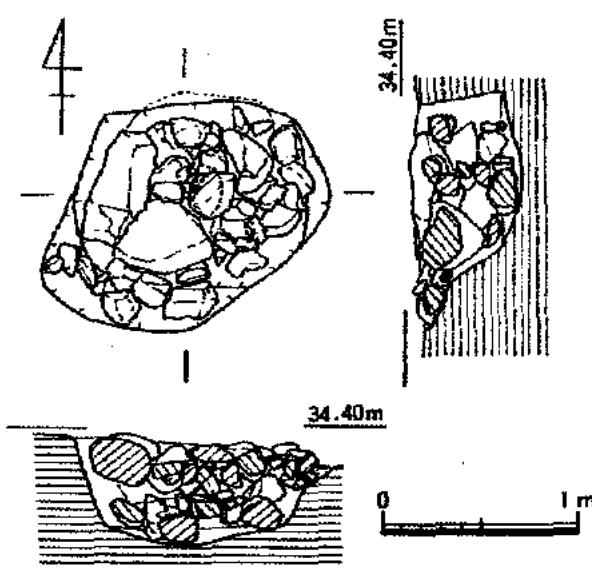
遺物 (第36図第6表) 1は、肥前系磁器碗で梅樹文を施文する。11は、半分に割れ、刻みの摩耗が著しい石臼で、礫にまじって出土した。10は、陶管の破片と思われる。

(3) SK 3

SK 3 (第26図) は、調査区の北側に位置し、SK 2の東側に隣接したところで検出した。主軸の方向はN-15°-Eを示している。検出面の平面形は長橢円形で東側に浅い溝が走る。規模は、上端長軸2.85m、短軸1.30m、下端長軸2.55m、短軸0.38m、深さは東側で27cm、西側で37cmを測る。埋土は2層に分かれ、大部分は第1層の茶褐色細砂粒質土で、第2層は床面5cm程のところで灰褐色粘土層となる。西側に60cm程の巨礫が2つあ



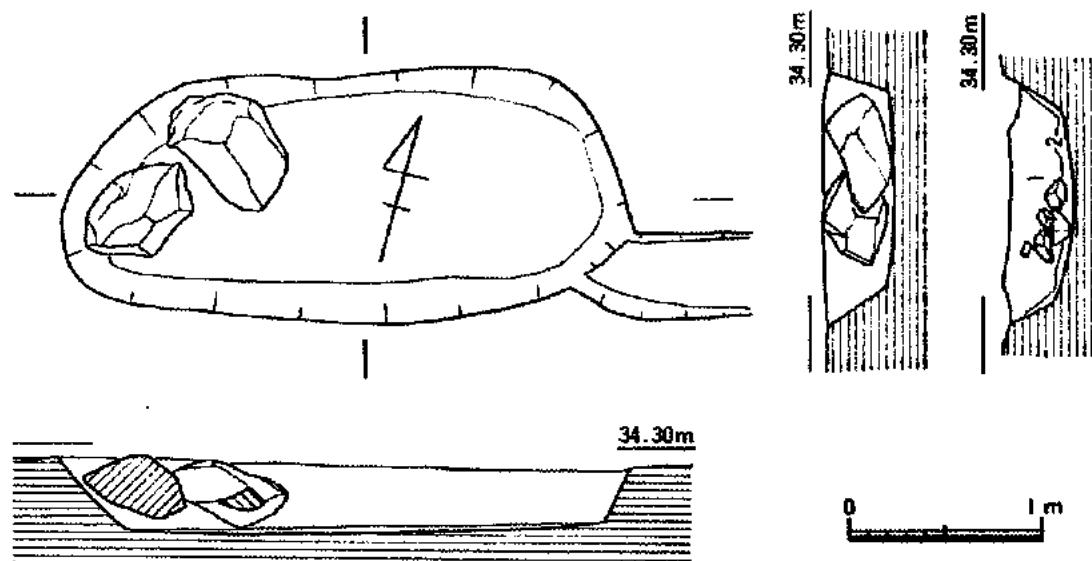
第24図 富地原跡原遺跡 SK 1 実測図 (1/80)



第25図 富地原跡原遺跡 SK 2 実測図 (1/40)

り、埋土中にも若干の礫が認められた。

遺物（第36図第6表）は、陶器や磁器等が出土した。2・4・7は、肥前系の染付の碗である。8は、唐津系の碗。3は、鉢である。10は、SK 2と陶管と同一個体である。



第26図 菅地原窯跡 SK 3 実測図 (1/40)

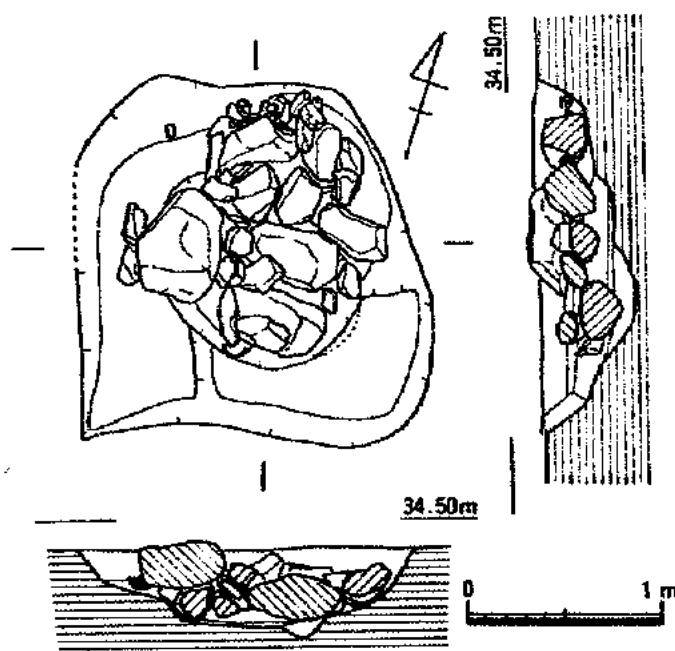
(4) SK 4

SK 4（第27図）は、調査区北側に位置し、SK 2の西側より隣接して検出した。遺構内のやや北西側にSK 2と同様の不揃いの巨礫を多量に検出した。検出面の平面形は不定圓丸方形を呈し、主軸の方向はN-72°-Eを示している。規模は、上端長軸1.80m、短軸1.73mを測り、床面は南側から左回りで深くなり、中心よりやや北側が最も深く48cmである。

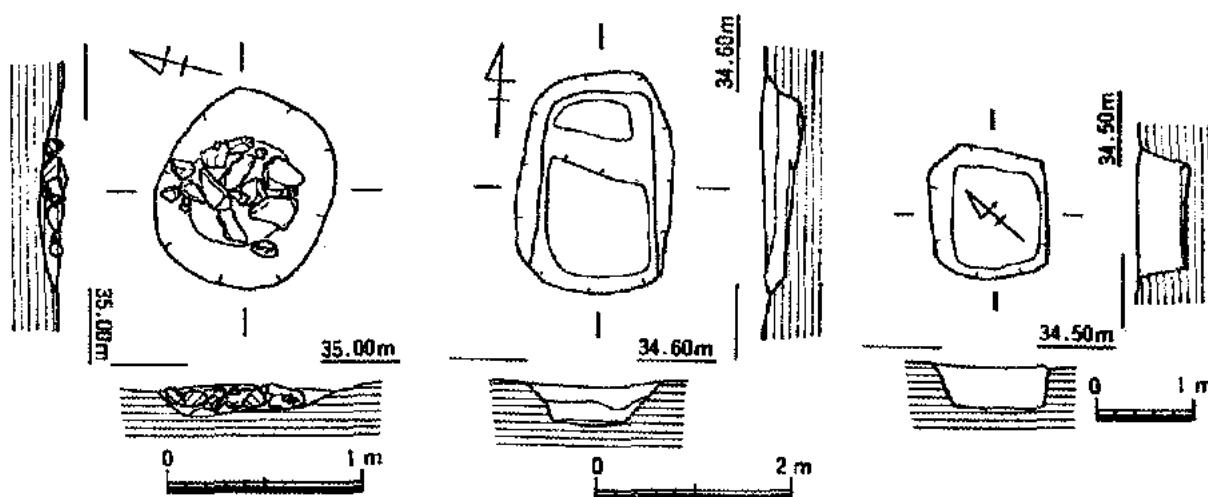
遺物（第36図第6表）5・6・9は、肥前系の磁器や唐津系の陶器、土師器の皿などである。10は、SK 2の陶管と同一個体である。

(5) SK 5

SK 5（第28図）は、調査区北西側より単独で検出した。検出面の平面形は楕円形を呈し、主軸の方向はN-76°-Wを示している。長径1.00m、短径0.80m、深さ10~15cmを測る。埋土は茶褐色細砂粒質土である。遺構内から



第27図 菅地原窯跡 SK 4 実測図 (1/40)



第28図 豊地原惣原遺跡 SK 5 実測図
(1/40)

第29図 豊地原惣原遺跡 SK 6 実測図
(1/80)

第30図 豊地原惣原遺跡
SK 7 実測図 (1/80)

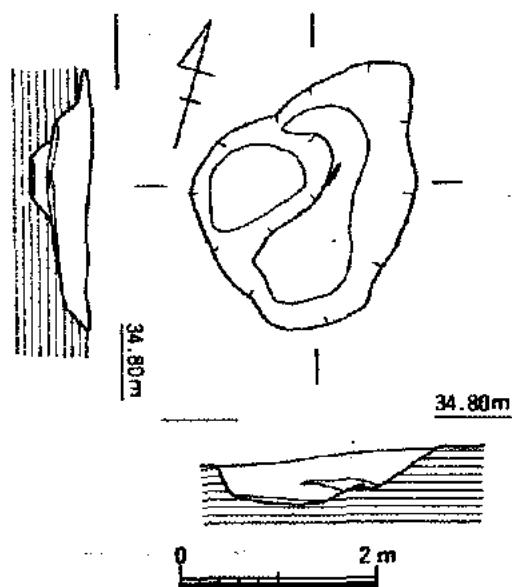
は、10~25cm程の礫を10数個不規則に置かれた状態で検出した。

(6) SK 6

SK 6 (第29図) は、調査区西側より単独で検出した土坑である。検出面の平面形は隅丸長方形である。埋土は灰黒褐色細砂粒質土で礫も含まれる。上端は南側を除き縁が斜めに削られ、床面は北側で10cm程深くなり二段に段落ちする。主軸の方向はN-2°-Wを示している。上端長軸2.32m、短軸1.57mで、上段床面縦軸1.06m、横軸1.01m、深さ16~31cm、下段床面縦軸0.38m、横軸0.78m、最深部42cmを測る。

遺物（第37図第6表）は、磁器や陶器、瓦質土器、須恵質土器などあらゆる雑器が出土している。1・2は、磁器碗である。5は、唐津系の碗の底部、3・16は、いずれも上野・高取系の皿。4は、高取系の徳利の頸部である。7は、瓦質土器で蓋と考えられる。6は、土師器の小皿で底部糸切り痕

である。



(7) SK 7

SK 7 (第30図) は、調査区の最も北端より単独で検出した。検出面の平面形は方形で、北隅が約40cm程の一辺が削られる。主軸の方向はN-42°-Eを示している。上端長軸1.36m、短軸1.19mで、下端長軸1.06m、短軸0.89mを測る。床面は北東側の辺でやや深くなるほかはほぼ深さ42cm程である。埋土は黒褐色細砂粒土で礫も多數含まれていた。

遺物（第37図第6表）10・11・14-15は、磁器碗や土師器の皿、瓦質土器の鉢などを出土した。

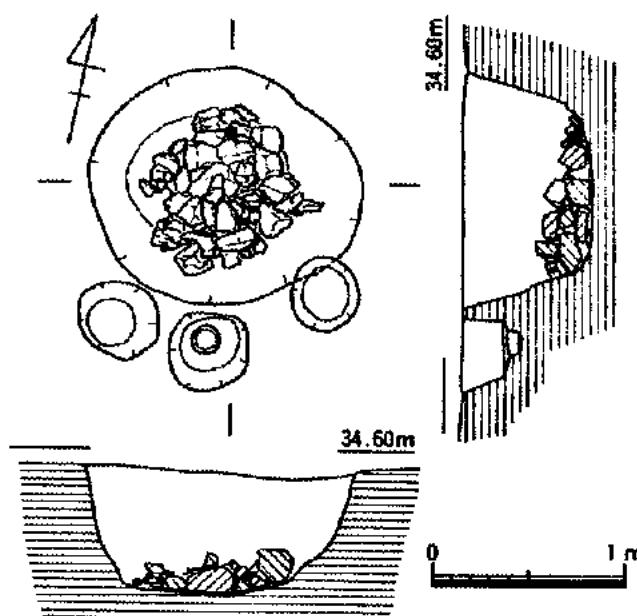
第31図 豊地原惣原遺跡 SK 6 実測図 (1/80)

(8) SK50

SK50(第31図)は、調査区のはば中央に位置する土坑である。検出面の平面形は、不定隅丸三角形を呈す。礫はかなり含まれ、不規則に投げ込まれた状態で検出した。長辺2.45m、短辺2.27mを測り、床面は遺構東側より中段をもち、西側がやや深くなる。中段の深さは36cm、最深部で60cmを測る。

鉄器(第39図)は、庖丁と推測し、全長28.9cm、身幅2.7cmを測り、茎の長さ2.8cm、幅0.8cm、厚さ0.35cmを測る。刃は直線的に切先3cm程の所から反る。背は切先より5cm程から大きくカーブする。

土器(第38図第6表)6・7は、龍泉窯系の青磁碗。4・5は、白磁。8・10は、摺鉢。9は、脚付釜である。

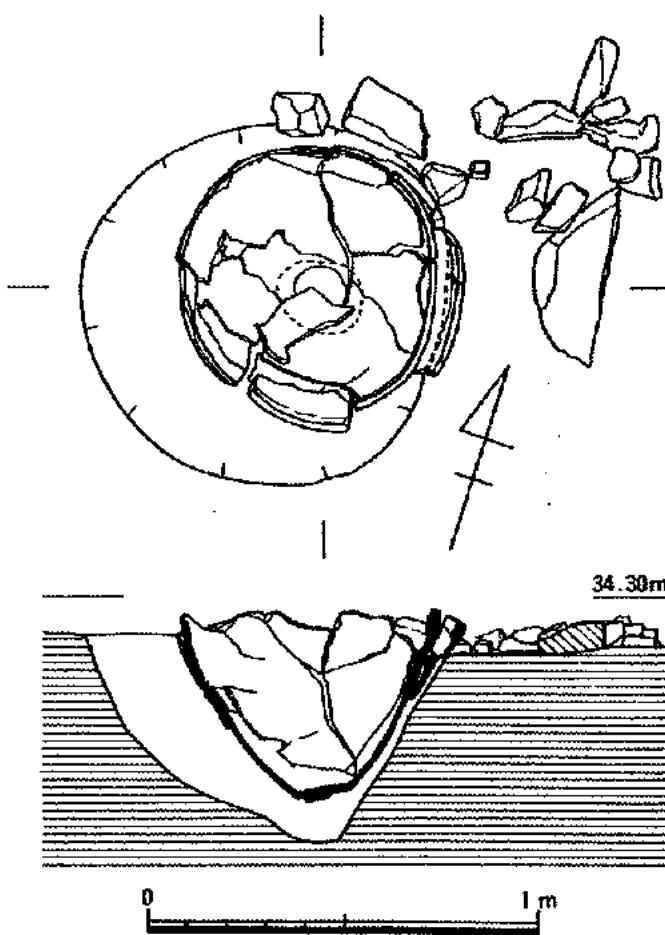
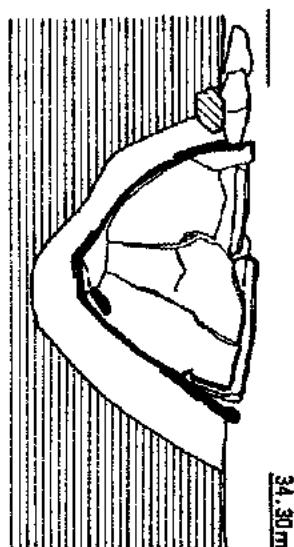


第32図 豊地原惣原遺跡 SK50実測図 (1/40)

(9) SK52

SK52(第32図)は、調査区の中央よりやや南に位置し、SB4の東側に検出した。検出面の平面形は梢円形を呈し、上端長軸1.39m、短軸1.24m、下端長軸0.83m、短軸0.72m、深さ63cmを測る。礫は遺構の下層、遺構検出面より45cm下から塊って検出した。

11(第38図第6表)は瓦質鍋の口縁部である。

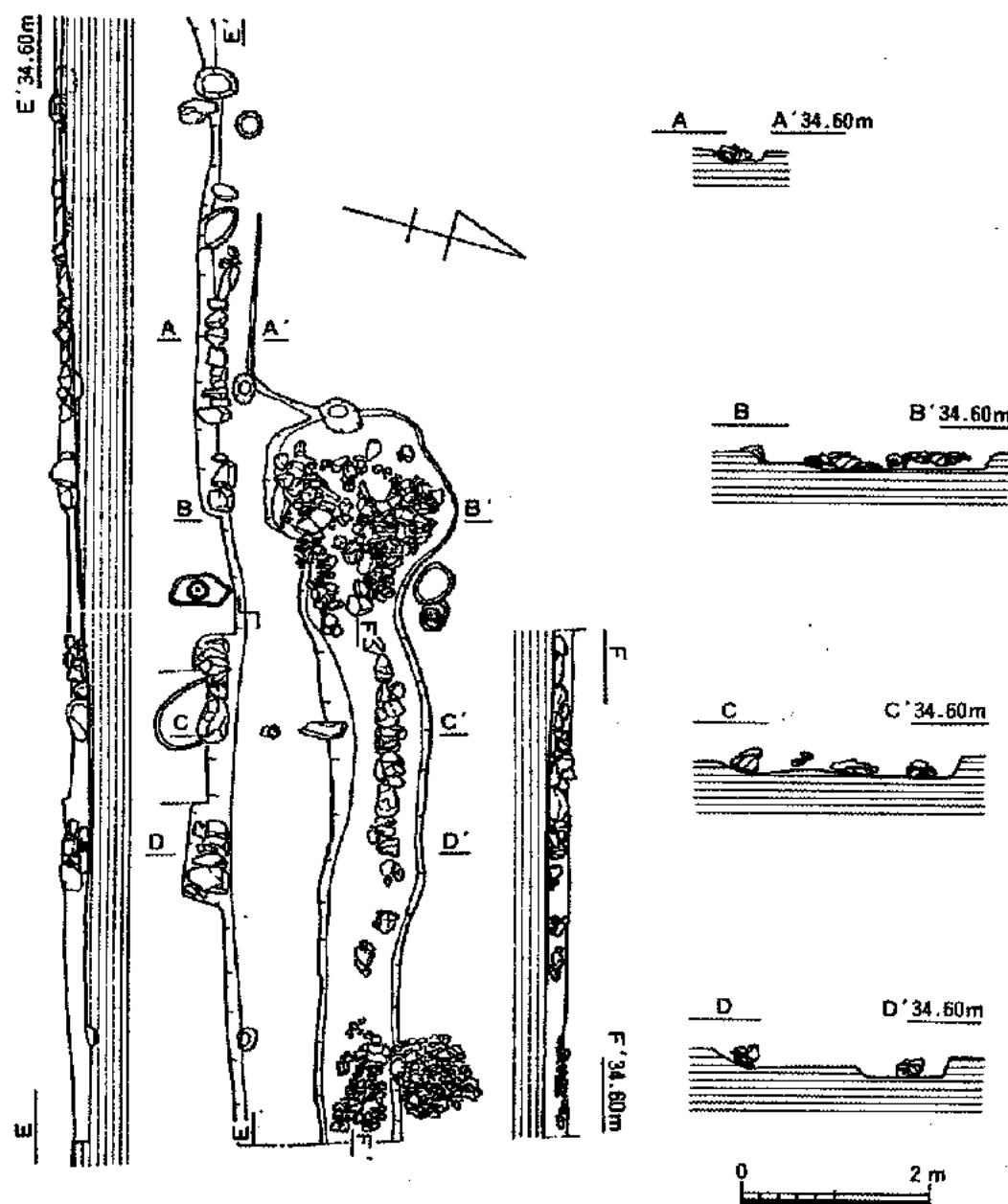


第33図 豊地原惣原遺跡 ST 8 実測図 (1/20)

00 ST 8

ST 8 (第33図) は、調査区北東側の緩斜面より検出した。検出面の平面形はほぼ円形である。埋甕は遺構を少し大きめに掘り、甕を北東寄りにつめて埋置している。遺構の径は0.95mを測る。断面は碗形で、深さ50cmを測る。遺構の北北東側には礫が散在している。

遺物（第38図第6表）1の埋甕は、口径65.2cm・底径14.7cm・器高54.8cmである。外面は、体部と口縁の境に2条の凹線を巡らし、底部際では、指圧痕がみられる。内面の上半部は、同心円の印き、下半部には横方向のヘラナデを施す。胎土は5mm程の石英質の礫を多く含む。色調は肌色である。2・3は上師器の皿である。



第34図 高地原惣原遺跡 SK 9・SD68実測図 (1/80)

II SK 9・SD68

SK 9(第34図)の平面形は不定円形で、横幅2.0m、縦長1.4m、深さ25cmを測る。土坑の中には多くの礫が検出された。礫の大きさは、5~30cmと不揃いで、検出時の位置も一様ではなかった。当遺構はSD68のほぼ中央より検出され、これと関連する遺構と思われる。

SD68は、遺跡の中央部をほぼ東西方向に約12mに渡って検出された。溝はSK 9を境に西半分と東半分とでは様相が異なり、石列も南側の壁と北側の壁では若干の違いが見られる。

西半分は、南側壁だけに1列1段の石を並べて置く。溝の幅は約0.5m程で、西へ2m程向うと溝は消滅する。溝は南側のみの段となり石を置かなくなる。段は南側に向きを変えさらに延びる。

東半分は、SK 9を境に両壁で石を置く。西側からの溝とSK 9からの溝が合流し、幅は約1.8mと広くなる。SK 9からの溝は、幅80cmを測り西側からの溝よりやや深めである。

南側壁は、10~20cm程の深さで、東へ向うほど深くなる。そのため石も西側で1段だったものが、東側では1段から2段積む。石列は延びず、約3mの長さで2か所に置かれ、掘り方も石列に応じて掘られている。

北側壁は、深さ20cm程で、幅30cm厚さ10cm大の石を基礎に置き、上に拳大の礫を1段から2段積む。掘り方は、石列より余裕を持って掘られている。

遺物(第40・41図第6表)は、肥前系の染付碗や皿をはじめ、徳利、鉢、仏飯具、瓦などを出土した。両者の遺構から出土した磁器においては接合関係にある。詳細は表を参照。

3. 出 土 遺 物

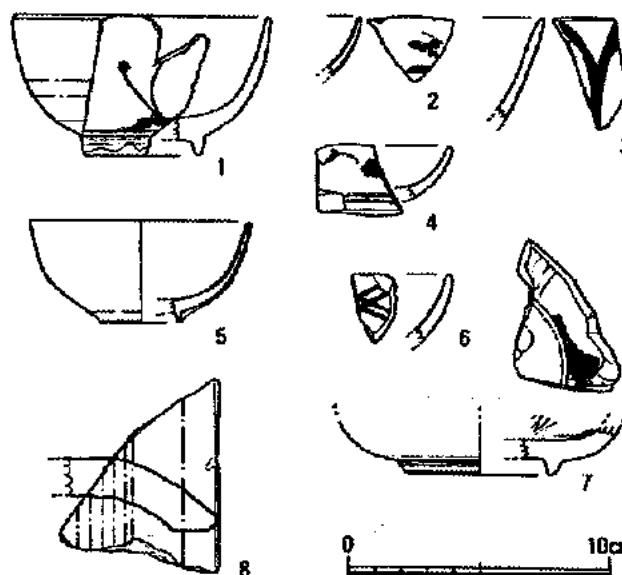
土器は、SB7・P9:8点、SK2:1点、SK3:5点、SK4:3点、SK6:12点、SK7:4点、SK8:3点、SK50:7点、SK52:1点、SK9・SD68:23点それぞれ出土した。

近世の遺物としては、肥前系染付の碗が17点出土している。器形は胴下部をやや丸く仕上げたもの及び筒形碗で、広東形碗や端反形碗はここでは出土していない。絵柄においては、梅樹文・桐の葉文・網目文・輪宝繋文などが見られる。肥前系染付の皿は9点出土し、見込や高台に五弁花文コンニャク印判や「過福」銘、唐草文などを施している。肥前系青磁碗は2点出土した。また、上野・高取系陶器や唐津系陶器と思われるもの9点、土師器の皿は5点、その他雜器類を多数出土した。

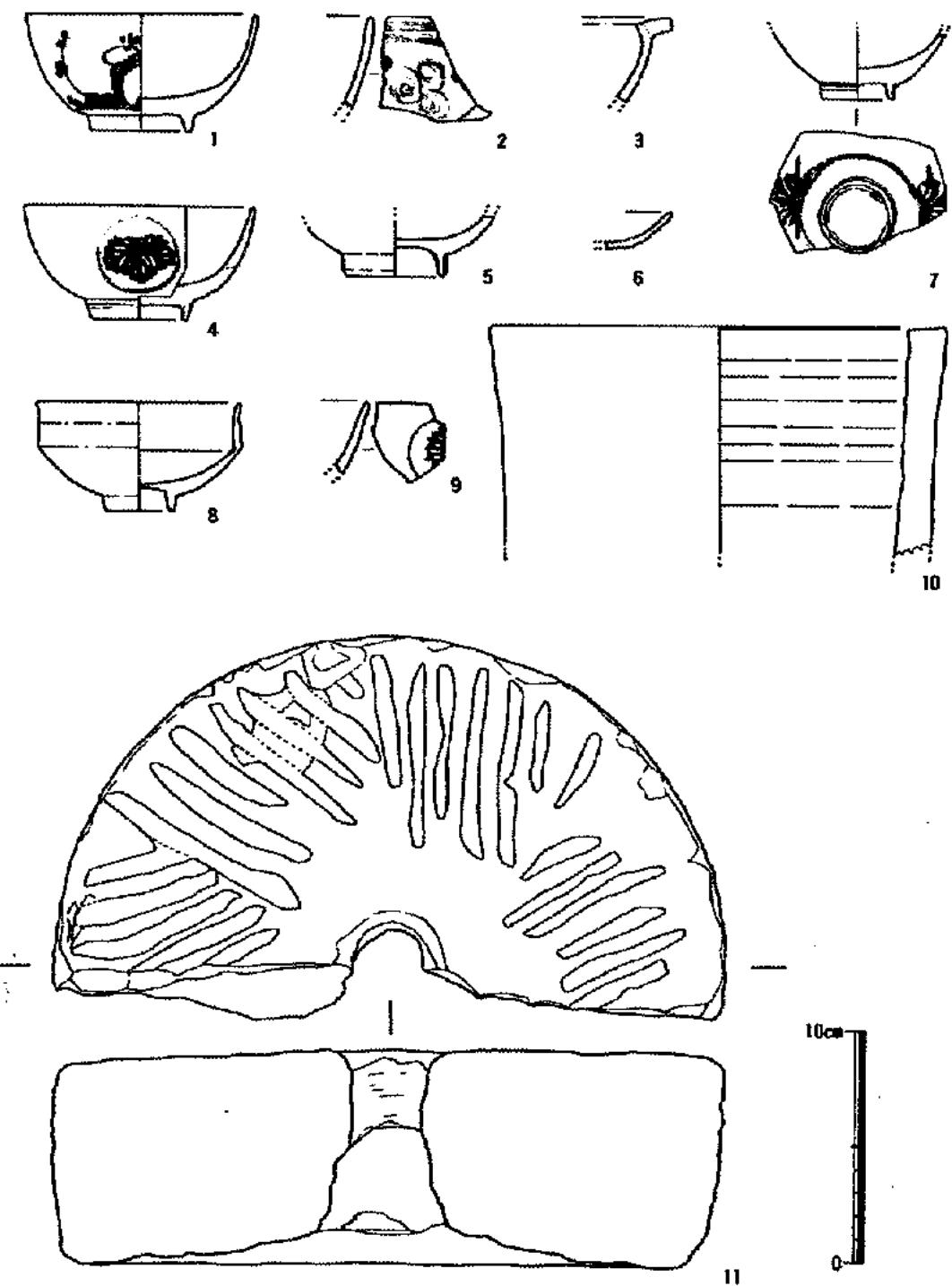
中世の遺物は、龍泉窯系青磁碗3点、白磁2点、備前系摺鉢、瓦質土器など含まれ、そのほとんどが、SK50・52からの出土である。

その他SK2より石臼が1点、SK50より庖丁と推測されるものが1点出土した。

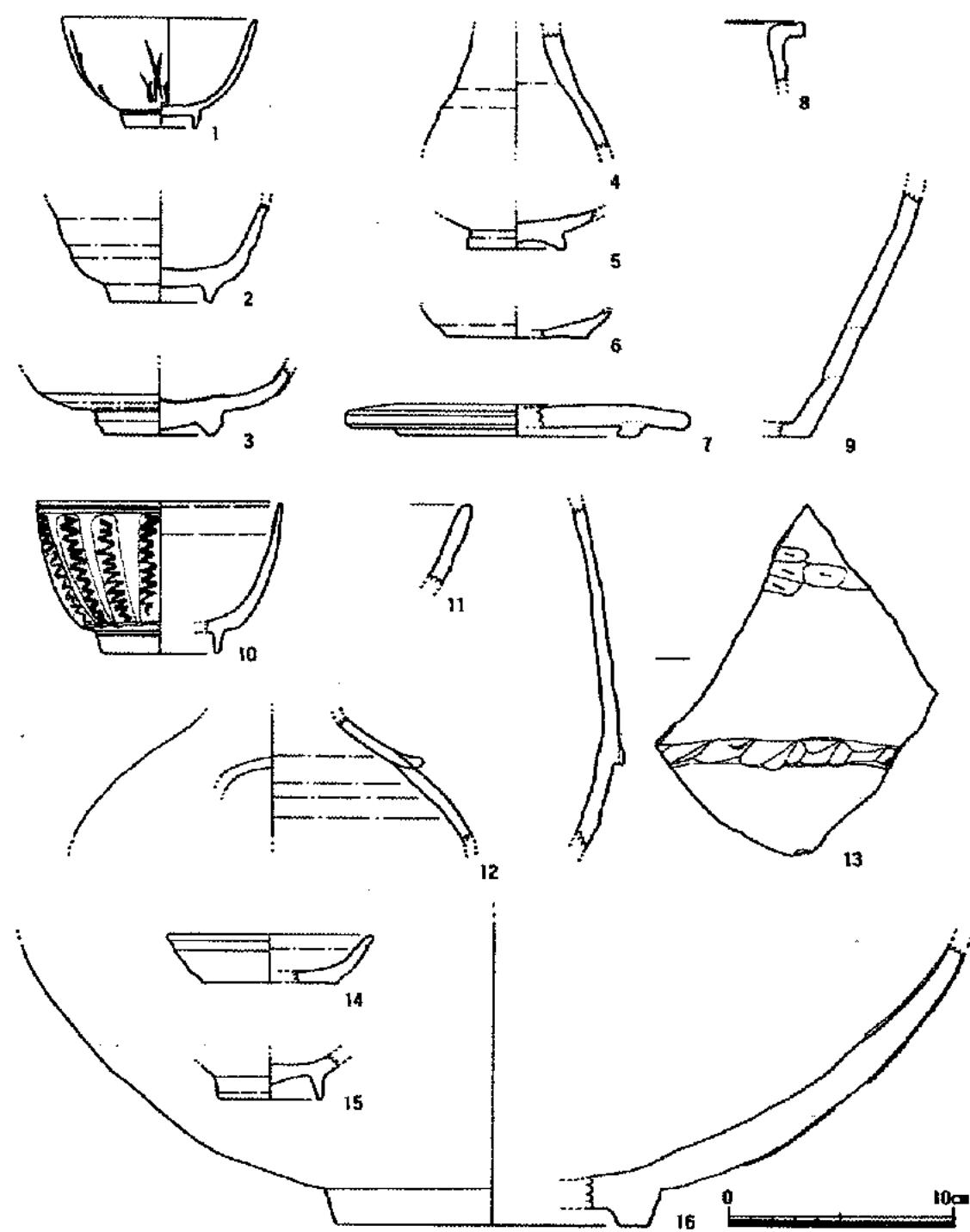
以下、図表に掲載する。



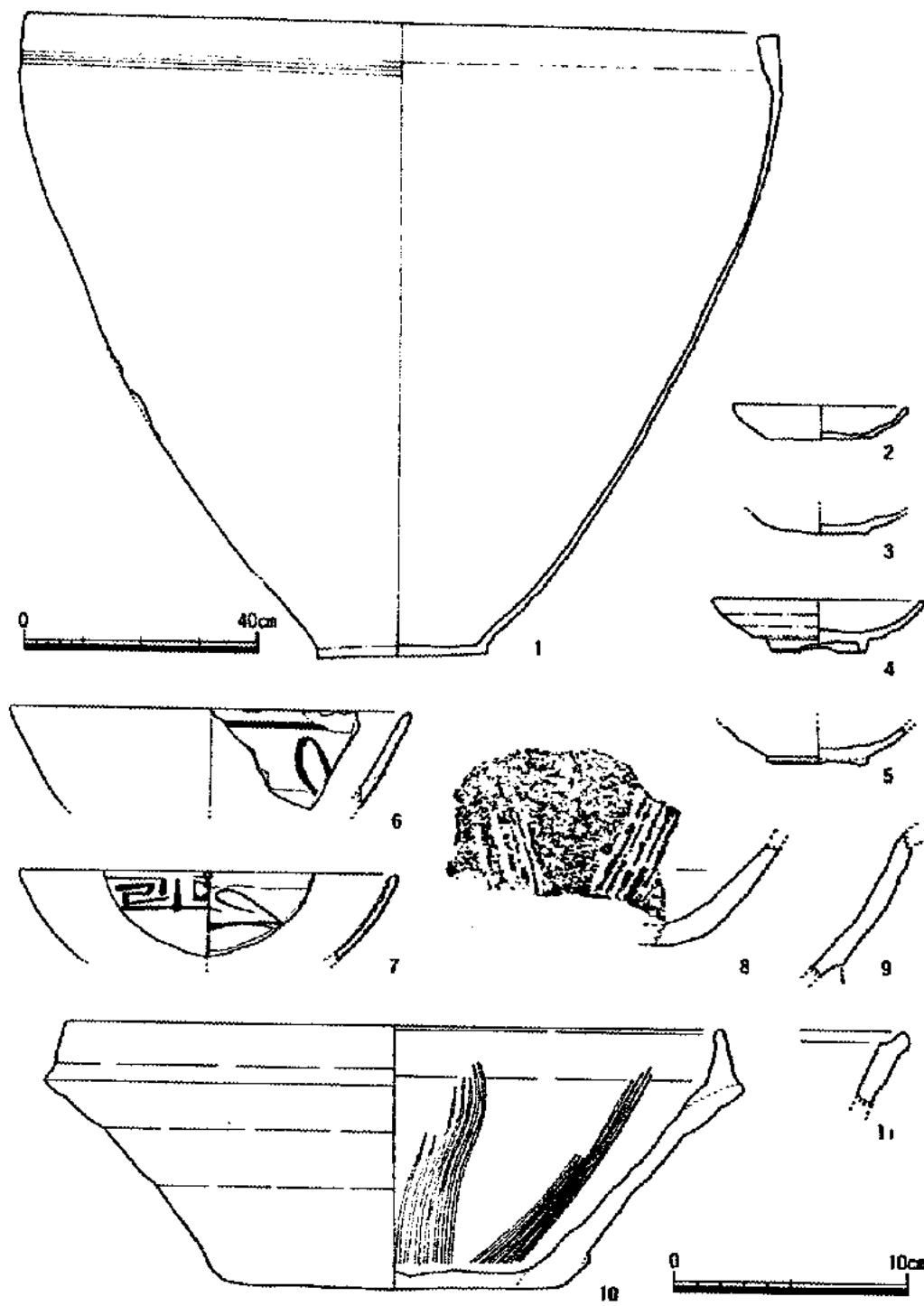
第35図 豊地原遺跡SB7・P9出土遺物実測図(1/3)



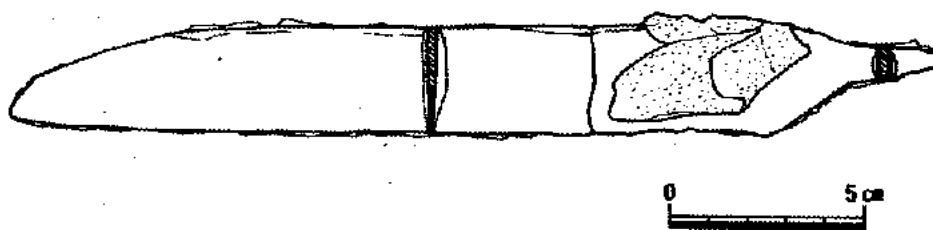
第36圖 莒地原鄉原遺跡 SK 2・3・4 出土遺物實測圖 (1/3)



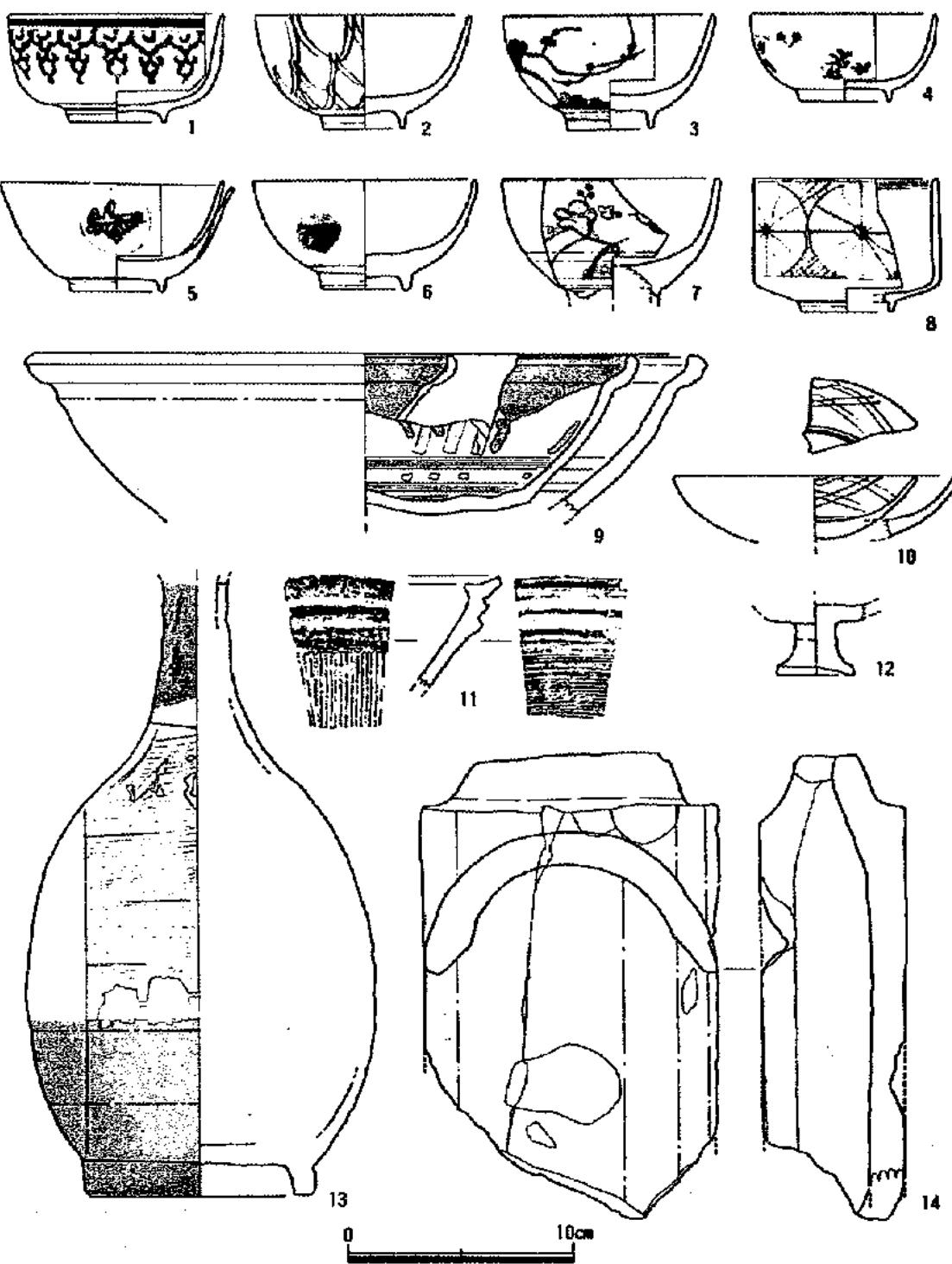
第37図 萩地原故原遺跡 SK 6・7 出土遺物実測図 (1/3)



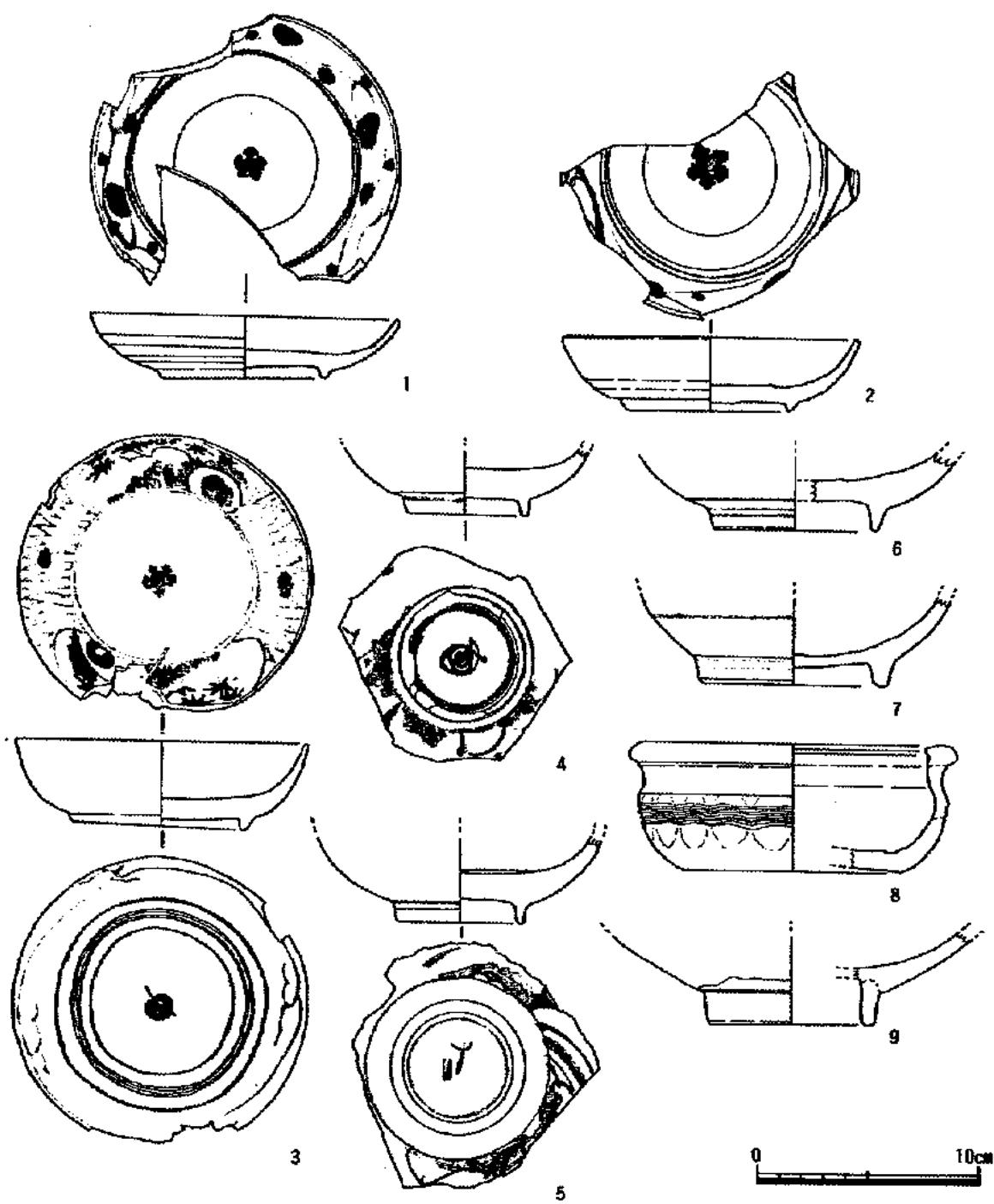
第38図 萩原惣原遺跡 ST 8 - SK50 · 52出土遺物実測図 (1/12・1/3)



第39図 萩原惣原遺跡 SK50出土鐵器実測図 (1/2)



第40図 薩地原古原遺跡 SK 9・SD 68出土遺物実測図 I (1/3)



第41圖 舊地原物原還跡 SK 9 - SD68出土遺物實測圖Ⅱ (1/3)

第6表 萩原原跡出土遺物計測表

表12

番号	遺物	種類	目	径	直	高	幅	厚	地	土	色	形	特	種	種
35-1	SE779	肥料系灰付	瓶	(10.0)	1.8	1.0	1.0	0.7	前	灰	灰白色	平底器で開口	鶴竹物削ぎ	0052	
35-2	SE779	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	青白色	透明白や灰青色	口縁が丸けその上から細を握す。	0053		
35-3	SE779	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	黄褐色	黄赤色	通體	鶴竹物削ぎ	0054	
35-4	SE779	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	灰褐色	灰赤色	通體	鶴竹物削ぎ	0055	
35-5	SE779	肥料系灰付	瓶	8.6	3.0	-	-	-	前	白	灰青灰色半透明	底面が多い細かく彫文	0056		
35-6	SE779	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	石灰色	透明	-	鶴竹物削ぎ	0057	
35-7	SE779	肥料系灰付	瓶	-	-	(5.0)	-	-	前	青白色	透明	-	鶴竹物削ぎ	0058	
35-8	SE779	肥料系灰付	瓶	-	-	-	10.0	-	前	暗灰色	-	-	鶴竹物削ぎ	0059	
36-1	SE2	肥料系灰付	瓶	10.1	4.4	5.2	-	-	前	灰褐色	灰褐色	平底器	鶴竹物削ぎ	0060	
36-2	SE3	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	灰	透明	3つ波文	鶴竹物削ぎ	0061	
36-3	SE3	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	灰	透明	3つ波文	鶴竹物削ぎ	0062	
36-4	SE3	肥料系灰付	瓶	(10.0)	1.8	3.0	5.0	-	前	石灰色	透明	口縁は直上を坂掛けし字に彫ける	鶴竹物削ぎ	0063	
36-5	SE3	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	半透明	倒置文、鶴竹物削ぎ	0064		
36-6	SE4	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	-	鶴竹物削ぎ	0065	
36-7	SE4	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	倒置文、鶴竹物削ぎ	0066		
36-8	SE4	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	倒置文、鶴竹物削ぎ	0067		
36-9	SE4	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	倒置文、鶴竹物削ぎ	0068		
36-10	SE4	肥料系灰付	瓶	16.4	-	-	-	-	前	白灰色	透明	倒置文、鶴竹物削ぎ	0069		
36-11	SE2	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	倒置文、鶴竹物削ぎ	0070		
37-1	SE6	調理	瓶	9.8	3.0	5.0	-	-	中	灰褐色	白色	透明(黒色)	水草文、全体的に横手	0071	
37-2	SE6	肥料系青釉	瓶	4.6	-	-	-	-	前	灰白色	灰青色で透明	甕付に砂目が付る	0072		
37-3	SE6	肥料系青釉	瓶	5.6	-	-	-	-	前	青白系色	透明	全体上部より剥落し、口縁が立ち上がる	0073		
37-4	SE6	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	-	倒置文	0074		
37-5	SE6	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	石英を若干口縁は半に仕上げる	0075		
37-6	SE6	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	透明白	0076		
37-7	SE6	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	内外面とも透明白コナデ	0077		
37-8	SE6	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	内外面とも透明白コナデ	0078		
37-9	SE6	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	内外面とも透明白コナデ	0079		
37-10	SE6	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	内外面とも透明白コナデ	0080		
37-11	SE6	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	内外面とも透明白コナデ	0081		
37-12	SE6	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	内外面とも透明白コナデ	0082		
37-13	SE6	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	白灰色	透明	内外面とも透明白コナデ	0083		
37-14	SE7	土壤	瓶	(9.2)	1.6	2.2	-	-	收	灰	透明	内外面とも透明白コナデ	0084		
37-15	SE7	土壤	瓶	-	-	-	-	-	前	灰褐色	透明	内外面とも透明白コナデ	0085		
37-16	SE7	土壤	瓶	-	-	-	-	-	前	灰褐色	透明	内外面とも透明白コナデ	0086		
38-1	SE8	土壤	大瓶	45.2	14.7	54.8	-	-	小	小口を含む	黑色	-	本支番号	透明白透尺1/12	0087
38-2	SE8	土壤	瓶	7.8	4.2	1.5	-	-	前	深褐色	-	-	内外透明白コナデ	透明白透尺1/12	0088
38-3	SE8	土壤	瓶	-	-	-	-	-	前	深褐色	-	-	内外透明白コナデ	透明白透尺1/12	0089
38-4	SE8	土壤	瓶	9.2	4.2	2.3	-	-	前	深褐色	-	-	内外透明白コナデ	透明白透尺1/12	0090
38-5	SE8	土壤	瓶	-	-	-	-	-	前	深褐色	-	-	内外透明白コナデ	透明白透尺1/12	0091
38-6	SE8	肥料系青釉	瓶	(17.2)	-	-	-	-	前	深褐色	透明白	透明白透尺1/12	内外透明白コナデ	透明白透尺1/12	0092
38-7	SE8	肥料系青釉	瓶	(16.2)	-	-	-	-	前	深褐色	透明白	透明白透尺1/12	内外透明白コナデ	透明白透尺1/12	0093
38-8	SE8	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	深褐色	透明白	透明白透尺1/12	内外透明白コナデ	透明白透尺1/12	0094
38-9	SE8	肥料系青釉	瓶	-	-	-	-	-	前	深褐色	透明白	透明白透尺1/12	内外透明白コナデ	透明白透尺1/12	0095
38-10	SE8	肥料系青釉	瓶	(27.4)	(14.4)	12.3	-	-	前	深褐色	透明白	透明白透尺1/12	内外透明白コナデ	透明白透尺1/12	0096
38-11	SE82	瓦質土器	瓶	-	-	-	-	-	前	深褐色	透明白	透明白透尺1/12	内外透明白コナデ	透明白透尺1/12	0097
40-1	SE9	肥料系灰付	瓶	9.6	4.4	4.9	-	-	前	青白色	透明(玻璃)	透明白	鶴竹物削ぎ	透明白	0098
40-2	SE9	肥料系灰付	瓶	9.6	3.7	5.2	-	-	前	青灰白色	透明	透明白	鶴竹物削ぎ	透明白	0099
40-3	SE9	肥料系灰付	瓶	9.6	3.9	5.2	-	-	前	灰白色	透明	透明白	鶴竹物削ぎ	透明白	0100
40-4	SE9	肥料系灰付	瓶	8.4	4.0	4.0	-	-	前	灰白色	透明(玻璃)	透明白	鶴竹物削ぎ	透明白	0101
40-5	SE9	肥料系灰付	瓶	10.0	4.2	5.1	-	-	前	灰白色	透明	3方向に網目文、蓋付隙間	鶴竹物削ぎ	透明白	0102
40-6	SE9	肥料系灰付	瓶	9.8	3.5	5.1	-	-	前	灰白色	透明	くずれた網目文	鶴竹物削ぎ	透明白	0103
40-7	SE9	肥料系灰付	瓶	10.0	-	-	-	-	前	青白色	透明	網目文	鶴竹物削ぎ	透明白	0104
40-8	SE9	肥料系灰付	瓶	9.3	4.2	5.1	-	-	前	青白色	透明	網目文	鶴竹物削ぎ	透明白	0105
40-9	SE9	肥料系灰付	瓶	(29.0)	-	-	-	-	前	青白色	透明	カサカサ	鶴竹物削ぎ	透明白	0106
40-10	SE9	肥料系灰付	瓶	(12.0)	-	-	-	-	前	青白色	透明	口縁内部を研ぐ跡をさかくる外反させる	鶴竹物削ぎ	透明白	0107
40-11	SE9	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	青白色	透明	くずれた網目文	鶴竹物削ぎ	透明白	0108
40-12	SE9	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	青白色	透明	網目文	鶴竹物削ぎ	透明白	0109
40-13	SE9	肥料系灰付	瓶	-	-	-	15.6	-	前	青白色	透明	口縁内部を研ぐ跡をさかくる外反させる	鶴竹物削ぎ	透明白	0110
40-14	SE9	肥料系灰付	瓶	-	-	-	5.4	12.0	前	青白色	透明	口縁内部を研ぐ跡をさかくる外反させる	鶴竹物削ぎ	透明白	0111
41-1	SE9	肥料系灰付	瓶	13.6	7.0	2.8	-	-	前	灰白色	透明(玻璃)	見込み底文、五弁花文コンニャク瓶、蛇の目物削ぎ	鶴竹物削ぎ	透明白	0112
41-2	SE9	肥料系灰付	瓶	13.2	7.2	3.3	-	-	前	灰	透明(玻璃)	見込み底文、五弁花文コンニャク瓶、蛇の目物削ぎ	鶴竹物削ぎ	透明白	0113
41-3	SE9	肥料系灰付	瓶	13.3	6.6	4.0	-	-	前	青白色	透明	竹丸・鶴嘴文・斜交横文、高台「興福」款	鶴竹物削ぎ	透明白	0114
41-4	SE9	肥料系灰付	瓶	-	-	5.6	-	-	前	青白色	透明(緑青緑色)	見込み五弁花文コンニャク瓶、高台「興福」款	鶴竹物削ぎ	透明白	0115
41-5	SE9	肥料系灰付	瓶	-	-	5.4	-	-	前	青白色	透明	見込み五弁花文コンニャク瓶	鶴竹物削ぎ	透明白	0116
41-6	SE9	肥料系灰付	瓶	-	-	7.4	-	-	前	青白色	透明	見込み五弁花文コンニャク瓶	鶴竹物削ぎ	透明白	0117
41-7	SE9	肥料系灰付	瓶	-	-	8.2	-	-	前	白	透明	内面は擦痕しヨウナデ	鶴竹物削ぎ	透明白	0118
41-8	SE9	肥料系灰付	瓶	-	-	6.6	-	-	前	灰褐色	透明	外面擦痕は直角鏡5枚の状態	鶴竹物削ぎ	透明白	0119
41-9	SE9	肥料系灰付	瓶	-	-	-	-	-	前	被白色	透明	見込み毛口日	鶴竹物削ぎ	透明白	0120

4. 富地原地区の史料

富地原地区は、明治22年まで筑前国宗像郡藤原村と書かれ史料に登場する。以下代表的な富地原地区に関わる伝承をいくつかあげる。

富地原地区地名起源説話に「古賀ニアリ天慶二年己亥。正三位中納言藤原千歳丸ト云人。始て當國ニ下り、宗像宮ノ祭ヲ掌り。此村春日社ヲモ創建セラレシト云（略）」（註1）、「（略）千歳丸の姓を以て村の名とせりといふ（略）」（註2）。天慶二年は939年である。

赤木峠を下ったところに玄蕃塚がある。「古墓、赤木に在 白木玄蕃の墓也といひ伝へて村民玄蕃塚といふ 玄蕃は宗像の家臣にて天文のころ此村に居住す 玄蕃の子を左近といふ 父子共に虚説の難に遭て此處にて討たれしとかや（略）」（註2）。天文は1532から1555年である。

また近世になると「太郎坊社、神屋に在（中略）一株は幹より二に分かれて異の方に開きたり 寛政十二年の十一月村民等拝殿を修造しけるが此松さわって柱建がたし 根株を伐除くへしと相議し明朝を約して帰りける 翌朝（中略）幹一夜の間に乾の方に起直り此度造らんとする拝殿の軒端より二尺許自ら避退たり（略）」（註2）や「古賀に在（中略）寛政十二庚申年氏社拝殿を經營すとて里民地を掘て石櫃を得たり 中の骸骨存せりまた櫃の四方より壺を出せり其一には甲冑鏡径二寸許銘文なしを納む（略）」（註2）という話は、いずれも寛政十二年(1800)藤原村において社殿の大きな解体修理事業が行われていたことが伺われる。

藤原村においての石高は『天正年間の指出前之帳』767石、「慶長国絵図」1077石余り、「正保郷帳」1207石余り、「元禄国絵図」1207石余り、「天保郷帳」1259石余り（註3）で、田園の広がりが判る。

明治5年に編纂された地理全誌（註1）によると、藤原村の土質「五分真土。五分赤土小石交。六分乾地。三分湿地。一分沼地」、田園の石高は「千貯百五拾貯石貳斗四升三合七勺」と記す。これは旧高旧領帳と同数であるが、天保郷帳より七石程少ないことが判る。内「字惣原は水面六反歩、水掛田拾町歩」と記す。

明治33年の大日本帝国陸軍測量部の作成した5万分の1の地形図（第14図1）をみると、本遺跡の周辺は田園で現在にいたるまで変わっていない。

5. ま と め

掘立柱建物跡 柱穴群は、調査区中央で南北に検出され、SB3から東に折れて「L」字状に広がる。その内掘立柱建物が7棟建つことがわかった。いずれも桁行は2間(5.11m)から4間(9.00m)、梁間は1間(3.18m)から3間(5.66m)内に収まる小規模な建物である。

配置は、SB1からSB5によって広場を囲むように築かれている。そのうちSB1とSB5の主軸は同方向で、SB1とSB2、SB3とSB4の主軸はほぼ直行して建てられている。SB6とSB7はそれより北に建てられ、やはり主軸が直行している。よってSB1とSB2、SB3とSB4、SB6とSB7は、当初からセットで建てられた可能性はあるが、建物間の切り合いは確認できず、柱穴からの出土遺物もSB7・P9以外は認められないため、先後関係については明らかではない。

土坑 土坑群は、調査区北側と西端に穿たれているが、この範囲に柱穴はほとんど確認できなかった。SK2・3・4は、いずれも礫が多量に含まれ、陶管の同一個体が各土坑から出土しており、同時期の遺構と思われる。SK6・7は、単独で検出され平面形もやや方形で、埋土には少量の礫が含まれていた。SK5は、浅い掘り込みに10個程度の石が不規則に置かれた状態で検出された。

以上のように近世の土坑にはしばしば礫を含むものが見られる。平面形は一様でなく、長方形や不定形など様々である。深さや底面も、平坦なものから2段3段と段を有するものがある。礫においては、規則正しく置いたものではなく投げ込んだようなありかたをしている。

当初の考え方として、富地原地区の地山は礫を多く含むため、田圃を整地するときに礫を集め、穴を掘って投げ入れたものと思われたが、柱穴群を故意に外していること、単独で検出した中にもSK2・3・4のように隣接して穿たれていること、時期が柱穴群とほぼ同時期であることなどから、建物群との何らかの兼ね合いをもつ遺構である可能性が強いと思われる。

SK50は、青磁碗や白磁小皿、備前系M類の摺鉢（註20）などが出土し、SK52の出土遺物は、瓦質の鍋の口縁部などいずれも中世の遺物が出土している。SK52は柱穴に切られているため建物群より古いのは確実である。

石列溝状遺構…SK9・SD68は、肥前系の染付である碗や皿などを多く出土した。所謂くらわんか茶碗で、桐の葉や五弁花文などのコンニャク印判など、いずれも18世紀後半に多く見られる遺物である（註14）。石列溝状遺構の性格については今のところ不明である。

最後に、弥生・古墳時代の遺構遺物は、まったく検出されなかった。中世末に土坑が単独で穿たれた以外は何もなく、近世も後半になり掘立柱建物及び礫の含まれる土坑が築かれる。18世紀末石列溝状遺構は遺物破棄の状態から機能を失い、それ以降は田圃として現在にいたると考えられる。

隣接する惣原池がいつ營まれたか不明であるが、明治33年の地図によると、「此村より鞍手郡へゆく山道あり、赤木峠といふ」（註2）と記された主要道路（第14図2）は、惣原池の西を通っており、池の東側は「森」の集落と田圃が營まれている。本遺跡も江戸後期、その集落の一部に相当したのではないかと思われる。

註

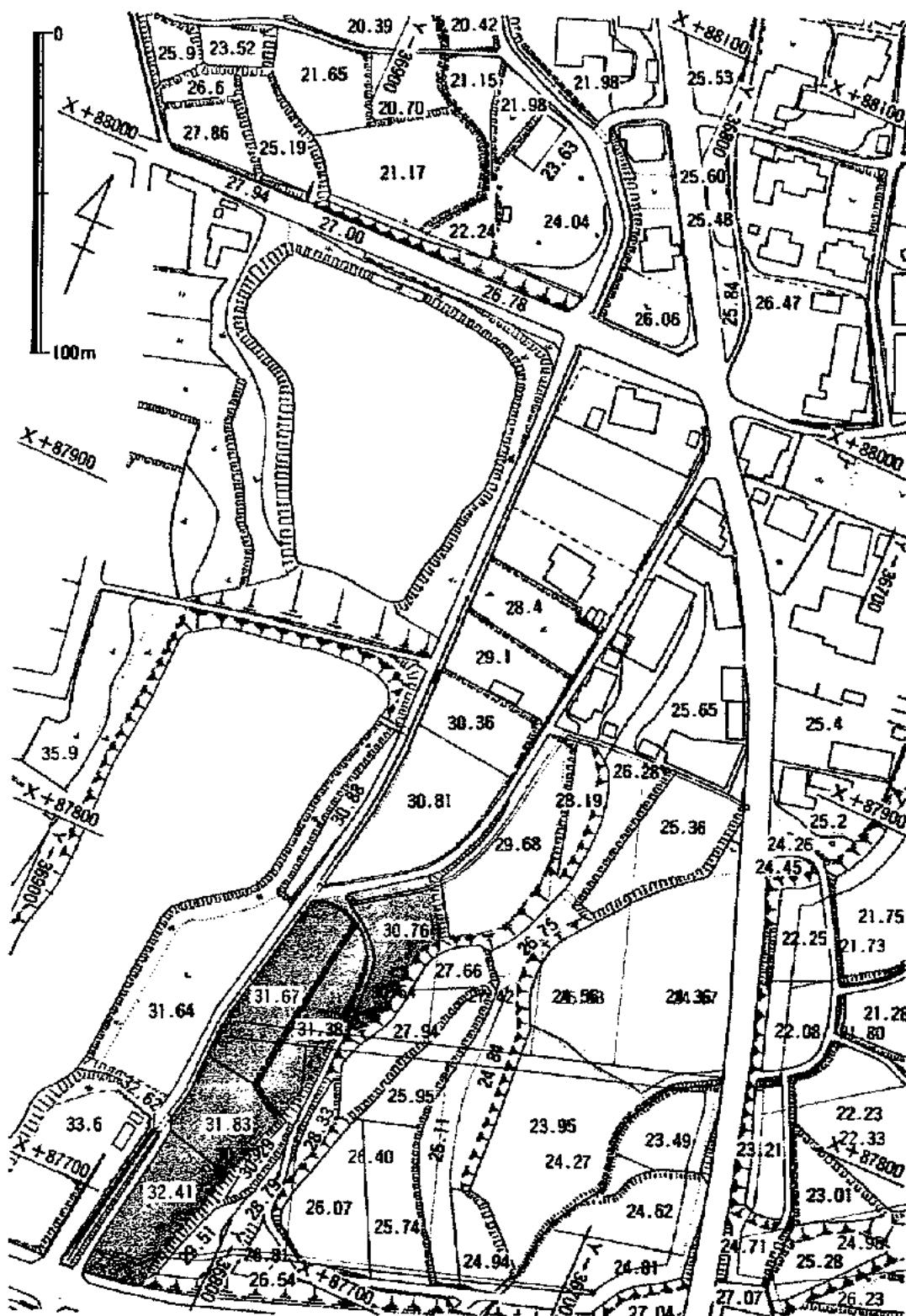
1. 福岡県史 近代史料編（二） 福岡県地理全誌 西日本文化協会 1988
明治5年に編纂された福岡県地理全誌
2. 筑前國統風土記拾遺 第四巻 筑前國統風土記拾遺刊行会 1973
註2の楷書体 筑前國統風土記拾遺 卷二十二 宗像郡 下
3. 福岡県百科事典 下巻 西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部 1982
4. 北九州市教育文化事業団 『鳴水・古屋敷遺跡』 北九州市埋蔵文化財報告書第108集 1991
5. 北九州市教育文化事業団 『大手町遺跡』 北九州市埋蔵文化財報告書第133集 1993
6. 北九州市教育文化事業団 『室町遺跡』 北九州市埋蔵文化財報告書第95集 1990
7. 北九州市教育文化事業団 『茶屋原西遺跡』 北九州市埋蔵文化財報告書第12集 1982
8. 北九州市教育文化事業団 『京町遺跡1』 北九州市埋蔵文化財報告書第124集 1992
9. 福岡市教育委員会 『博多32』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集 1992
10. 築市教育委員会 『筑環礁都市遺跡（SKT140.220）発掘調査報告』 築市文化財調査報告第45集 1990
11. 直方市教育委員会 『内々殿跡』 直方市文化財調査報告書第4集 1982
12. 九州歴史資料館 『大宰府史跡』 昭和53年度発掘調査概報 1979
13. 佐賀県立九州陶磁文化館 『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁 古唐津・伊万里の流傳をさぐる』 1984
14. 高橋洋二 『古伊万里』 別冊太陽 日本の心63 (54頁) (38頁) 1990
15. 高橋康二 『肥前陶磁』 考古学ライブリー55 1988
16. 佐賀県立博物館 『古唐津展 肥前陶器の歴史と美を探る』 1987
17. 福岡県立美術館 『まぼろしの美 古上野焼展』 1987
18. 福岡県史 『文化資料編筑前高取焼』 西日本文化協会 1992
19. 日本中世土器研究会 『中近世土器の基礎研究VI』 1990
20. 後藤茂樹 世界陶磁全集3 日本中世 (312頁) 1980

第4章 富地原岩野B遺跡

1. はじめに

富地原岩野B遺跡（第1図3）は、福岡県宗像市大字富地原（字岩野）1476番地周辺に所在しており、宗像市と鞍手郡宮田町との郡境にそびえる標高296.9mの摩山から北へ派生する舌状丘陵東緩斜面にあたる標高29.5mから32mの地点に分布している。

当遺跡の現状は、大規模な開墾によって水田化しており、棚田を形成している。この段階での踏査では、遺構確認はできなかったが、当丘陵の尾根部や西斜面、枝丘陵には、富地原小峯遺跡や富地原梅木遺跡をはじ



第42図 富地原岩野B遺跡事業計画図 (1/2,000)

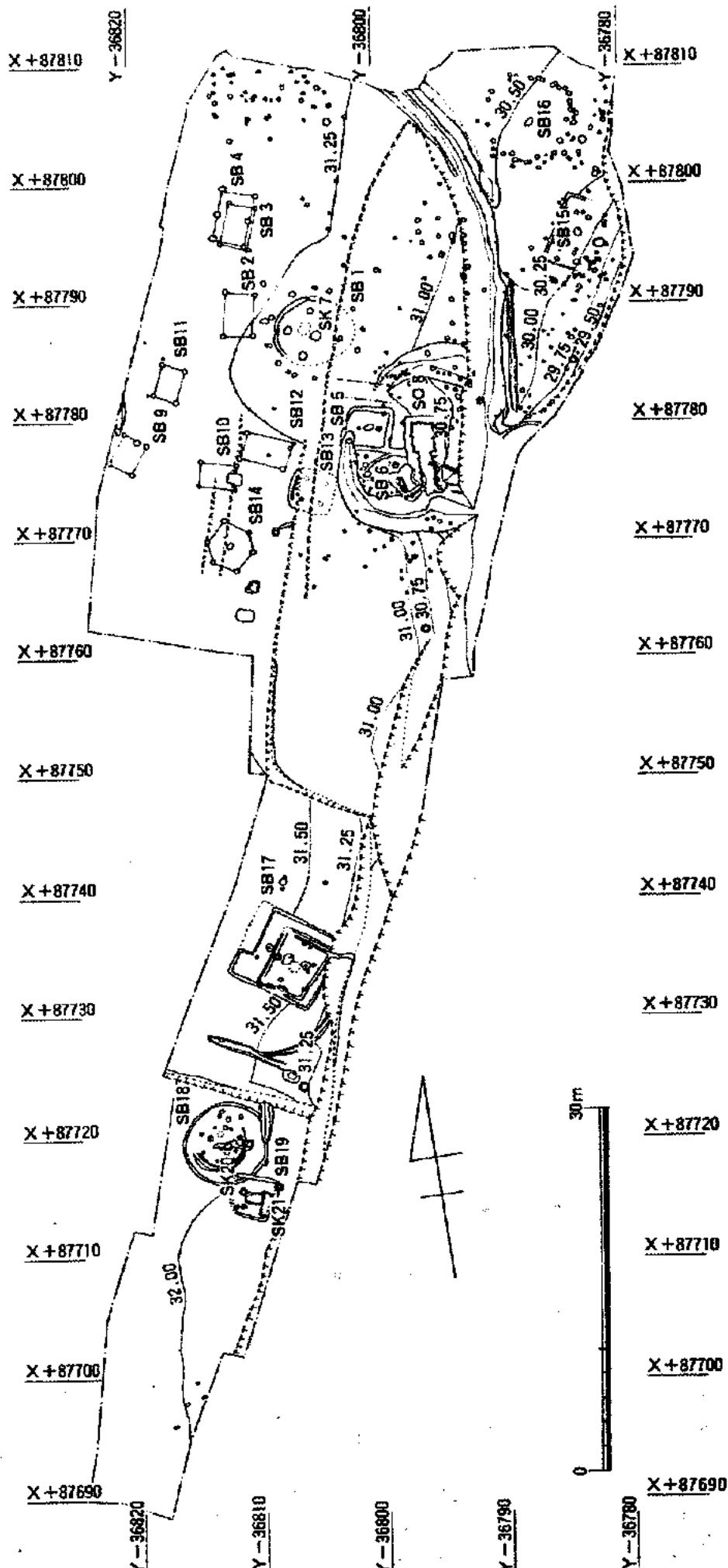
めとする名残遺跡群の各遺跡が分布しており、当丘陵における遺構の存在は、充分に考えることができた。よって、富地原地区県営は場整備事業に伴い、切り盛り調整がつかず削平されることとなつた当丘陵について試掘調査を行い、遺構の確認された2,000m²について調査区域を設定。緊急発掘調査を実施し、つきの各遺構を検出した。

第7表 富地原岩野B遺跡
遺構対数表

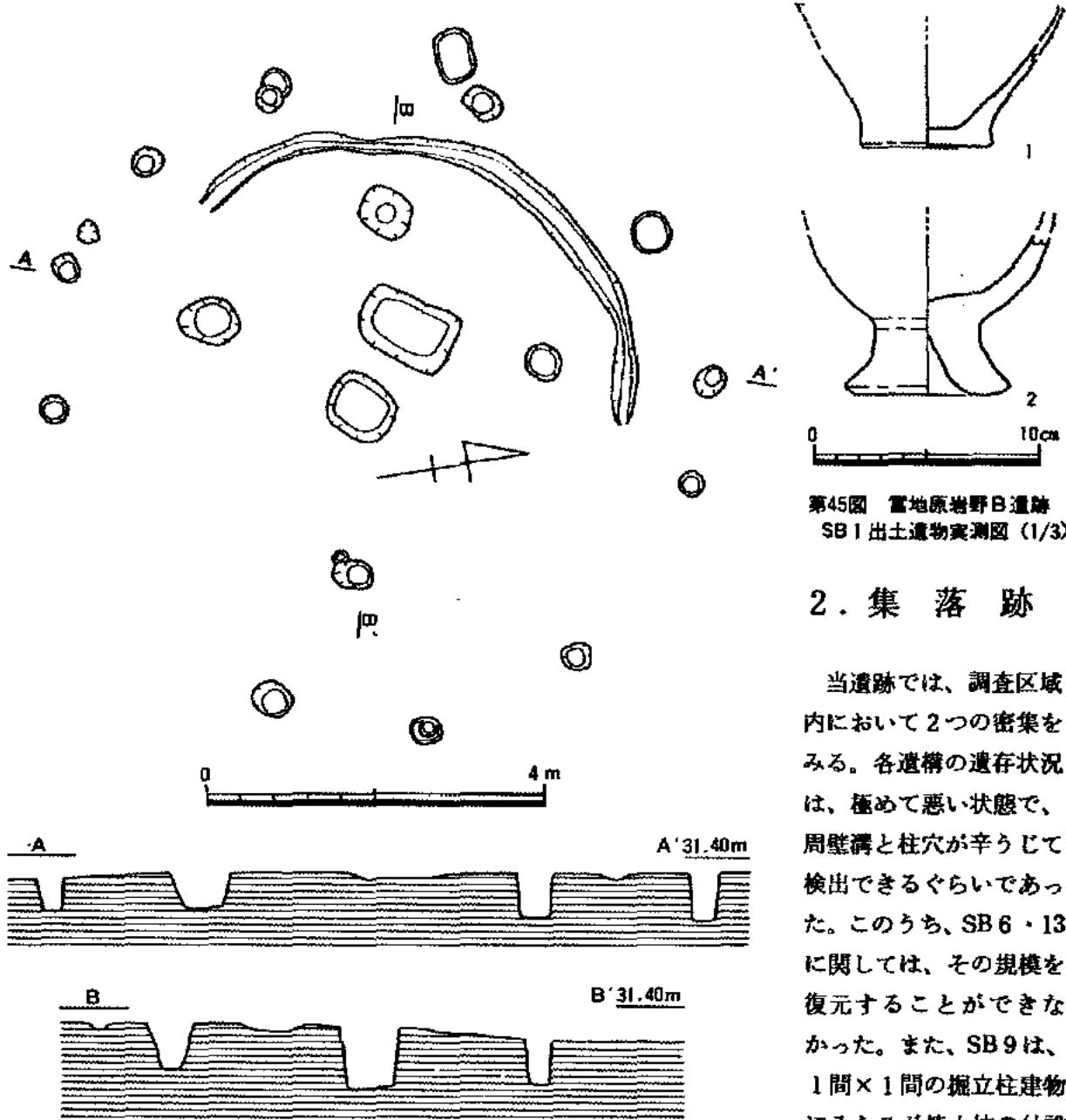
遺構	基數
円形住居跡	5棟
方形住居跡	6棟
掘立柱建物跡	6棟
古墳	1基
土壙墓	2基
土坑	1基

この結果、当遺跡が集落及び墳墓地の複合遺跡であることが判明し、釣川の形成する宗像平野南東部域における富地原・名残・吉武地区での資料が1つ増えたこととなる。

発掘調査期間は、平成4年4月3日に調査機材を運ぶところからはじまり、6月1日遺構実測を完了して外での発掘調査日程を終了した。



第43図 富地原岩野B遺跡遺構配置図 (1/500)



第44図 富地原岩野B遺跡 SB 1 実測図 (1/80)

第45図 富地原岩野B遺跡
SB 1 出土遺物実測図 (1/3)

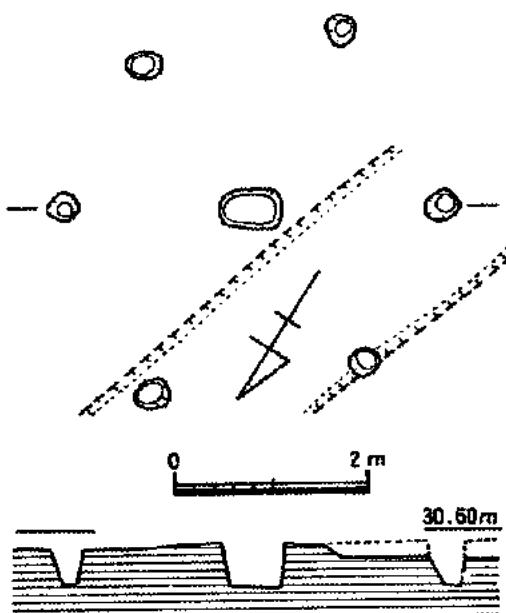
2. 集 落 跡

当遺跡では、調査区域内において2つの密集をみる。各遺構の遺存状況は、極めて悪い状態で、周壁溝と柱穴が辛うじて検出できるぐらいであった。このうち、SB 6・13に関しては、その規模を復元することができなかつた。また、SB 9は、1間×1間の掘立柱建物にみえるが焼土坑の付設から方形住居跡と考える。

第8表 富地原岩野B遺跡 遺構計測表

遺構番号	形態	規 模	主柱	備 考	遺構番号	形態	規 模	主柱	備 考
SB 1	円形	8.0×8.5m	4本	椭円形土坑有	SB 12	掘立	4.1×2.6m	4本	1間×1間
SB 2	掘立	2.7×4.0m	4本	1間×1間	SB 14	円形	4.3×4.1m	6本	椭円形土坑有
SB 3	掘立	3.9×2.7m	4本	1間×1間	SB 15	方形	6.1×5.3m	4本	周壁東半分欠
SB 4	掘立	4.7×3.1m	6本	1間×2間	SB 16	円形	8.2×8.0m	4本	2棟重複
SB 5	方形	3.7×4.2m	2本	東壁排水溝有	SB 17	方形	6.5×7.2m	2本	ベッド状遺構
SB 9	方形	3.1×2.4m	4本	焼土坑付設	SB 18	円形	6.8×6.3m	6本	椭円形土坑有
SB 10	掘立	3.3×2.4m	4本	1間×1間	SB 19	方形	3.3×3.0m	2本	
SB 11	掘立	3.2×2.3m	4本	1間×1間					

1) 円形住居跡



第46図 富地原岩野B遺跡 SB14実測図 (1/80)

SB1・6・14・16・18がこれにあたる。これらの遺構は、その形態から2類に分類することができる。I類は、住居跡内中央に楕円形または隅丸長方形の土坑を付設するもので、SB1・14・18がこれにあてはまる。II類は、楕円形土坑を付設しないもので、SB16がこれにあてはまる。

(1) SB1 (第44図)

調査区域北群のほぼ中央（第43図）に位置している。遺構は、著しい削平をうけており、周壁溝は4cm程の深さを測る遺存状況である。住居中央に焼床面がみられ、そのすぐ西に隅丸長方形の土坑を付設している。この土坑は、現床面からほぼ垂直に掘り窪められており、50cm程の深さがある。土坑内の埋土は灰白色を呈しており、5mm程の炭化粒が多く含まれている。主柱穴は4つ

で焼床面を中心として対角線上に配される。この柱穴より外には、幅20cm程の溝が検出されているが、全周するものではない。ただ、削平はうけているが、焼床面がみられることから床面の削平は避けられた可能性が強く、この溝外にも遺構を取り巻く11の柱穴が検出されているなど、従来の周壁溝とは別の屋内溝と見る可能性を捨てがたい。

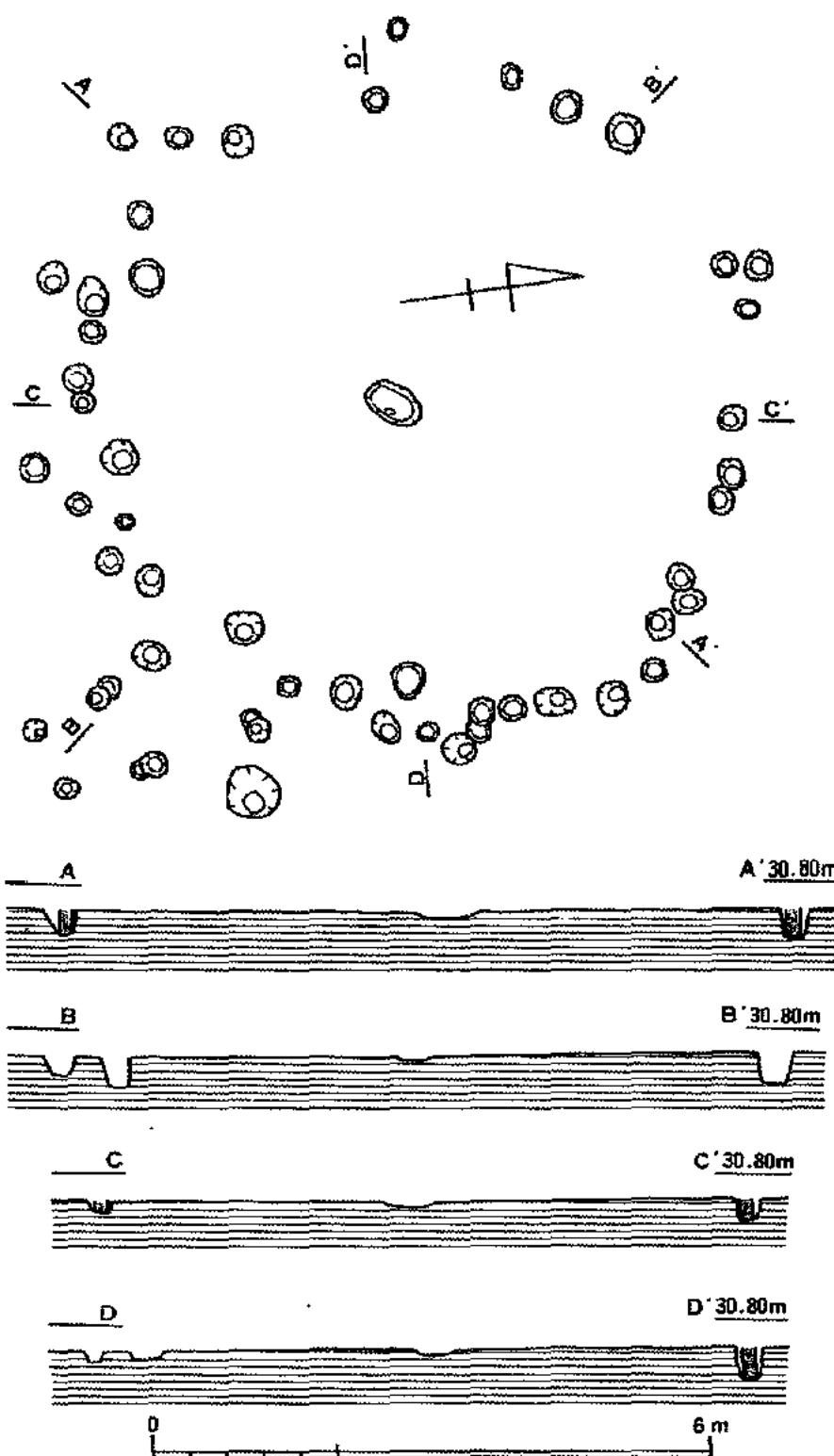
出土遺物（第45図）は、壺の底部と脚付鉢の体部下半を検出している。1は、底径5.8cmを測る壺底部である。内外面共に風化が著しく調整がみにくいが、外面は縦方向の刷毛目調整を施し、内面は、底部粘土板に胴部下端の粘土ひもを接着させるためか縦方向の指ナデ調整が行われている。底部の厚さは、薄く仕上げられている。2は、脚付鉢である。底部は、1.4cmの厚さがあり、かなり厚めにつくられている。脚幅径6.4cmを測る。

(2) SB14 (第46図)

調査区域北群の南西部（第43図）に位置している。この遺構からは、住居跡中央に隅丸長方形の土坑が検出されている。土坑内の埋土は灰白色を呈しており、5mm程の炭化粒が多く含まれている。住居床面の面積は狭く小型の住居で、住居跡中央の土坑を中心として6つの主柱穴が6角形に配されている。当遺構からの出土遺物は検出されていない。

(3) SB16 (第47図)

調査区域北群の北東部隅（第43図）に位置している。当遺構からは、柱穴と住居中央に焼床面を検出している。柱穴の状況などを考えると2棟以上の重複がみられるようである。焼床面は住居跡中央に1ヵ所の検出であり、重複する住居跡は建てかえのものと考えられる。住居規模は、大型のもので、8m程の正円に近いものである。当初建築の住居跡主柱穴は、焼床面を中心に4つの配置で、各主柱間に2本の柱を立てる構造をとる。これらの柱より内側には、全周の1/4程を巡る弧状の柱穴群がある。この当初住居跡を切る住居跡では、焼床面を中心に6つの主柱穴が配されている。このうち



第47図 霧地原塩野B遺跡 SB16実測図 (1/80)

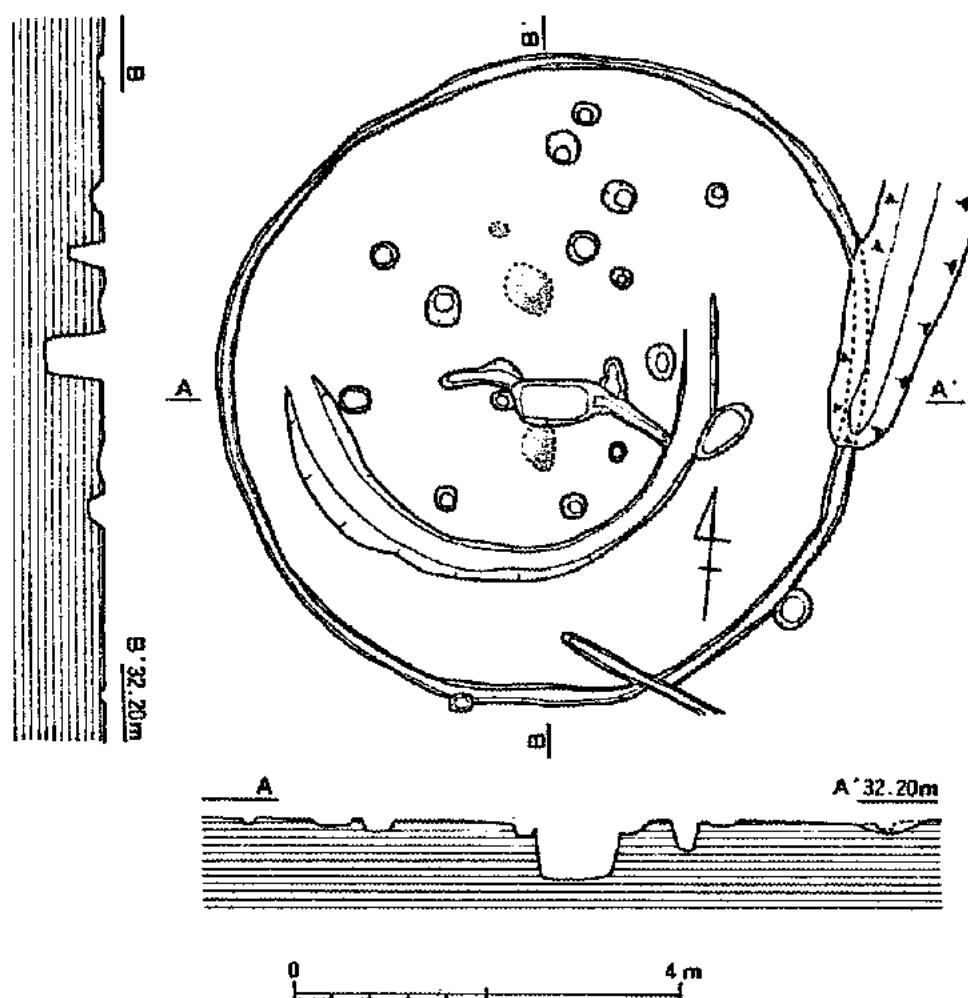
の内側に半周する溝とが巡っている。住居跡中央には梢円形の土坑があり、内側溝につながる小溝がでている。また、土坑内の埋土は灰白色を呈しており、5mm程の炭化粒が多く含まれている。この土坑の長軸方向には浅い2つの小穴がある。この延長線上とこれに直交するように主柱穴が配されている。住居跡床面には、土坑を挟んで南北にそれぞれ焼床面がみられる。

焼床面を斜めに横切る線
上に位置する2柱は、住
居の軸線を決めるもの
で、これを除けば当初住
居跡とこれを切る住居跡
は、ほぼ同じ建築を行っ
ているように見える。

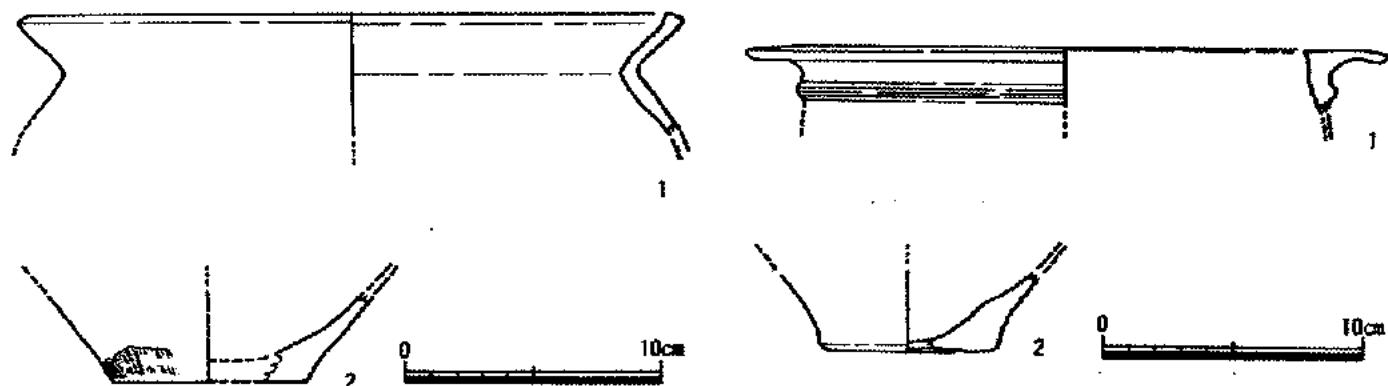
出土遺物（第49図）
は、甕の口縁部と壺の小
破片である。1は、口径
24.4cmを測る甕である。
風化が著しく、その調整
を明確にはできないが、
その器形は、体部からほ
ぼ直角に折り曲げて『く
字』状を呈する口縁部を
つくりだす。その端部は、
粘土ひもを貼り付けて
所謂跳ね上げ口縁をつ
くりだしている。この口
縁は、体部最大径よりや
や小さいものである。2
は、復元底径7.4cmを測
る壺の底部小破片であ
る。底部は平底で薄く仕
上げられている。器壁外
面には、縦方向の刷毛目
調整が右から左方向へ施
されている。内面は、丁
寧なナデ調整である。

(4) SB18 (第48図)

調査区域南群のはば中
央（第43図）に位置して
いる。当遺構では、住居
跡外縁を全周する溝とそ



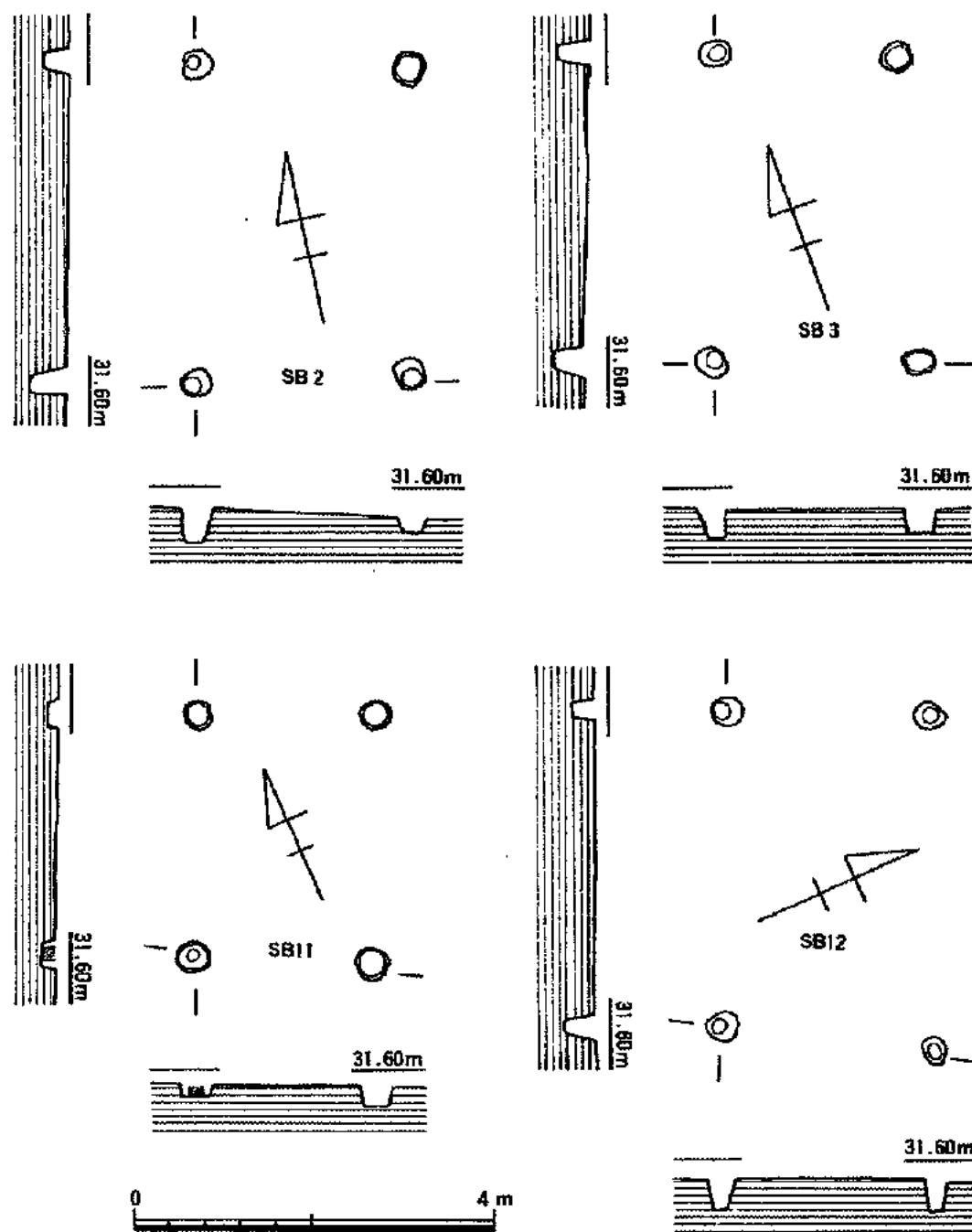
第48図 富地原岩野B遺跡 SB16実測図 (1/80)



第49図 富地原岩野B遺跡 SB16出土遺物実測図 (1/3)

第50図 富地原岩野B遺跡 SB16出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第50図）は、甕の口縁部と底部の小破片である。1は、口径18.4cmを測る甕である。風化が著しく、その調整を明確にはできないが、器壁外面に赤色顔料の塗布がみられる。口縁部は鋒先状口縁を呈し、端部が下がるものである。口縁部直下には低い台形状の突帯が1条巡る。2は、底径6.2cmを測る甕底部破片である。



第51図 富地原岩野B遺跡 SB 2・3・11・12実測図 (1/80)

2) 掘立柱建物

SB 2・3・4・9・10・11・12がこれにあたる。これらの遺構は、削平によりその上部構造を明確にすることことができなかつたが、柱穴などの遺構下部を検出することができ、この形態から2類に大別することができる。1類は、柱間を1間と1間にとるものである。この類は、その短辺に土坑を付設したものとそうでないものに細分することができ、前者をa類とし後者をb類とすることができる。また、その長辺の長さにおいても長短の2種をみることができる。II類は、柱間を1間と2間にとるものである。

(1) SB 2 (第51図)

調査区域北群のはば中央（第43図）でSB 1のすぐ西隣に位置している。遺構は、長軸を南北方向にとるもので、柱穴4つから構成されており、柱間を1間と1間にとるものである。柱間は、短辺で2.4m、長辺で3.7m程を測り、I b類に属するものである。

出土遺物（第53図）は、底径3.6cmを測る甕の底部小破片である。底部は平底に仕上げられており、小さめの底部に仕上げられている。端部は、やや丸味を帯びている。器壁外面には、縦方向の刷毛目調整が右から左方向へ施されている。内面は、丁寧なナデ調整である。

(2) SB 3 (第51図)

調査区域北群の北西（第43図）でSB 4と重複している。この先後関係については、削平のためその上部構造を失っており、また、下部構造での柱穴間の切り合いは認められず明確にすることはできなかつた。遺構は、長軸を南北方向にとるもので、柱穴4つから構成されており、柱間を1間と1間にとるものである。柱間は、短辺で2.1m、長辺で3.55m程を測り、I b類に属するものである。当遺構からの出土遺物は検出されていない。

(3) SB11 (第51図)

調査区域北群の西（第43図）でSB 2の南西部に位置している。遺構は、長軸を南北方向にとるもので、柱穴4つから構成されており、柱間を1間と1間にとるものである。柱間は、短辺で2m、長辺で2.6m程を測り、I b類に属するものである。当遺構からの出土遺物は検出されていない。

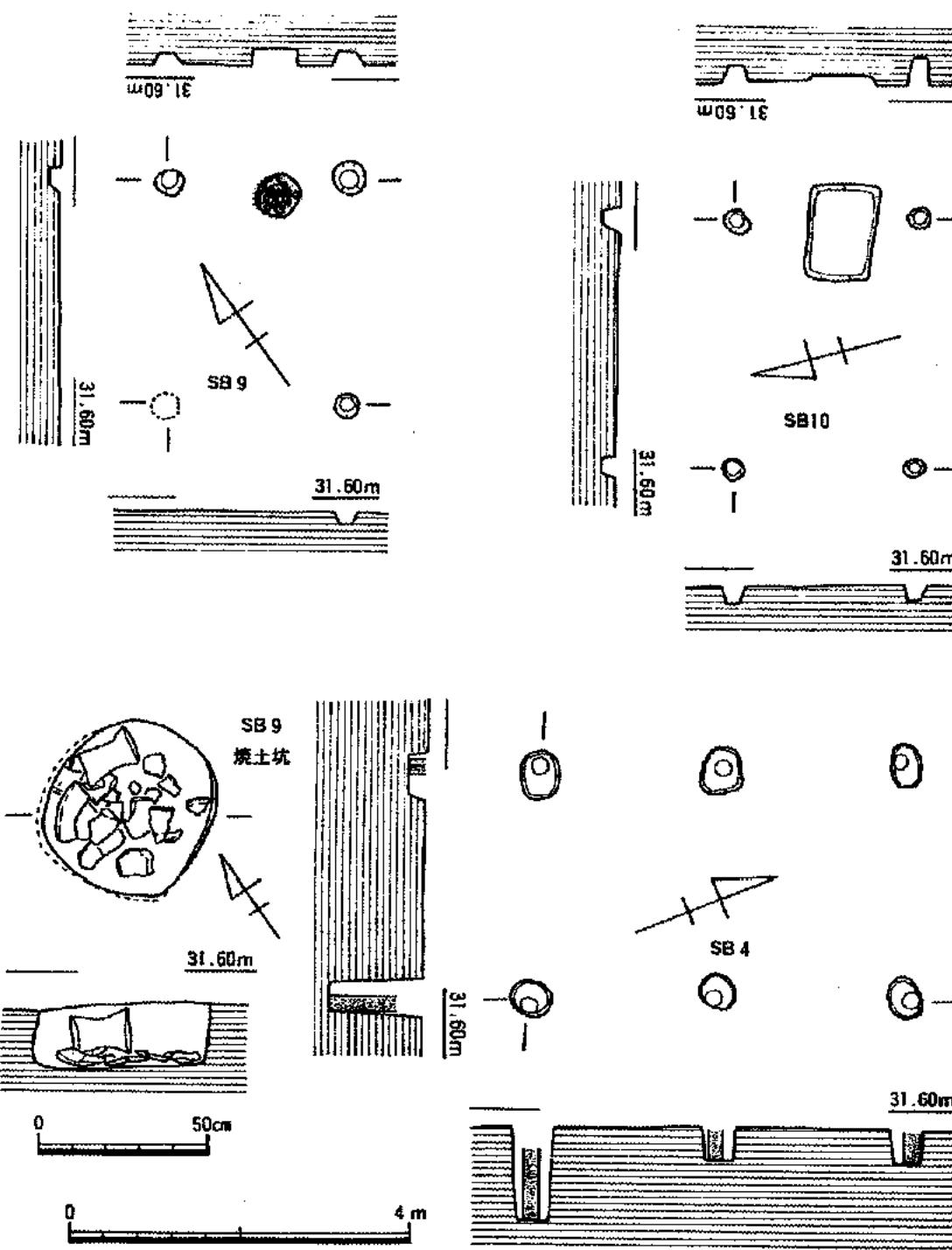
(4) SB12 (第51図)

調査区域北群の中央よりやや南より（第43図）でSB 1の南部に位置している。遺構は、長軸を東西方向にとるもので、柱穴4つから構成されており、柱間を1間と1間にとるものである。柱間は、短辺で2.3m、長辺で3.6m程を測り、I b類に属するものである。当遺構からの出土遺物は検出されていない。

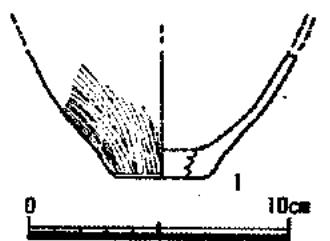
(5) SB 9 (第52図)

調査区域北群の南西部（第43図）に位置している。遺構は、長軸を南北方向にとるもので、柱穴4つから構成されており、柱間を1間と1間にとるものである。柱間は、短辺で2.1m、長辺で2.7m程を測り、I a類に属するものである。土坑は、隅丸方形を呈しており、遺構北側短辺に付設されている。壁面は、焼壁と化していた。この埋土は、漆黒色を呈し、焼土塊を多く含んだものである。床面には、主軸線上北壁に横倒しの状態で器台が検出され、その前面に口縁部を西に向けて半碎状態で甕が検出されている。このような状況からこの土坑は、炉跡の可能性を想定させるものであり、当掘立柱建物が、住居跡である可能性を考えさせられるものである。

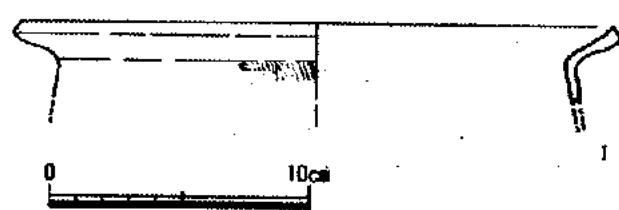
出土遺物（第55図）は、鉢と甕、器台がある。他に細片となつたものが検出されているが、器形などが判明しないため図示しなかつた。1は、口径23.5cm、器高15.5cmを測る鉢である。全体のバランスからみて底部が小さくみえる鉢で、口縁部は、緩やかに『く字』状に引き上げられる。口縁端部は摘み上げられており、軽い跳ね上げ口縁となる。体部外面に右から左方向の縦刷毛目調整がみられるが、これを施した後、丁寧に撫で消している。2は、口径13cm、器高5.7cmを測る小形の鉢である。口縁部は、緩やかに『く字』状に引き上げられ端部は丸くおさめている。底部は平底で、内面には右回



第52図 富地原岩野B遺跡SB 9・10・4実測図(1/80)及びSB 9焼土坑遺物出土状況(1/20)



第53図 富地原岩野B遺跡SB 2
出土遺物実測図(1/3)



第54図 富地原岩野B遺跡SB 10出土遺物実測図(1/3)

りに縦刷毛目調整が残る。3は、復元口径18.2cmを測る壺の口縁部である。口縁部は、一段線が入る『く字』状に引き上げられ端部は丸くおさめている。4は、平底の壺である。底径7.4cmを測る。底部中央には径3cm程の穿孔がみられ蓋としての用途が考えられる。5は、脚部径9.2cm、受部径9cmを測る器台である。受部内面は、横方向の刷毛目調整によって整え、脚部は、縦方向の板状工具によるナデ調整を右回りに施している。

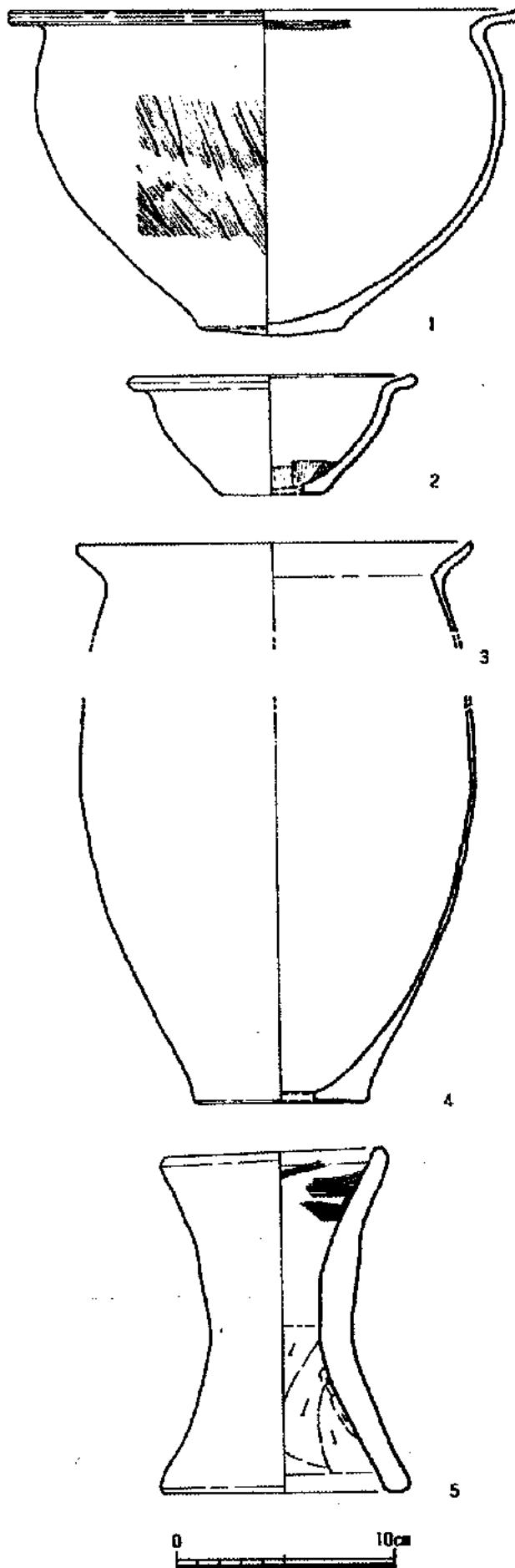
(6) SB10 (第52図)

調査区域北群の南西部(第43図)でSB1の南部、SB9の東に位置している。遺構は、長軸を東西方向にとるもので、柱穴4つから構成されており、柱間を1間と1間にとるものである。柱間は、短辺で2.1m、長辺で3m程を測り、1a類に属するものである。土坑は、長方形を呈しており、遺構南側短辺に付設されている。この埋土は、灰白色を呈しており、5mm程の炭化粒を含んだものである。このような状況からこの土坑は、屋内土坑の可能性を想定させるものであり、当掘立柱建物が、住居跡である可能性を考えさせるものである。

出土遺物(第54図)は、復元口径22.8cmを測る壺の口縁部小破片である。器形は、体部からほぼ直角に折り曲げて『く字』状を呈する口縁部をつくりだす。その端部は、指おさえによって口縁端部を摘み上げて所謂跳ね上げ口縁をつくり出している。器壁外面には、体部と口縁部の境から縦方向の刷毛目調整が右から左方向へ施されている。内面は指おさえによって跳ね上げ口縁端部をつくりだすため横方向のナデ調整を施す。

(7) SB4 (第52図)

調査区域北群の北西部(第43図)でSB3と重複している。遺構は、長軸を南北方向にとるもので、柱穴6つから構成されており、柱



第55図 豊地原岩野B遺跡 SB9 出土遺物実測図 (1/3)

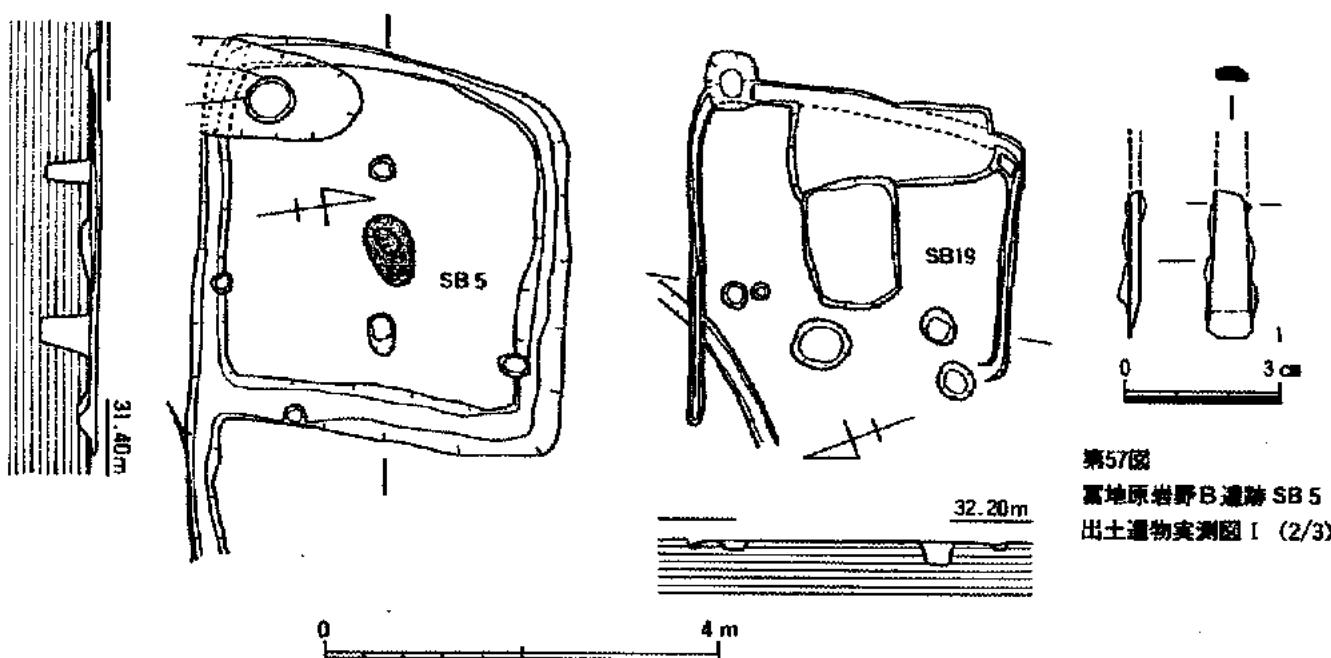
間を1間と2間にとるものである。柱間は、短辺で2.7m、長辺では、南北両端の柱間が4.4m程を測り、各柱間は、各々の中心から測って北柱から2.2mと2.2mで南柱に至る。当遺構は、先の分類ではⅠ類に属するものである。当遺構からの出土遺物は検出されていない。

3) 方形住居跡

SB5・13・15・17・19がこれにあたる。これらの遺構は、その形態から3類に大別することができる。Ⅰ類は、1辺が4m程の住居跡で、主柱穴が2つのものである。SB5・19がこれにあたる。Ⅱ類は、1辺が7m程の住居跡で、ベッド状の遺構をもち、主柱穴が2つのものである。SB17がこれにあたる。Ⅲ類は、1辺が6m程の住居跡で、主柱穴が4つのものである。SB15がこれにあたる。

(1) SB5(第56図)

調査区域北群の南東部(第43図)でSB6・SO8と重複している。遺構の切り合は、当遺構がSB6の北側溝を切っており、SO8の地山整形によって削平されている。一部南西周壁溝は、SO8周溝によって切られている。当遺構は、長軸を東西方向にとるもので、周壁溝を巡らせていている。この周壁溝南東隅からは、排水溝が掘られている。住居跡中心には、焼床面があり、これを挟んで長軸方向に主柱穴2つが配されている。短辺3.6m、長辺4.4m程を測り、Ⅰ類に属するものである。



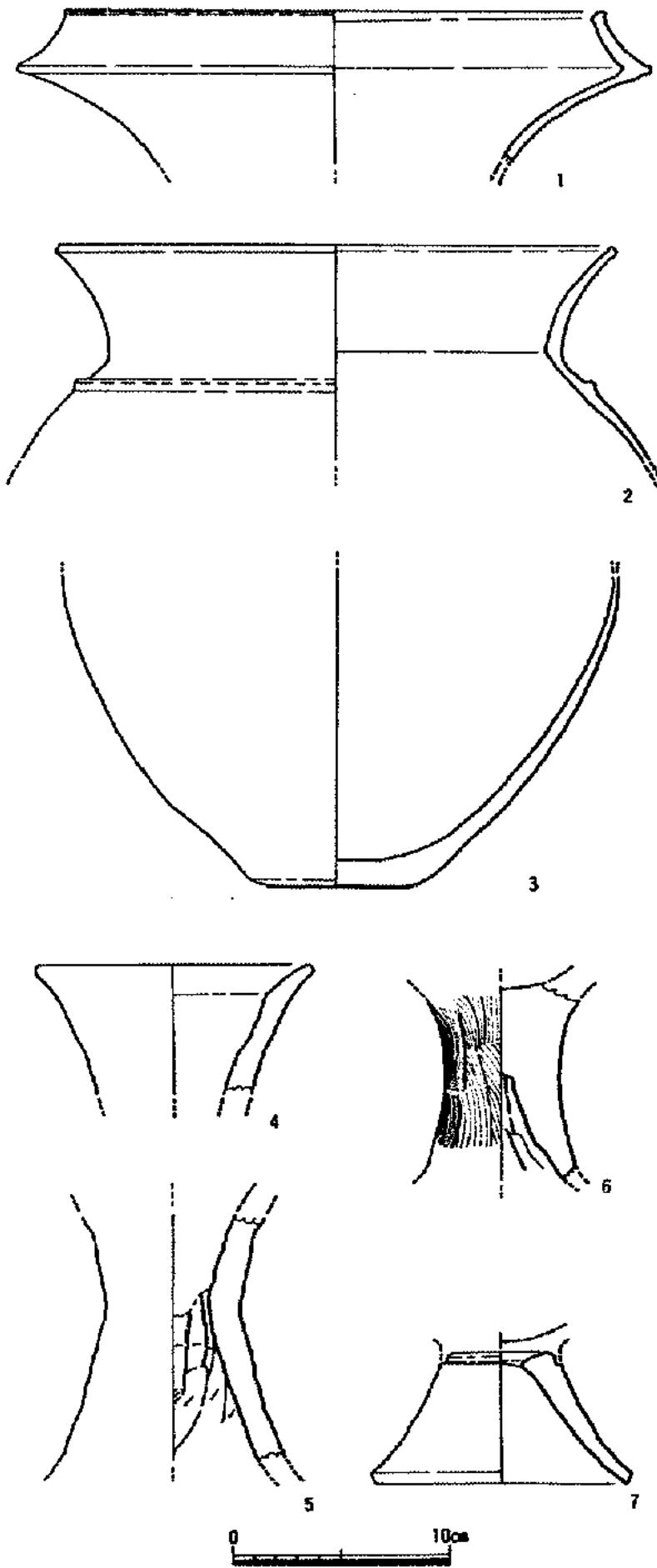
第56図 萩原岩野B遺跡SB5・19実測図(1/80)

出土遺物(第57~59図)は、鉄製鑿、壺と甕、器台がある。他に細片となったものが検出されているが、器形などが判明しないため図示しなかった。

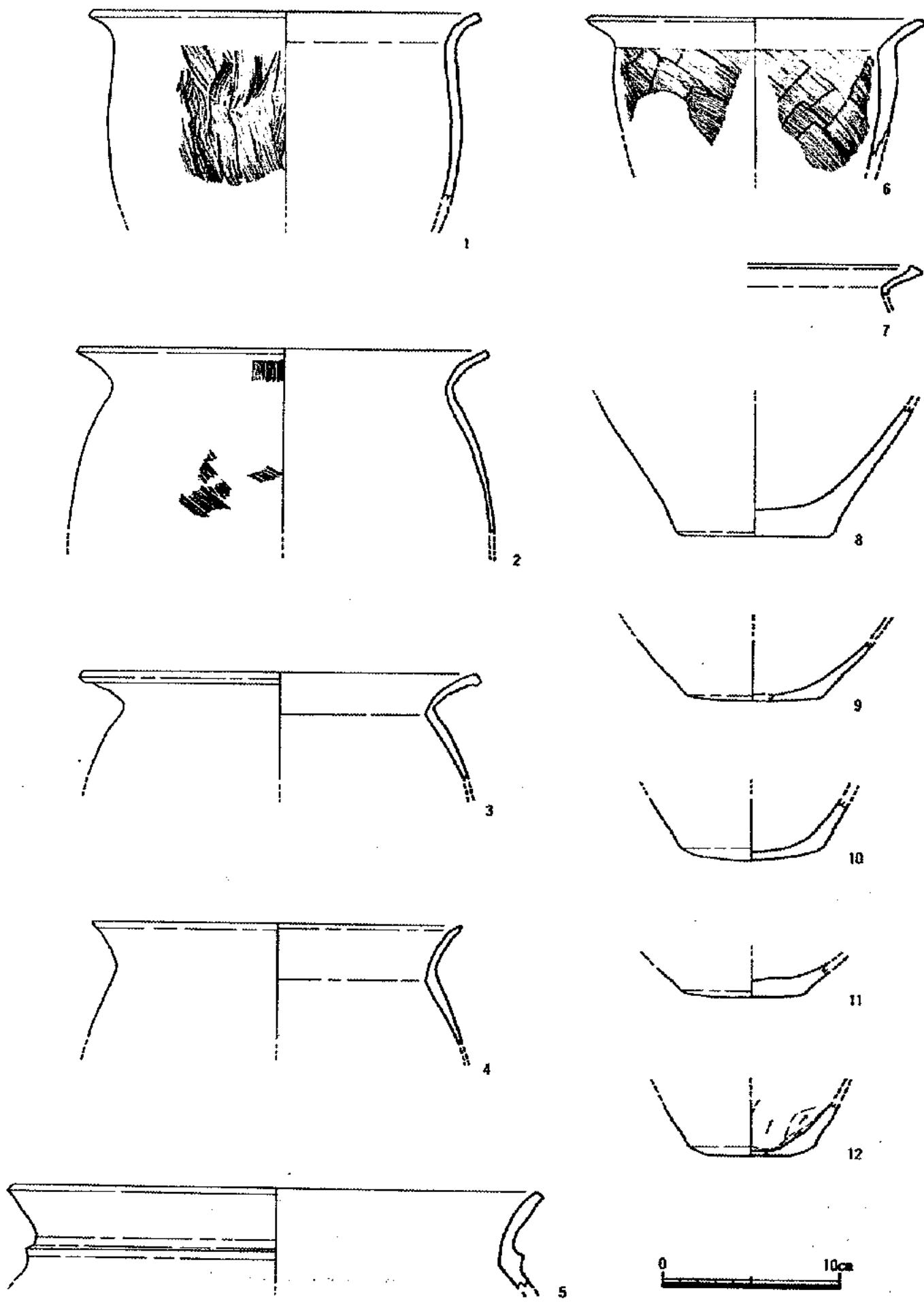
第57図は、鉄製鑿である。SB5の北側溝内からの出土品である。現存長29mm、刃部幅9mmを測る。この遺物は、鍛造品であり、鉄身部から刃部に向けて緩やかに細くなるところから突き鑿としての用途が考えられる。

第58図の1～3は、壺である。1は、複合口縁壺の口頸部で、朝顔形に開く頸部に稜線のある袋状口縁がとりつく。復元口径24.2cmを測る。2は、広口壺であろう。口頸部下に1条の断面台形状の突帯を巡らす。口縁端部は指ナデ調整により面を立てている。胎土は、黄灰桃色を呈している。復元口径25.4cmを測る。3は、壺の底部であろう。底部径8cmを測る。底は平底で端部を丸くおさめている。胎土は黄灰桃色を呈している。砂粒の混入状況や色調など第58図の2と共通するものがあり、同一個体の可能性がある。4・5は、器台である。4は受部の破片であり、5は据部から受部にかけての破片である。4・5共に黄灰褐色を呈し、砂粒の混入状況や色調など共通するものがあり、同一個体の可能性がある。4の内面はナデ調整。5は脚柱部内面で右回りの板状工具による横方向ナデ調整を施し脚部では右回りの縦方向ナデ調整を施している。6は、高坏脚柱部である。縦刷毛目調整を右回転に施している。柱部径は5.4cmと太めである。7は、脚台付鉢の脚部であろう。低い脚部で鉢底から外方向へ直線的に広がる。脚据径11.6cmを測る。

第59図1～8は壺である。これらは、その口縁部の形態でⅠ類に分かれる。1類は、緩やかに『く字』状に引き上げられ、端部は軽い跳ね上げ口縁となる。体部外面に右回りの縦刷毛目調整がみられるもので、1・2がこれにあたる。Ⅱ類は、一稜線が入る『く



第58図 富地原岩野B遺跡SB 5出土遺物実測図Ⅱ (1/3)



第59図 富地原岩野B遺跡 SB 5 出土遺物実測図 Ⅲ (1/3)

字』状に引き上げられ端部は丸くおさめる口縁となる。体部外面には右回りの縦刷毛目調整がみられ、内面には口縁部と体部の境に一稜線ができる要因となる縫から斜め方向の刷毛目調整が施されている。3・4・6がこれにあたる。5は、この類の体部と口縁部の境に1条の三角突帯を巡らせたものである。Ⅲ類は、体部からほぼ直角に折り曲げて『く字』状を呈する口縁部をつくりだす。そ

の端部は、粘土ひもを貼り付けて所謂跳ね上げ口縁をつくりだしている。7がこれにあたる。9~12は、小片のため器種を断定することはできないが、凸レンズ状を呈する底部である。

(2) SB19 (第56図)

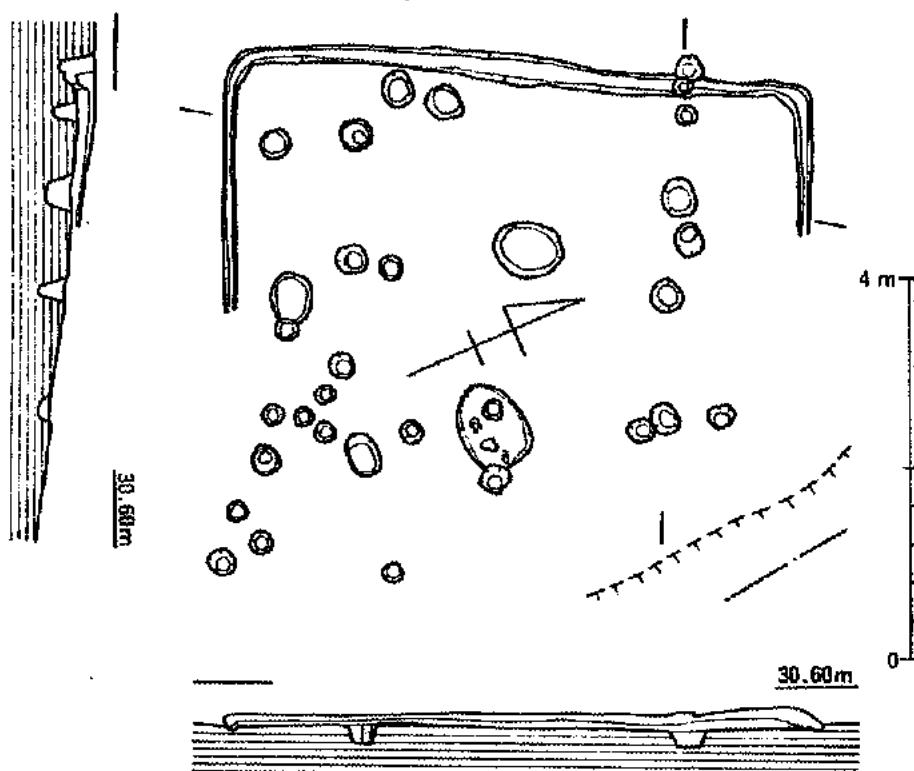
調査区域南群の南東端(第43図)でSB18とSK20・SK21が重複している。遺構の切り合いは、当遺構がSB18の南東溝を切っており、SK20・SK21に東周壁溝及び住居跡中央部を削平されている。当遺構は、長軸を南北方向にとるもので、周壁溝を巡らせている。この周壁溝北西隅からは、排水溝が掘られている。住居跡中心には、焼床面があったと思われるが、削平のため明確にできない。短辺3m、長辺3.4m程を測り、Ⅰ類に属するものと考えられる。

(3) SB15 (第60図)

調査区域北群の東端(第43図)に位置している。遺構は、東半分を棚田によって削平されており、周壁溝は西側のみに残っている。住居跡中央やや西寄りに焼床面があり、東寄りに土坑がある。これらの遺構を中心として主柱穴4つが配され、正方形に近い住居が建てられたものと考えられる。1辺6.1m程を測り、Ⅲ類に属するものである。当遺構からの出土遺物は、土坑から検出されているが、細片のためその器種を明確にできず、図化することもできなかった。

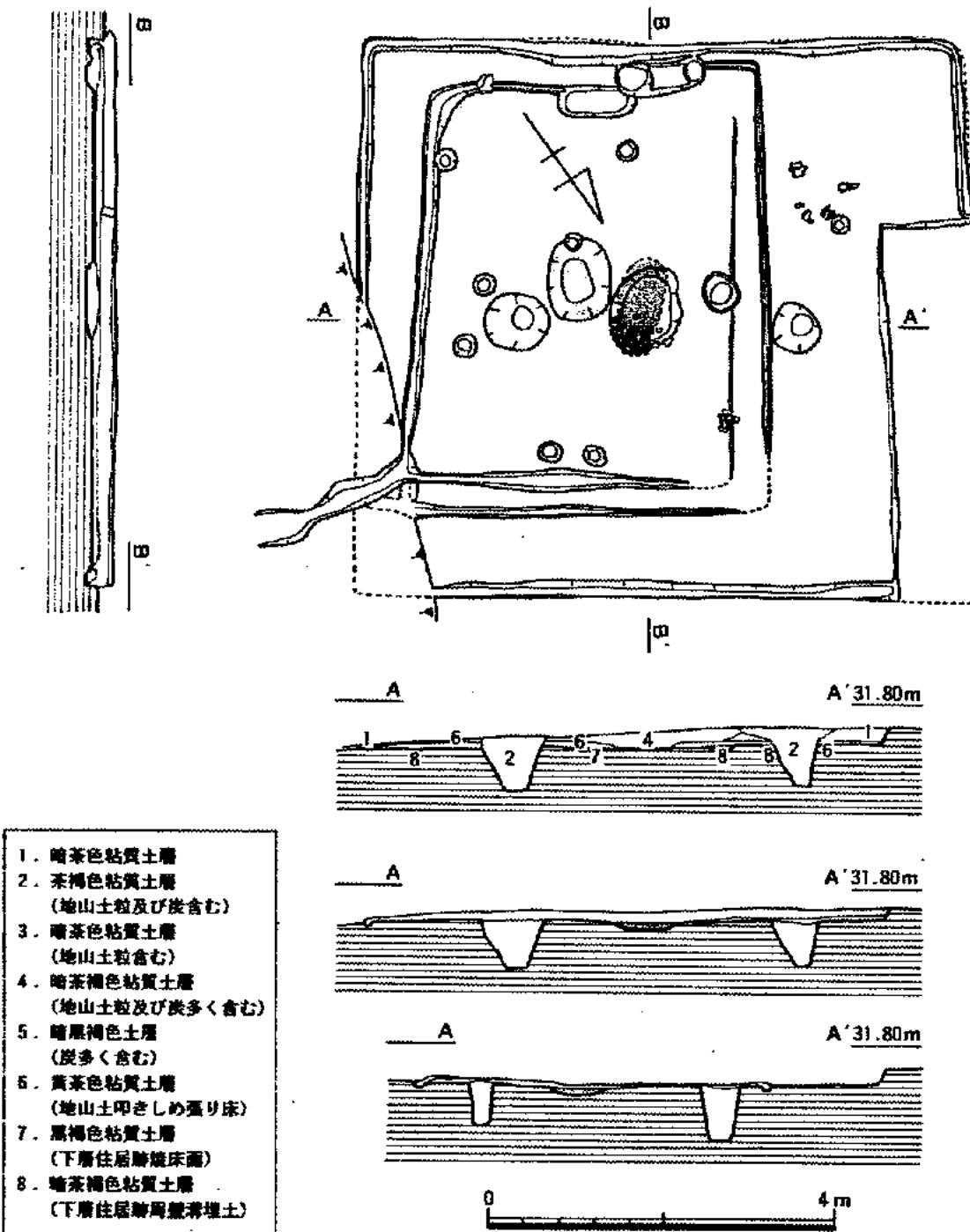
(4) SB17 (第61図)

調査区域南群の北部(第43図)に位置している。当遺構は、3棟の住居跡が重複している。周壁溝が2~3重に巡り、内側の周壁溝と焼床面を埋め殺して外側の周壁溝が掘られていることなどから建



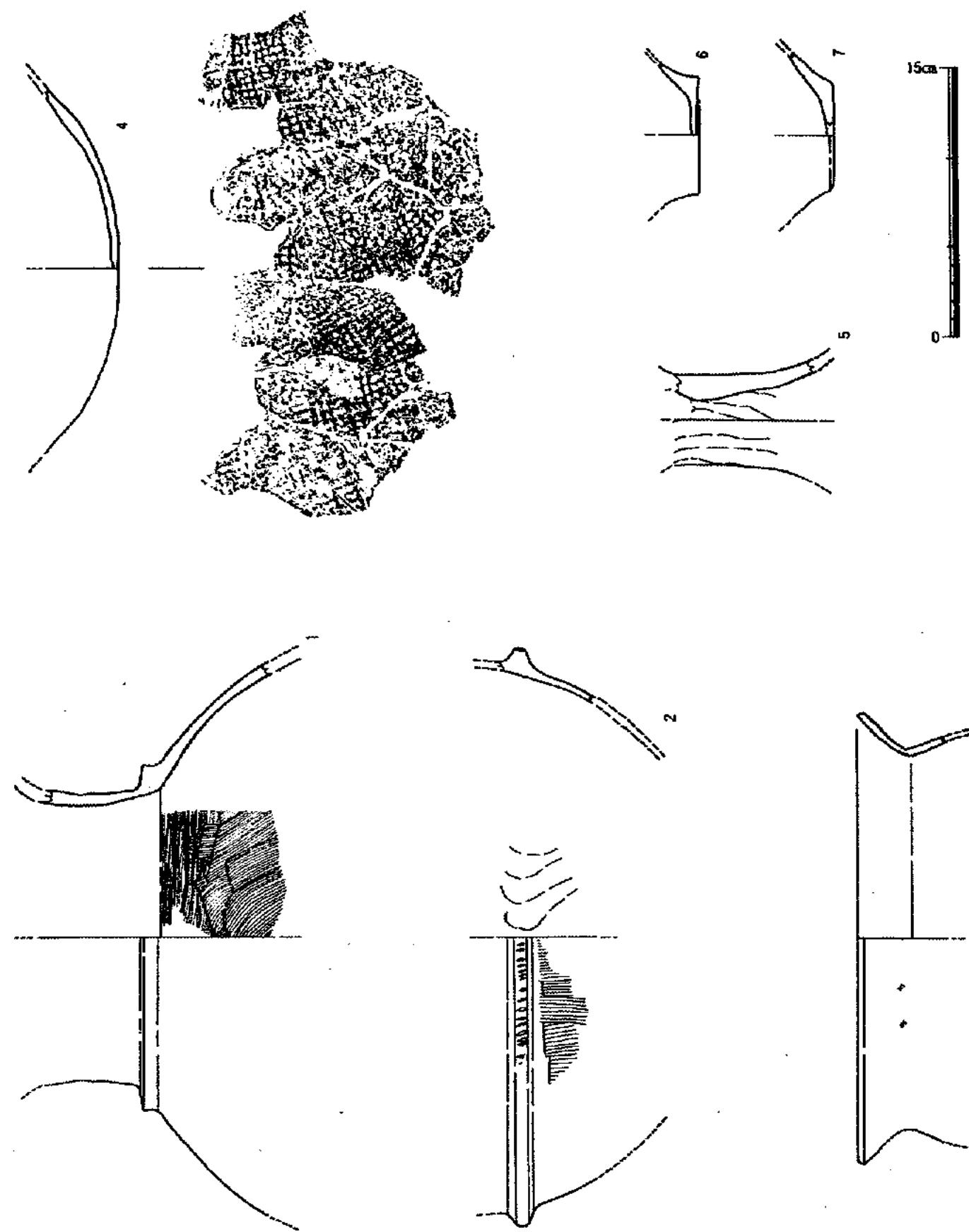
第60図 言地原岩野B遺跡 SB15実測図 (1/80)

てかえ住居の可能性が考えられる。便宜上内側の周壁構の住居をA、北側拡張住居をB、外側の周壁構の住居をCとするとA・B住居跡は、長軸を南北方向にとるもので周壁溝東隅からは、排水溝が掘られている。この住居跡中心には、焼床面があり、これを挟んで短軸方向に主柱穴2つが配されている。その法量は、拡張のB住居跡で、短辺4.8m、長辺5.4m程を測り、Ⅰ類に属するものである。C住居跡は、長軸を東西方向にとるもので北西隅から西壁面に沿ってベッド状遺構が延びる。この住居跡中心には、焼床面があり、これを挟んで長軸方向に主柱穴2つが配されている。その法量は、短辺6.5m、長辺7.2m程を測り、Ⅱ類に属するものである。



第61図 富地原野日遺跡 SB17実測図 (1/80)

第62图 蒙地原冶野白道跡 SB17出土遺物測量圖 (1/3)



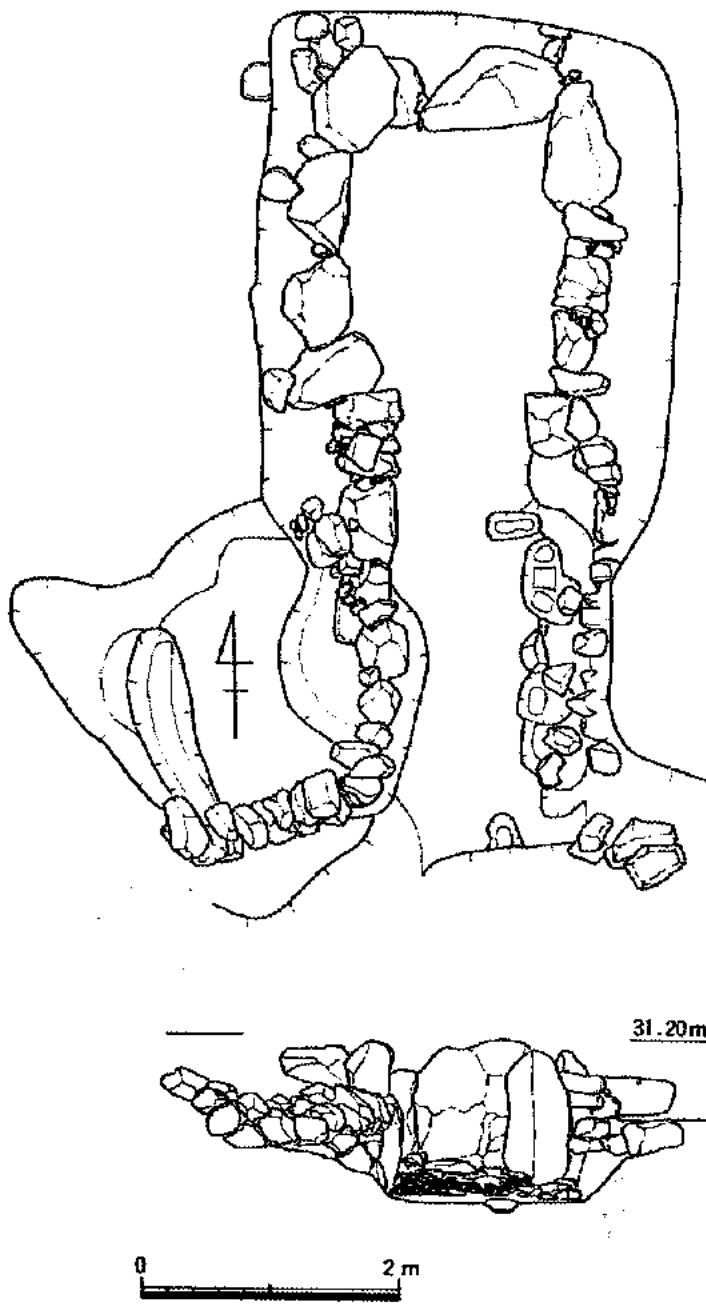
出土遺物（第62図）は、壺と甕、高坏がある。他に細片となつたものが検出されているが、器形などが判明しないため図示しなかった。1・2は壺である。1は、体部から頸部にかけてのもので、その頸部下端に断面三角形突帯を1条巡らす。頸部は体部から垂直に伸びている。2は、胴部破片で、中位よりやや下端に断面台形突帯を巡らし、これに刻み目をいれる。3・4は甕である。3は、口縁部が『く字』に屈曲し、細長く伸びて立ち上がる。復元口径24.4cmを測る。4は、丸底を呈する甕である。器壁外面に格子目印が施されている。その格子は、正格子で、胎土は赤褐色を呈し、2mm程の長石などを含む。内面は、当具痕を消すためかナデ調整が施されている。所謂朝鮮系軟質土器の範疇に入るものと思われる。5は、高坏の脚柱部である。外面は縦方向の板状工具によるナデ調整を施す。内面にはしづり痕を残し裾部には横方向のナデ調整を施す。6・7は、甕の底部である。6は、平底でやや上げ底ぎみになっている。7は、平底ではあるが端部が丸く仕上げられている。これらの法量は、前者が底径6.6cm、後者が底径6.2cmを測る。

3. 墳 墓

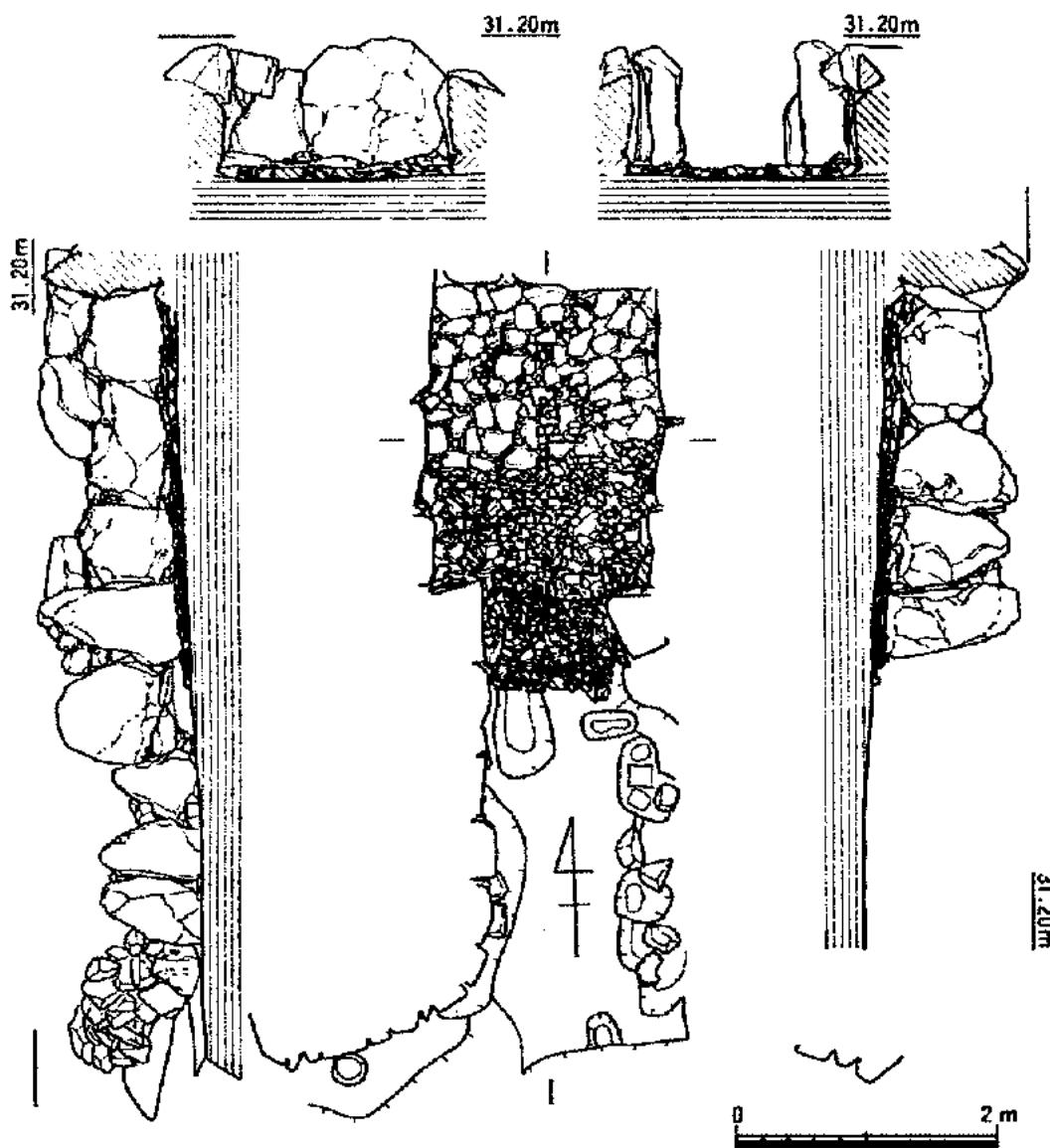
当遺跡では、調査区域内において2時期の墳墓を見る。1つは、遺跡の北群に位置するSO8であり、古墳時代の墳墓である。他は、遺跡の南群に位置するSK20・21であり、平安時代の墳墓である。

1) SO8 (第63・64図)

当古墳は、棚田の造成により削平をうけており、墳丘盛土のすべてを失っている。幸い、遺構を全周する幅2m程の周溝が伴っており、当古墳が標高30.0mを基底面とする径13m程の円墳であったことを確認することができた。



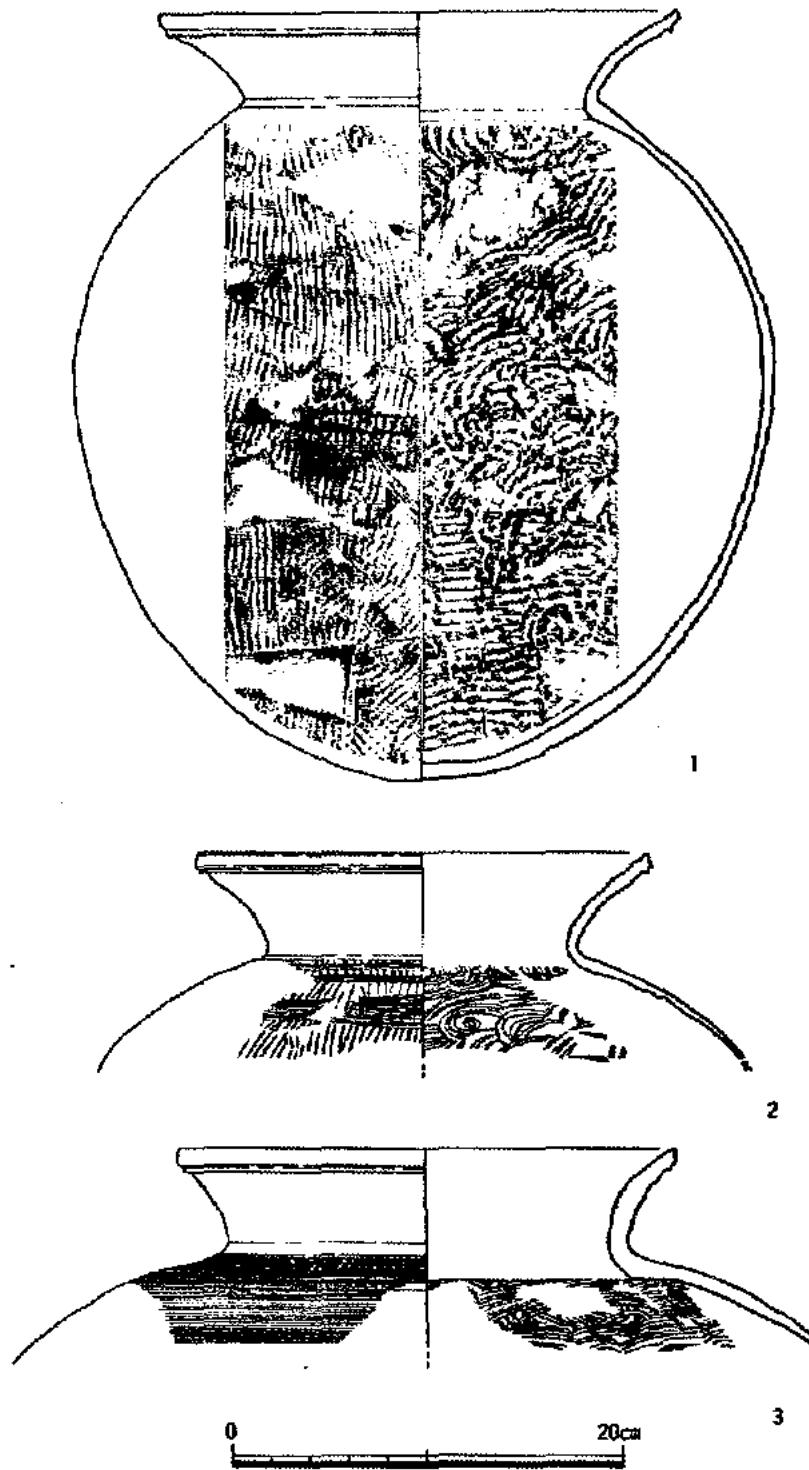
第63図 舟地原岩野日遺跡SO8主体部実測図 (1/60)



第64図 萩原野岩日遺跡 SO 8 主体部実測図 II (1/60)

主体部は、墳丘のはば中央に墓壙が掘り込まれ、この中に南に開口する横穴式石室（第63図）が築かれている。墓壙は、長辺4.6m×短辺3.2mの長方形を呈するもので、南短辺壁には、石室からハ字状に広がる長さ2.5m程の墓道が取り付く。この墓壙の正確な平面規格や深さなどについては削平によってその上面を失っており不明である。

石室は、主軸をN-1°-Wにとる両袖を備えた単室の横穴式石室で、堆積岩の変成岩からなる塊石を主要元材としている。石材の遺存状況は、盗掘などによる擾乱が著しく右羨道部の石材すべてを失う。石材の構築に際しては、腰石に大振りな石材を使用して石室プランを構成する。奥壁に2石を配し、各側壁には各々3石を配す。袖石には方柱状の石材を樹立させて両袖部を形成している。これら石室プランを構成する腰石は、敷石面から90cm程の高さで上面を揃え、直方体を形成する。本来、この上面から持ち送りに石材を組み上げて壁体を構成するのであろうが、そのすべての石材を失っている。羨道部は、4石によって構成されている。このうち、玄門部から入口方向へ向かう2石は玄門幅と同じ幅で伸びているが、そのつぎの1石は10cm程幅を減じており、これと玄門部に挟

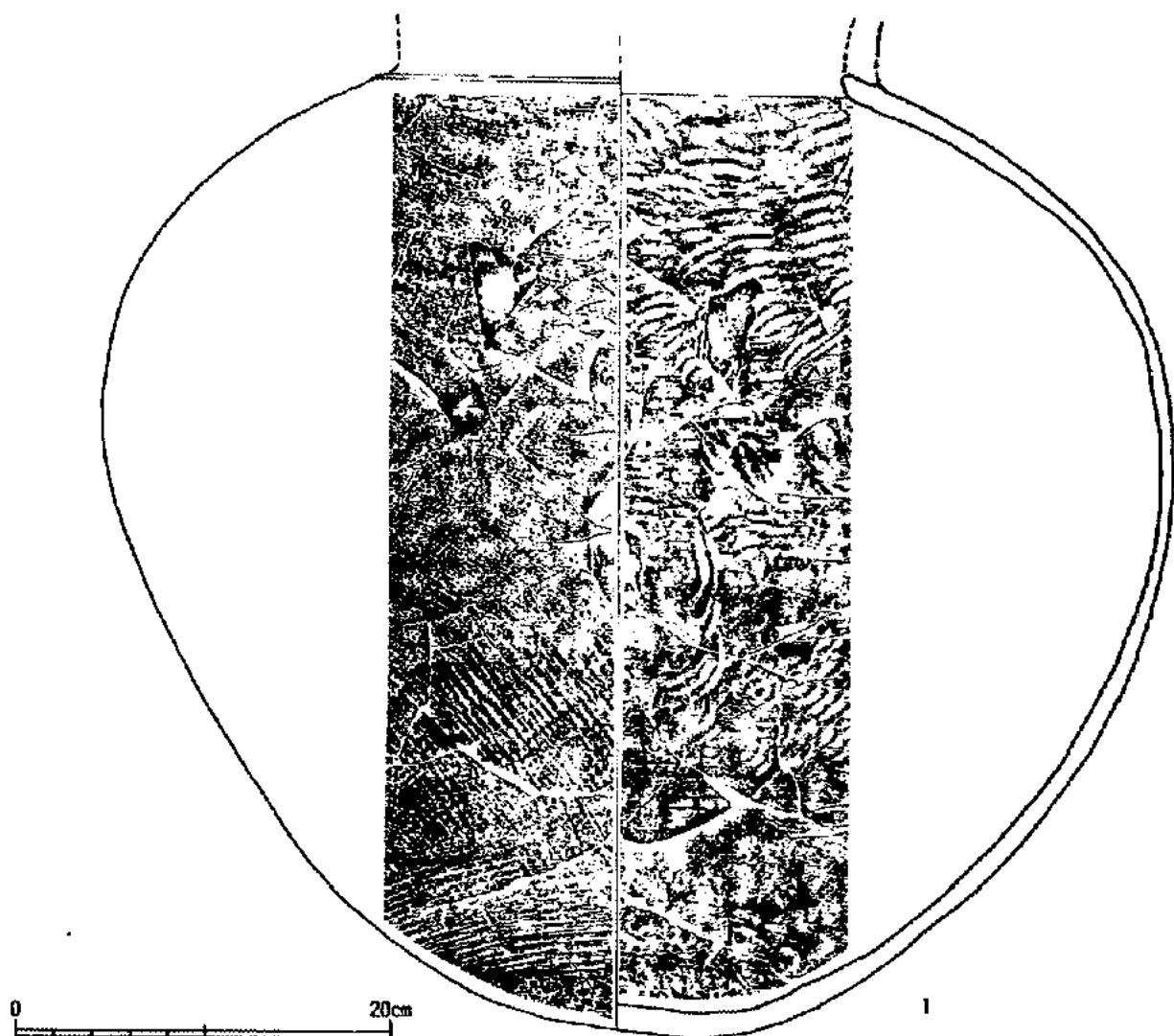


第65図 菩地原塔野B遺跡SO 8出土遺物実測図(1/4)

部である。

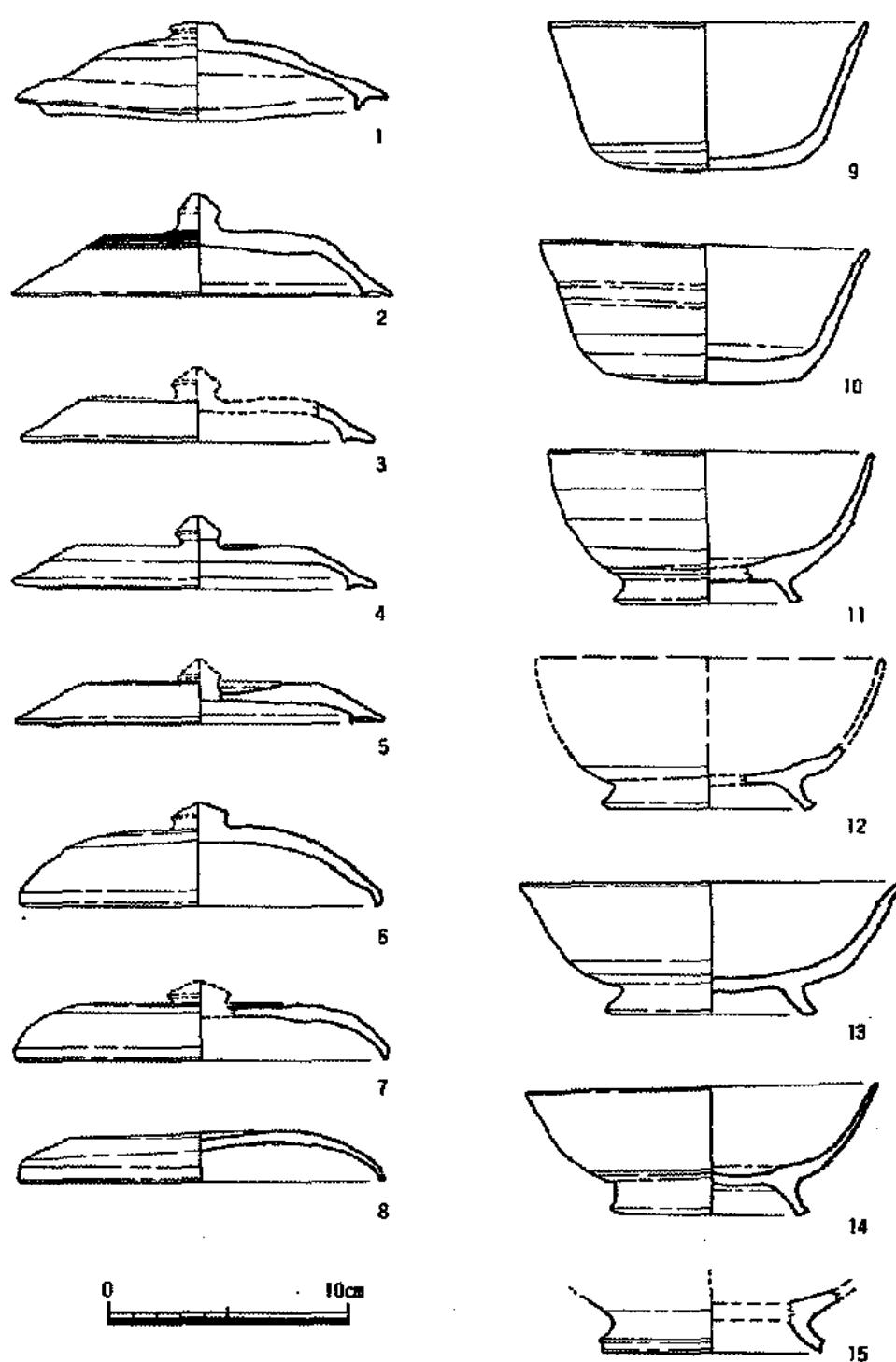
出土遺物(第65図～第68図)は、主にSO 8の周溝南東部から検出されたもので、須恵器甕・壺・高壺・壺・平瓶がある。この他には、玄室床面から土師器壺が検出され、墓道埋土からは青磁の小片が検出されている。第65図は、中形甕である。1は、口径26.3cm、器高40.2cmを測る。体部から引き出された口縁部は、緩やかに『く字』状に引き上げられ、端部は軽い跳ね上げ口縁となる。口唇部に

まれた部位を副室的空間として意識できる。この石材の外にもう1石あるが、これは羨門部となるものであろう。この羨門から先は、石材もやや小振りとなり、前庭側壁から墳丘根部に巡る石列へと連なる。石室プランは、長方形を呈している。当古墳の法量は、玄室長2.45m、玄室幅1.75mを測る。これに1マス35cmの方眼をあてると全長は18コマとなり、このうち前庭側壁長が3コマ、羨門長が3コマを占める。また、副室のようにみえる羨道長が3コマ、玄門部が2コマとなる。玄室長は7コマで玄室幅は5コマとなる。石室内に付設された敷石は、この玄室と玄門部までその外へは敷き詰めていない。これまでに読んだ数値をこの敷石にあわせると全長と敷石空間の長さが2:1となる。敷石部分だけをみると9コマを4:3:2で分けることができる。4コマは、玄室内において支障は立てないが大振りの敷石によって他の空間と区別した部位。3コマは、小振りの敷石空間で玄室内にとどまる部位。2コマは、玄門



第66図 富地原岩野B遺跡 SO 8 出土遺物実測図Ⅱ (1/4)

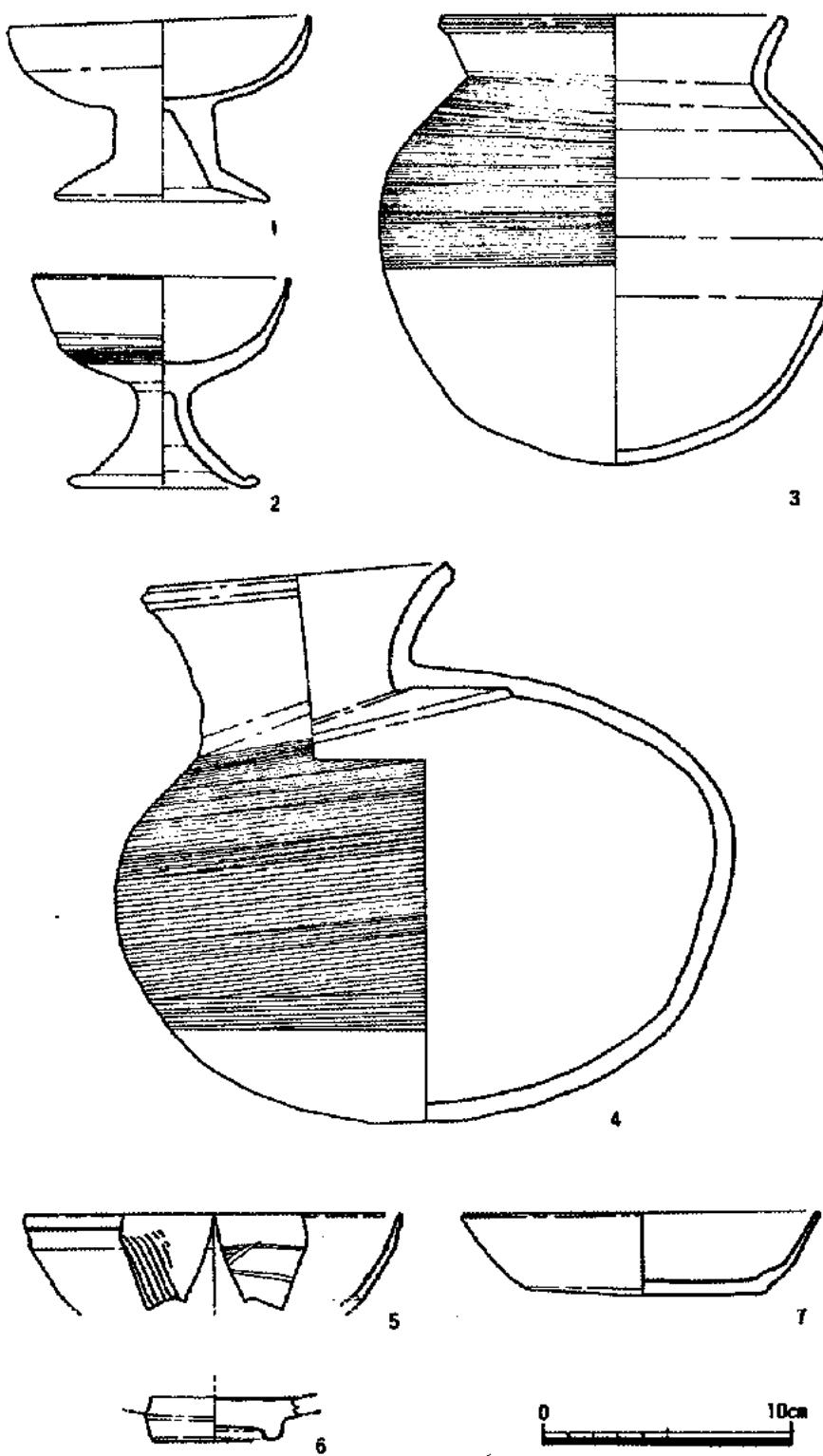
は、1条の突帯を巡らせている。胸部最大径は中央よりやや上部に位置している。器壁外面には、平行叩き調整の後にカキ目調整が施されている。内面には、同心円の当具痕が残る。2・3も同様の特徴を持つもので、2は復元口径23cm、3は復元口径25.4cmを測る。第66図は、大形甕である。この遺物は口頸部を失っている。体部と口頸部の接合点では、口縁内側から外側へ打ち欠いてきれいに削がれた痕跡を残すことや調査時に口頸部の破片を検出することができなかったことなどから祭祀として使用された可能性をみいだすことができる。胸部最大径は上部にあり、57.7cmを測る。体高は、52.1cmを測る。第67図は、坏の集成図である。1～8までは、坏蓋で、その形態により2類に大別することができる。I類は、天井部外面中央に宝珠摘みをもち口縁部にかえりがつくものである。体高の高低によってさらに細分することができる。1～5までがこれにあたる。II類は、天井部外面中央に宝珠摘みをもつてあるが、口縁部にかえりをもたないものである。体高の高低によってさらに細分することができる。6～8がこれにあたる。9～15までは、坏身で、その形態により2類に大別することができる。I類は、平底の底部から直線的に外上方へ伸びる体部をもつものである。9・10がこれにあたる。II類は、高台のつくもので、やや内轉しながら立上り、そのまま端部にいたって丸く



第67図 富地原岩野B遺跡 SO 8 出土遺物実測図Ⅲ (1/3)

おさめるものと口縁端部で若干外反するものに細分できる。前者が11・12で後者が13~15である。第68図1・2は、高杯である。1は、土師器のもので浅く丸味をもって内彎しながら立ち上がる杯部をもっており、端部は、心持ち揃んで直立させる。これに短い脚柱部がほぼ垂直につき、これから屈曲をもって器部が外へ開く。口径12.2cm、器高7.3cmを測る。2は、体部中位下段で屈曲して外上方に伸びる口縁をもつ杯で、体部と口縁部の境に1条の軽い沈線を巡らす。沈線下の体部には、カキ目を施している。脚は裾広がりに開くが、体部を超えない。口径10.5cm、器高8.5cmを測る。第69図3

は、広口壺である。体部はほぼ球形を呈するが、胴部最大径は、胴部中位よりやや上方に位置する。体部から引き出された口縁部は、緩やかに『く字』状に引き上げられ、端部は『コ字』状に仕上げ口唇部に凹線を巡らす。器壁外面には平行叩きの後カキ目調整とナデ調整を施す。このとき、体部下半は、ナデ調整で上半はカキ目調整である。口径13.8cm、器高18.3cmを測る。第68図4は、平瓶である。胴部最大径25.4cmで、体高18.3cmの扁球上の体部に12.2cmの口縁径をもつ口類部が取り付く。この口類部は、直線的に外上方に開くもので端部は『コ字』状に仕上げた後に軽い跳ね上げ口縁として



第68図 墓地原岩野B遺跡 SO 8 出土遺物実測図 IV (1/3)

口縁部へと続く。口縁端部は若干外反させている。外面は丁寧なナデ調整であり、内面はシグザグ方向の研磨調整である。内面は漆黒色を呈し、内面を焼している。外面にはこれがみられず、所謂、内黒や黒色土器Aとよばれるものである。

いる。第68図5・6は、いづれも青磁の破片で、5は、口縁部である。復元口径15.2cmを測る。外面には、櫛状工具による施文、内面には、片窓切りによる施文がみられる、同安窯系青磁と思われる。6は、底部の厚さが厚い。高台は断面四角形で、直立することから龍泉窯系青磁と思われる。第68図7は、土師器坏である。口径14.4cm、器高3.3cmを測る。底部は切り離しである。

2) SK20 (第69図)

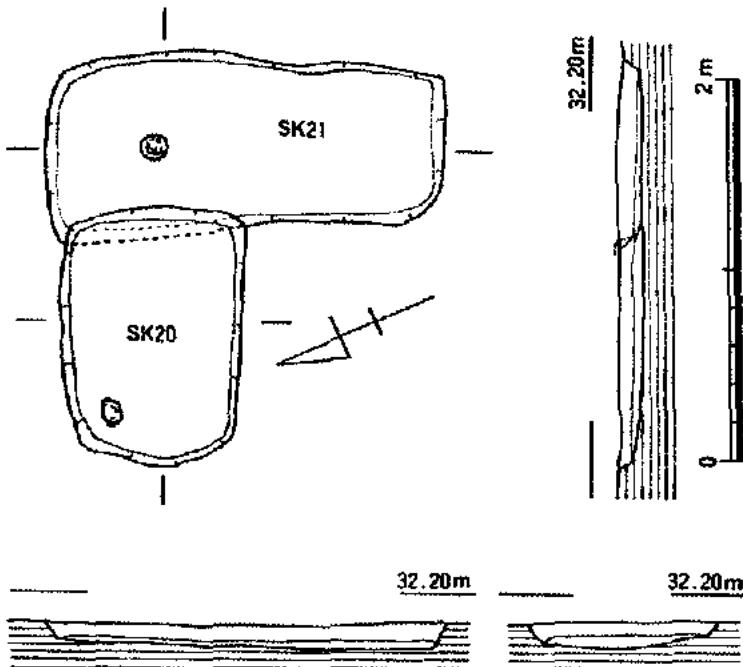
調査区域南群の南端でSB19・SK21を切っている。主軸を東西方向に向けるものである。墓壙の埋土は暗黄灰色を呈していた。墓壙内からは木質や棺をとめた釘などは出土しておらず、現段階では土塚墓か木棺墓かを見分けることができない。

出土遺物 (第70図1)
は、黒色土器である。口径15.2cmで、器高5.7cmを測る。高台は短く直立し疊付径の広いもので、体部は、内弯しながら丸味をもって立ち上がり、

3) SK21 (第69図)

調査区域南群の南端で SB19を切っており、SK20に切られる。上軸を南北方向に向けるものである。墓壙の埋土は暗黄褐色を呈していた。

出土遺物（第70図2）は、黒色土器である。口径15.5cmで、器高5.8cmを測る。高台は短く直立し盤付径の広いもので、体部は、内壁しながら丸味をもって立ち上がり、口縁部へと続く。口縁端部は若干外反させ、口唇部は面取りしている。外面は横方向の箆研磨を施し内面はジグザグ方向の研磨調整である。内外面共に漆黒色を呈し、焼している。所謂、黒色土器Bとよばれるものである。



第69図 富地原岩野B遺跡 SK20・21実測図 (1/40)

4. ま と め

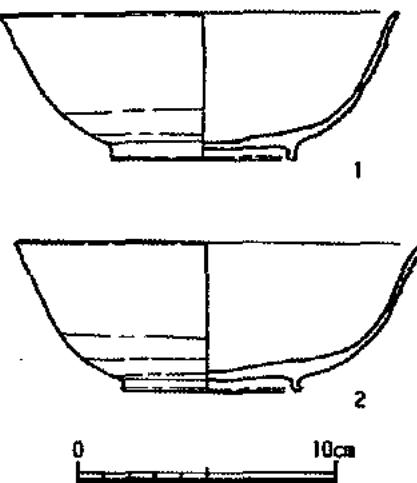
今回の調査において、新立山と麻山から派生する舌状丘陵上に分布する遺跡を検出することができた。このことは、釣川の形成する宗像平野とでもよぶ東部地域を生活基盤としていたであろう富地原・名残・吉武地区などに所在する各遺跡を理解する上で貴重な追加資料となるもので、同地域の歴史を考える上でもその一助となるものであろう。以下、今回検出した遺構や出土遺物に触れながらまとめたい。

1) 集落跡について

弥生時代の住居跡が、方形住居から円形住居にかわり、これが方形住居にかわるという大きな変遷は先学の研究によって周知のものとなっている。そこで、当遺跡において検出された住居跡群をまとめてみると円形住居跡、方形住居跡、掘立柱建物のいづれかにあてはまった。ここでは、この3種類に分けられた各遺構が当丘陵上でどのような位置を占めていたものか。また、各遺構がどのように変遷していったものかをみるとこととする。

まず、円形住居跡についてみるとこととする。当遺跡検出の円形住居跡は、出土遺物が少数のため、明確には断定しがたいが、住居跡柱穴出土の遺物は弥生時代中期前葉から中期中頃のものであり、遺構はSB18のように所謂、新期松菊里型住居（註1）をはじめ、この発展型を示すものであり、当遺構を弥生時代中期前葉から中期中頃のものとすることができる。

つぎに方形住居跡についてみるとこととする。当遺跡検出の方形住居跡は、その形態によって3類に



第70図 富地原岩野B遺跡
SK20・21 出土遺物実測図 (1/3)

分けられる。Ⅰ類は、SB5に代表される。中央に焼床面をもち、これを挟んで2本柱を立てる構造のものである。床面の一括遺物から当住居は、弥生後期前半代に比定できよう。Ⅱ類は、SB17に代表される。中央に焼床面をもち、これを挟んで2本柱を立てる構造のもので、ベッド状遺構を付設する。当遺構には、Ⅰ類に属する住居跡が床面下部に埋め殺されており、Ⅰ類がⅡ類に先行することを表す。床面の一括遺物から当住居は、弥生後期後半代に比定できよう。Ⅲ類は、SB15に代表される。焼床面が中央からはずれ、4本柱を立てる構造のものである。当遺構は時期決定できる資料が乏しいため保留したい。

最後に掘立柱建物についてみるとこととする。当遺跡検出の掘立柱建物は、SB9に代表されるが、焼土坑が付設されているため、4本柱を立てる構造の住居跡の可能性を残している。この時期は、焼土坑内の一括遺物から弥生時代中期末に比定できよう。

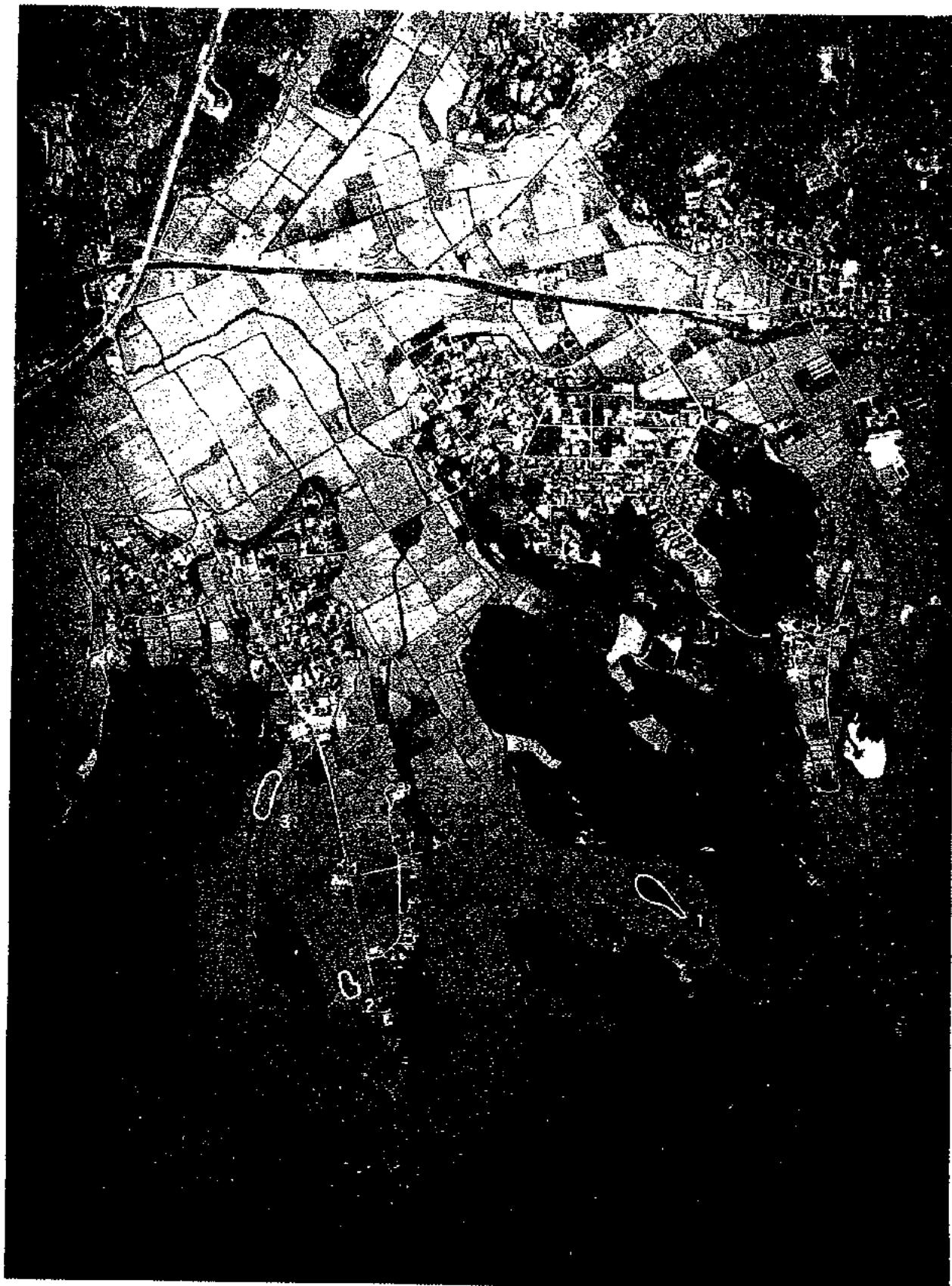
いま、各遺構の時期をみてきたが、その変遷についてみることとする。当遺跡の所在しているこの丘陵は釣川の形成する宗像平野南東部域を望む舌状丘陵であり、肥沃な谷水田を営める環境にある。この地に新期松菊里型住居をもって生活がはじまったのであろう。丘陵東緩斜面の高台にSB18は建てられている。この後SB1・SB6などの円形住居が続々と進出(註2)してくる。これにより東斜面の高台は飽和状態となり当丘陵は一時廃絶する。この時期に、宗像平野南東部域の丘陵には墳墓が造営されている。土塚墓から鉄戈を出土した富地原梅木遺跡などはその好例であろう。再び当丘陵が生活の場となったのは、SB5・SB9の營まれた弥生時代後期はじめのことである。住居の規模は小さいもので、当遺跡の北群に固まるように分布している。弥生時代後期後半になるとSB18が当初建てられていた好位置にSB17が建てられている。この住居の一括遺物の中には、丸底を呈する正格子叩き調整を施された所謂、朝鮮系軟質土器(註3)が検出されている。周辺の遺跡を展望すると宗像平野南東部域では、富地原梅木遺跡で無文土器が出土し、富地原川原田遺跡では鳥足文叩き調整を施す土器などを検出している。このように、弥生時代後期に小規模な住居を構えた富地原岩野B遺跡の住民は、その行動を広げ古墳時代前期には、宗像平野南東部域を核とした交易等が行われていたのではないだろうか。宗像平野南東部域では近年の開発によって集落及び墳墓の資料が増加しつつあり、今後の新資料の増加によって居住地と墳墓地の関係を明らかにできることを期待したい。

註

1. 中間研志「松菊里型住居—我国稻作農耕受容期における竪穴住居の研究—」『東アジアの考古学と歴史』中 1987
2. 鷲口達也「聚落立地の変遷と土地開発」『東アジアの考古学と歴史』中 1987
3. 今津啓子「大阪湾沿岸地域出土の朝鮮系軟質土器」『東アジアの考古学と歴史』下 1987

图 版

図版 1



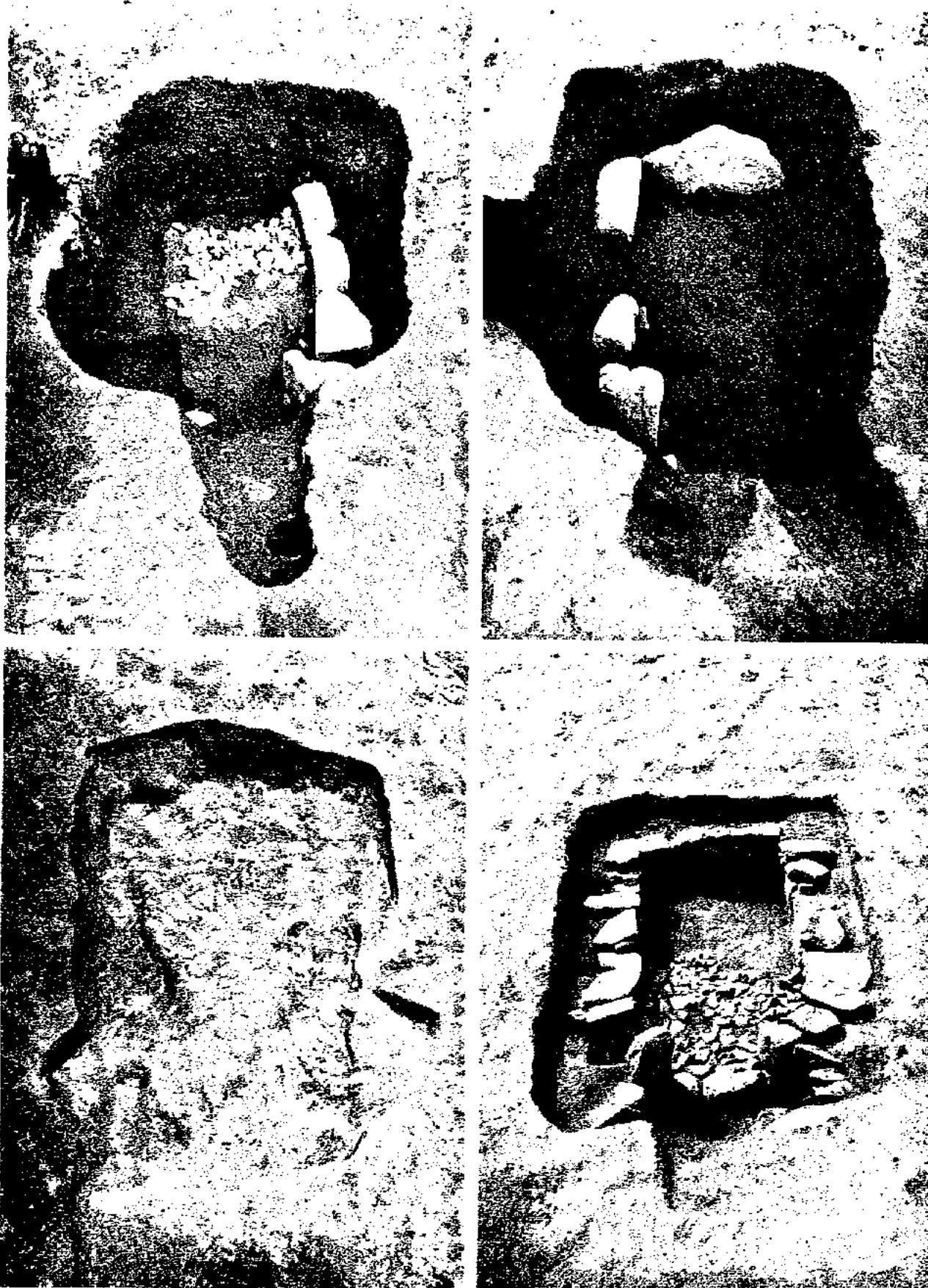
富地原地区周辺遺跡航空写真

- 1 富地原上瀬ヶ浦遺跡 2 富地原惣原遺跡 3 富地原岩野口遺跡
(昭和53年6月撮影 編尺 1:12,500)



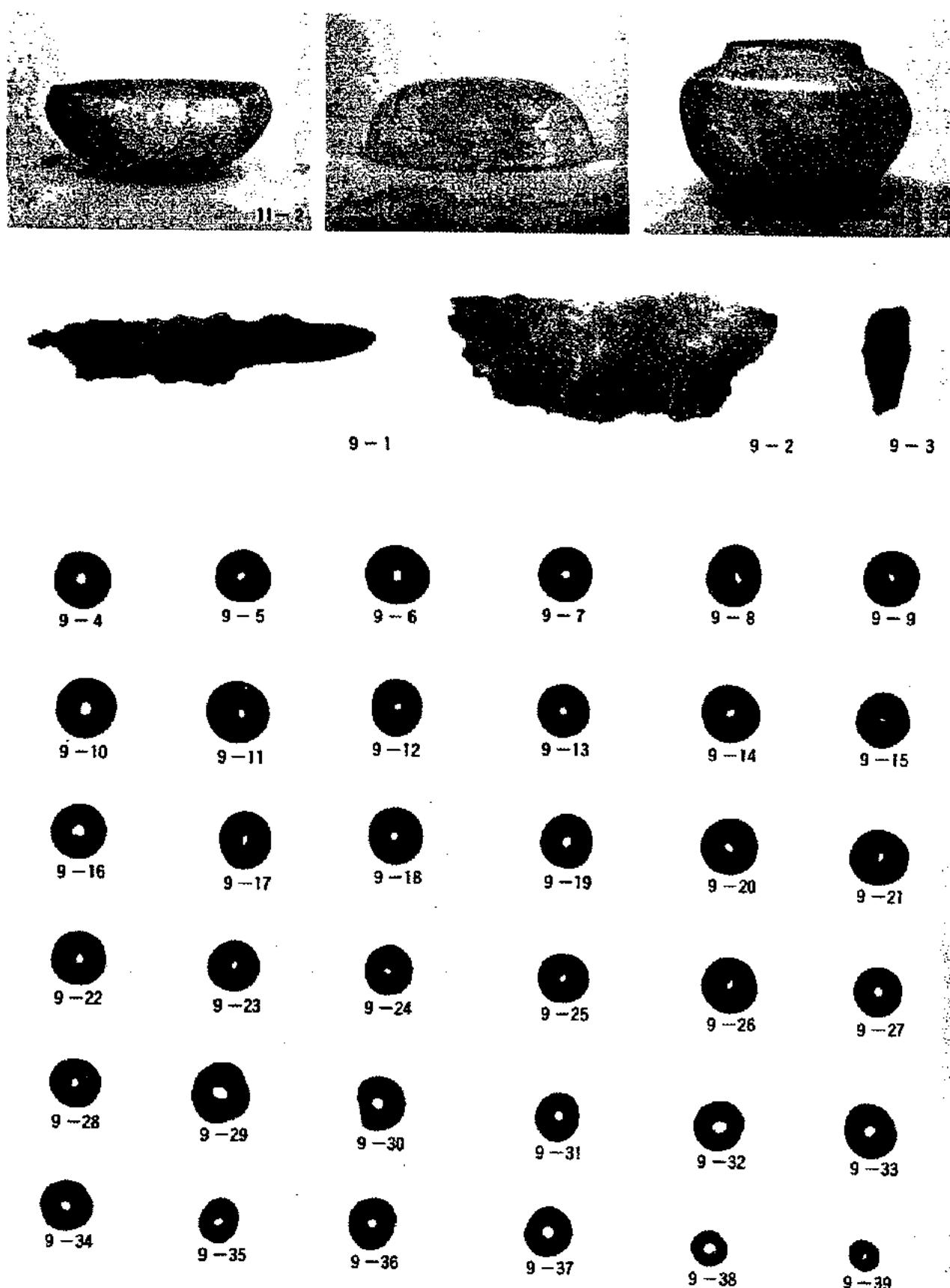
上 富地原上瀬ヶ浦遺跡遠景（北から）

下 富地原上瀬ヶ浦遺跡全景



左上 SO 1 主体部
左下 SO 3 主体部

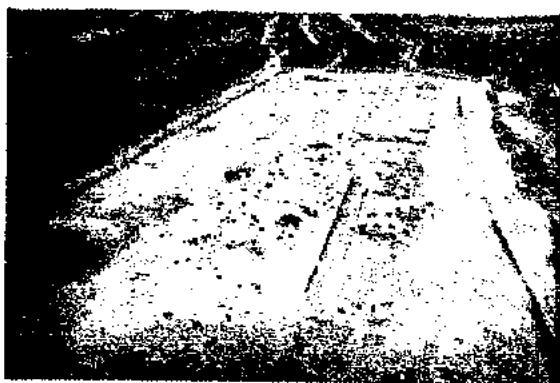
右上 SO 2 主体部
右下 SO 4 主体部



出土 遺 物



1 富地原惣原遺跡全景（東から）



5 富地原惣原遺跡全景（南から）



2 南側掘立柱建物群



6 SB 3



3 SB 1



7 SB 4・SB 5



4 SB 2



8 SB 6



1 SK 2



5 SK52



2 SK 4



6 ST 8



3 SK 7



7 SK 9 - SD68

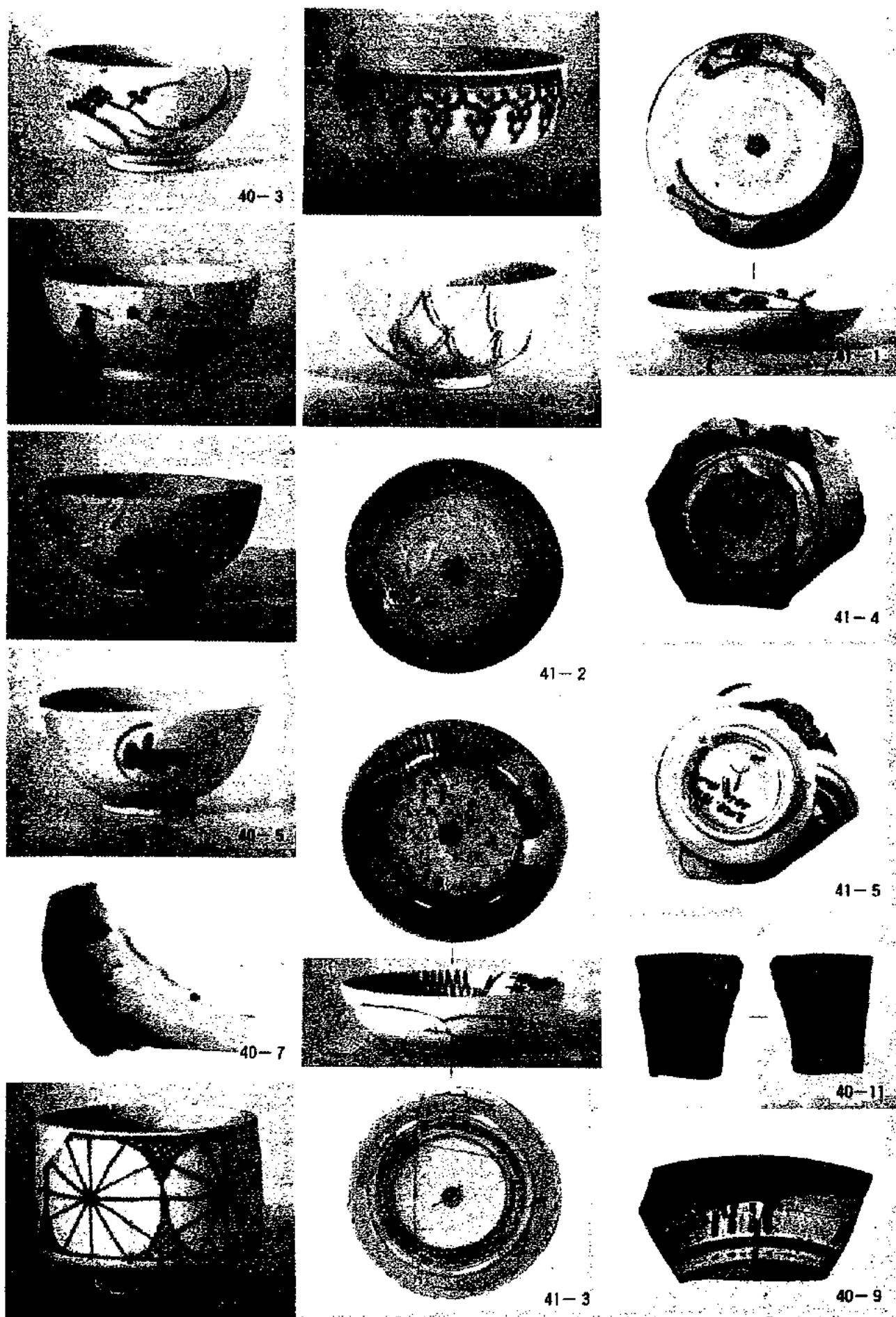


4 SK50



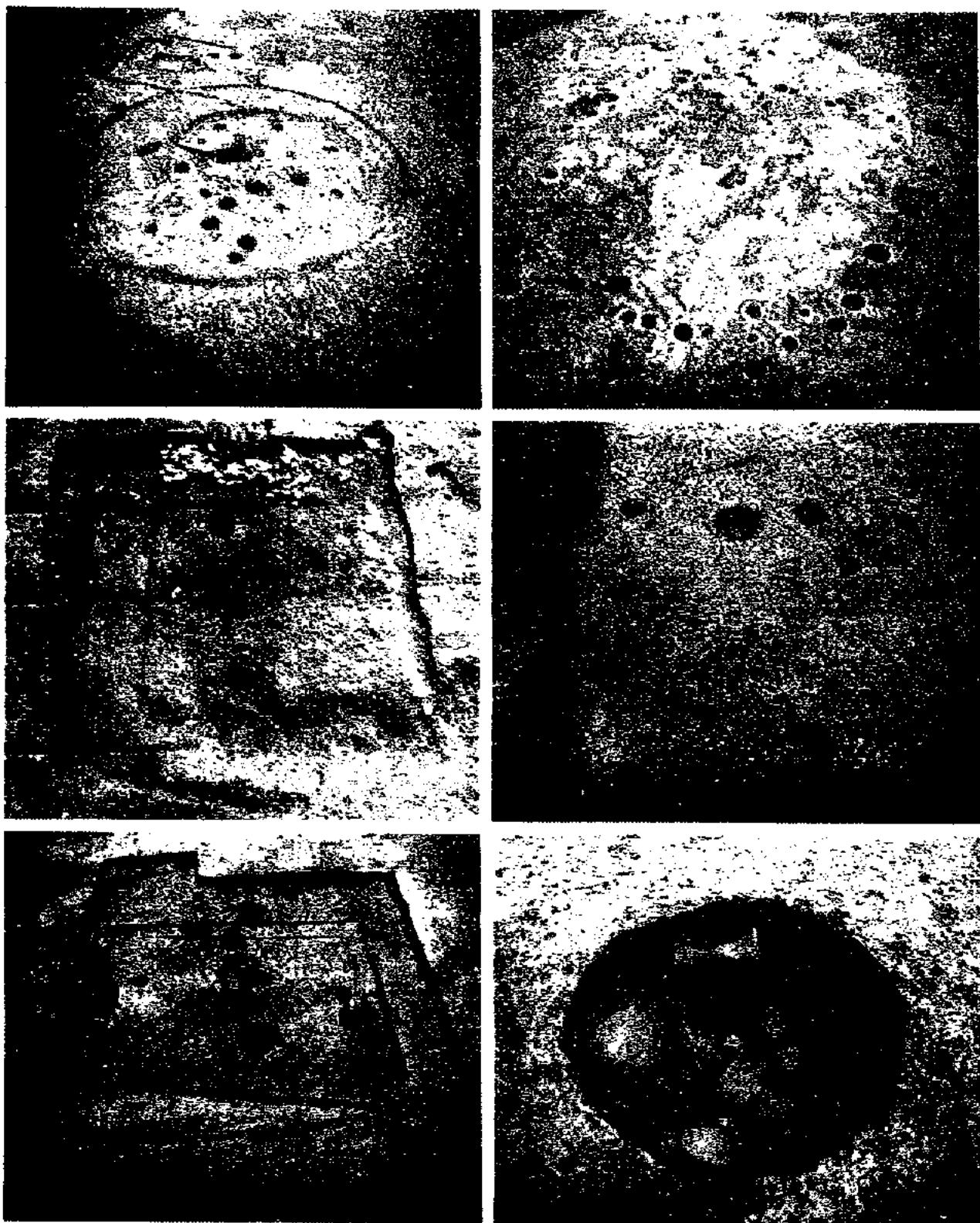
出土遺物 I







上 富地原岩野日遺跡遠景（東から）
下 富地原岩野日遺跡全景



左上 SB18 円形住居跡
左中 SB 6 方形住居跡
左下 SB17 方形住居跡

右上 SB16 円形住居跡
右中 SB 9 捕立柱建物跡
右下 SB 9 付設焼土坑



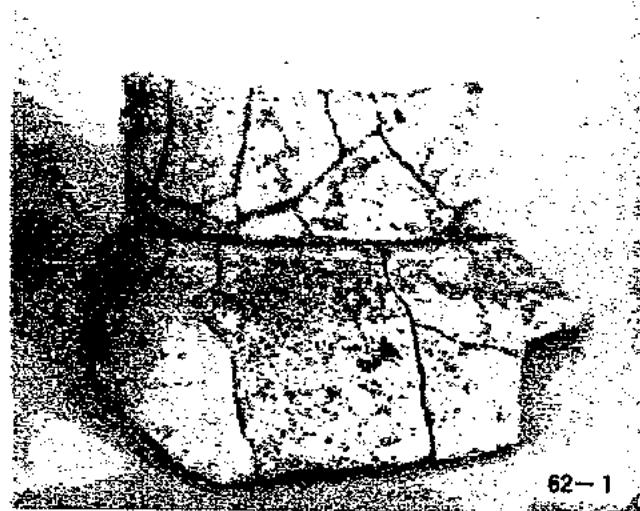
57-1



58-1



55-5



62-1



55-1

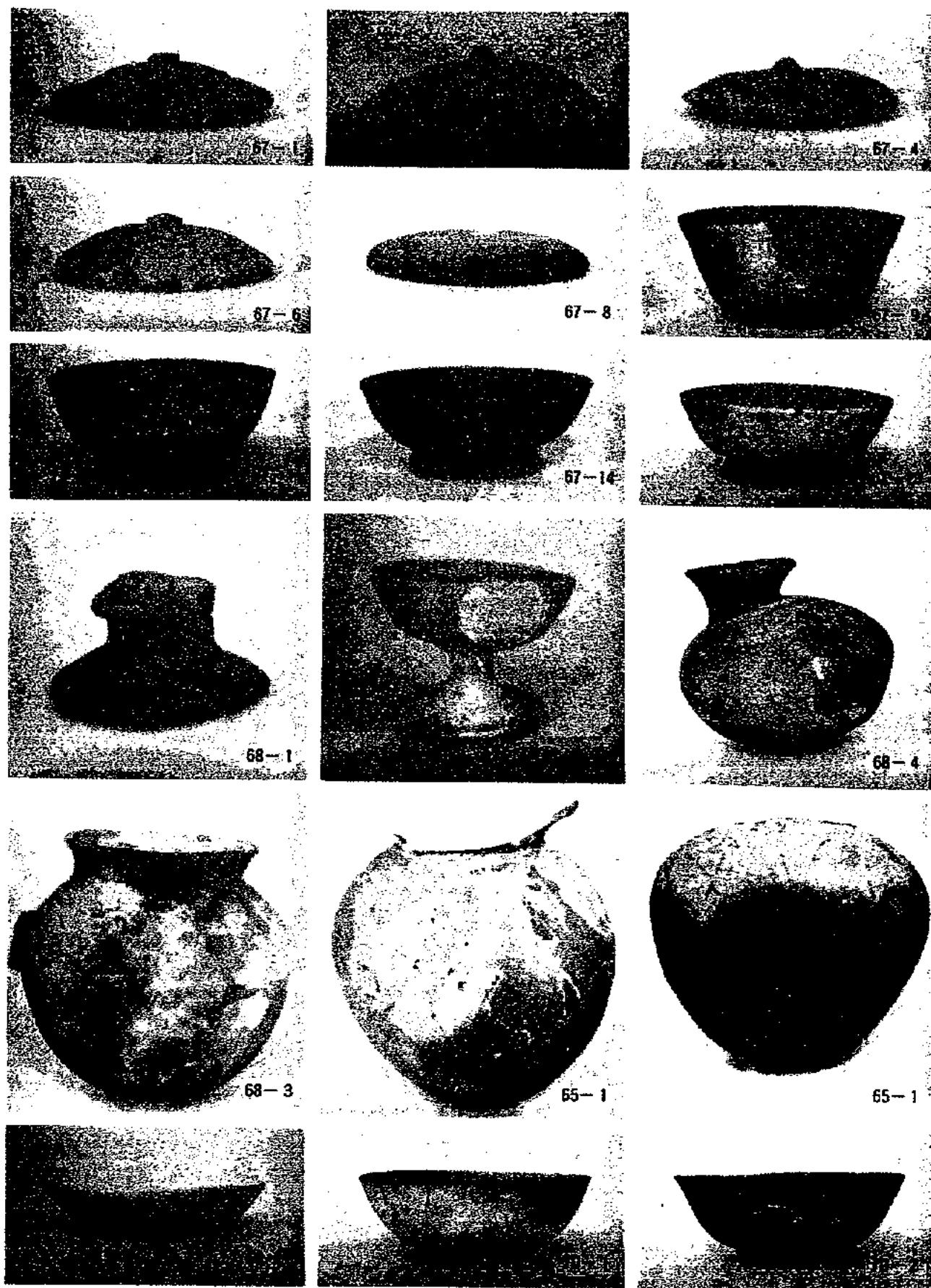


62-4

出土遺物 I

図版 13

富地原岩野日遺跡



出土 遺物 Ⅱ

富地原上瀬ヶ浦

宗像市文化財調査報告書

第 38 集

平成 6 年 3 月 31 日

発行 宗像市教育委員会
宗像市大字東郷 995 番地

印刷 アオヤギ株式会社
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9 の 31